

入耕地遺跡 (第8・9・11地点) 正福院貝塚 (第2地点)

市内遺跡群発掘調査報告書XXV

2018

白岡市教育委員会

入耕地遺跡 (第8・9・11地点)
正福院貝塚 (第2地点)

市内遺跡群発掘調査報告書XXV

2018

白岡市教育委員会

序

このたび白岡市教育委員会では、『入耕地遺跡（第8・9・11地点）・正福院貝塚（第2地点）』の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあり、平成以降住宅やマンション建設が相次いできました。平成24年10月には、目覚ましい人口増加を背景に市制が施行されました。一方で郊外ではまだ緑豊かな田園風景が広がっています。

入耕地遺跡とその北に位置する正福院貝塚とは一体となって、今から3千年から2千3百年前の縄文時代後期から晩期の環状盛土遺構が展開することが知られていました。今回報告します2遺跡4地点においても、縄文時代後期から晩期を中心に重要な成果を得ることができました。発見された豊富な出土遺物の数々は、太古の昔に根付いた人々の活発な活動が窺われます。また、入耕地遺跡第11地点では、中世の入耕地館跡に関連する可能性が高い掘立柱建物跡や柵列が検出されるなど、往時の繁栄を偲ぶ痕跡が発見されています。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。当報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護のご理解につながれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成に当たり、地権者や事業主様、地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

白岡市教育委員会
教育長 長島 秀夫

例 言

- 1 本書は、埼玉県白岡市内に所在する入耕地遺跡（第8・9・11地点）・正福院貝塚（第2地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点所在地は以下のとおりである。
 - 入耕地遺跡（第8地点）：白岡市白岡910-1他
 - 入耕地遺跡（第9地点）：白岡市白岡910-2、-3
 - 入耕地遺跡（第11地点）：白岡市白岡908-1、909-7
 - 正福院貝塚（第2地点）：白岡市白岡941
- 3 発掘調査は、白岡市教育委員会と白岡市遺跡調査会が主体となって実施した。入耕地遺跡（第8地点）の調査費用は株式会社 飯田産業 代表取締役 兼井 雅史氏が負担した。入耕地遺跡（第11地点）の調査費用は株式会社 東栄住宅 代表取締役社長 西野 弘氏が負担した。正福院貝塚（第2地点）の調査費用は宗教法人 正福院 代表役員 杉崎 夏夫氏が負担した。それ以外の調査費用及び整理作業費用は白岡市教育委員会が負担し、一部は国庫及び県費補助金を受けて実施した。
- 4 調査期間は、以下のとおりである。
 - 入耕地遺跡（第8地点）：平成19年12月6日から平成20年2月19日
 - 入耕地遺跡（第9地点）：平成21年9月11日から平成21年9月18日（国庫補助事業）
 - 入耕地遺跡（第11地点）：平成25年4月8日から平成25年6月11日
 - 正福院貝塚（第2地点）：平成13年4月17日から平成13年4月19日
- 5 指示通知番号は、以下のとおりである。
 - 入耕地遺跡（第8地点）：平成19年11月8日付け教生文第3-716号（指示）
平成20年1月10日付け教生文第2-54号（通知）
 - 入耕地遺跡（第9地点）：平成21年7月30日付け教生文第5-674号（指示）
平成21年9月9日付け教生第186号（通知）
 - 入耕地遺跡（第11地点）：平成25年4月12日付け教生文第5-1596号（指示）
平成25年6月10日付け教生文第2-13号（通知）
 - 正福院貝塚（第2地点）：平成13年5月8日付け教文第3-98号（指示）
平成13年5月8日付け教文第2-23号（通知）
- 6 発掘調査は、入耕地遺跡（第11地点）を奥野 麦生と杉山 和徳が担当し、それ以外を松崎 慶喜が担当した。
整理作業及び報告書作成作業は、奥野と杉山が担当した。
- 7 遺物の実測は、奥野と杉山が担当し、青木 美代子、増田 香織の補助を得た。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。
 - Ⅲ・Ⅳの遺物：奥野
 - それ以外：杉山
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地権者である株式会社 飯田産業 代表取締役 兼井 雅史様、

小杉 英紀様、株式会社 東栄住宅 代表取締役社長 西野 弘様、宗教学人 正福院 代表役員 杉崎 夏夫様の御理解、御協力を得て実施した。また、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。池尻 篤、植木 雅博、鬼塚 知典、金子 直行、河井 伸一、小宮 雪晴、篠田 泰輔、鈴木 敏昭、関 絵美、田中 和之、田中 祐樹、油布 憲昭。

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育委員会生涯学習文化財課、白岡市文化財保護委員会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）。

- 10 発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々の参加協力を得た。

青木 健次、青木 美代子、伊藤 武子、岩沼 靖生、大久保 久子、大塚 泰徳、大野 美沙子、折原 奈美子、桂 都、金子 悦子、川島 みつ、工藤 秀夫、黒田 雅之、坂田 玲子、佐藤 利勝、下田 富士子、東海林 正、菅原 春男、高橋 ちえみ、高橋 安代、竹内 玖仁代、田中 玉緒、椿 忠夫、鳥海 恵子、中尾 亜子、中村 正勝、中山 敏夫、藤巻 良雄、星 和枝、植島 武二、増田 香織、松田 彰、水澤 和子、森本 美代子、山田 時恵、山田 登、吉川 新一郎、六川 清、若月 俊夫、渡邊 宏士朗、渡辺 英子（50音順、敬称略）。

- 11 調査組織は以下のとおりである。

調査組織（平成29年度）

調査主体者 白岡市教育委員会

事務局	教 育 長	長島 秀夫
	教 育 部 長	野口 仁史
	生涯学習課長	齋藤 久
	生涯学習課長補佐	中太 隆明
	学習支援担当／ 文化振興担当主査	奥野 麦生（調査担当） 同主任 杉山 和徳（調査担当）

凡 例

- 1 本書で用いる方位は国土座標の方位で、標高は海拔を表す。
- 2 使用した基準点と遺跡原点（日本測地系平面直角座標第9系）は以下のとおりである。
入耕地遺跡：X = 1,710.988 m, Y = -15,493.437 m (5B コウ81)
X = 1,709.000 m, Y = -15,493.000 m (遺跡原点)
正福院貝塚：X = 1,776.579 m, Y = -15,598.883 m (5A コウ101)
X = 1,823.000 m, Y = -15,587.000 m (遺跡原点)
巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。
- 3 本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構：1/60 遺物：土器実測図・拓影図・石器実測図1/3
- 4 挿図と表中の略号は以下のとおりである。
H：住居跡 SB：掘立柱建物跡 SI：竪穴状遺構 SK：土坑 SD：溝跡 SE：井戸跡 P：ビット
GP：グリッドビット
- 5 住居跡内の数値は、検出面から底面までのビットの深度を表し、単位はcmである。
- 6 遺構の計測表・遺物の観察表において残存値には（ ）を付して表記した。
- 7 実測図中の断面の●は繊維土器を表した。
- 8 磁着度はリング状フェライト磁石（30×17×5mm）を用いて、資料の磁着反応を1から順に数字で評価したもので、数値が大きいほど着磁性が強いことを意味する。磁石を用い、35cmの高さから木綿糸で吊り下げた状態で使用する。資料を順次接近させることにより磁石が動き始める距離単位（6mmを1単位とする）を評価台紙上で読み取り、数値化された遺物の評価をする方法である。磁着度0は非磁着を表す。

目 次

序		(3) 調査区出土遺物…………… 38
例言		4 第11地点の遺構と遺物…………… 41
凡例		(1) 住居跡…………… 41
目次		(2) 掘建柱建物跡…………… 41
		(3) 竪穴状遺構…………… 41
I 調査の概要…………… 1		(4) 土坑…………… 56
1 調査に至る経緯…………… 1		(5) 溝跡……………104
2 調査の経過…………… 1		(6) 井戸跡……………107
		(7) 地下式坑……………107
II 位置と環境…………… 3		(8) グリッド出土遺物……………109
1 遺跡の立地と地理的環境…………… 3		
2 歴史的環境…………… 3		IV 正福院貝塚(第2地点)の調査……………119
		1 遺跡の概要……………119
III 入耕地遺跡(第8・9・11地点)の調査…………… 7		2 遺構と遺物……………119
1 遺跡の概要…………… 7		(1) 土坑……………119
2 第8地点の遺構と遺物…………… 7		(2) ビット……………119
(1) 土坑…………… 7		(3) 調査区出土遺物……………121
(2) 溝跡…………… 22		
(3) 井戸跡…………… 31		V 総 括……………140
(4) トレンチ出土遺物…………… 32		1 入耕地遺跡……………140
(5) 調査区出土遺物…………… 36		2 正福院貝塚……………141
3 第9地点の遺構と遺物…………… 38		
(1) 土坑…………… 38		写真図版
(2) 溝跡…………… 38		報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 入耕地遺跡・正福院貝塚と周辺の遺跡分布図…………… 5	第5図 トレンチ6及び遺構図…………… 10
第2図 入耕地遺跡・正福院貝塚の位置と発掘調査区…………… 6	第6図 トレンチ7及び遺構図…………… 11
第3図 入耕地遺跡(第8地点)トレンチ配置図…………… 8	第7図 トレンチ8及び遺構図…………… 12
第4図 トレンチ1~5及び遺構図…………… 9	第8図 トレンチ9及び遺構図…………… 12
	第9図 トレンチ10~12及び遺構図…………… 13
	第10図 第1~15土坑…………… 14
	第11図 第16~30土坑…………… 17

第12図	第31~39土坑	20	第45図	土坑出土遺物 (4)	70
第13図	土坑出土遺物 (1)	21	第46図	第87・88・90~96・150号土坑	73
第14図	溝跡出土遺物 (1)	25	第47図	第97・98・104・108~113・115・129・ 155・180号土坑	76
第15図	溝跡出土遺物 (2)	26	第48図	第114・117~127・141・157・158・177・ 235号土坑	79
第16図	溝跡出土遺物 (3)	28	第49図	土坑出土遺物 (5)	81
第17図	溝跡出土遺物 (4)	30	第50図	第130~140・142・147~149・153・ 156号土坑	83
第18図	第1号井戸跡	32	第51図	第143~146・151・152・154・160~162・ 164・173・174・178号土坑	85
第19図	トレンチ1~5出土遺物	34	第52図	第163・165~168・170~172・175・176・ 179・181~184・186・187号土坑	89
第20図	トレンチ7~9・11出土遺物	35	第53図	第185・188~204・212号土坑	93
第21図	調査区出土遺物 (1)	37	第54図	土坑出土遺物 (6)	96
第22図	入耕地遺跡 (第9地点) 全測図 及び遺構図	39	第55図	第205~211・213~218号土坑	98
第23図	第40~43号土坑	40	第56図	第219~233号土坑	101
第24図	調査区出土遺物 (2)	40	第57図	土坑出土遺物 (7)	103
第25図	入耕地遺跡 (第11地点) 全測図	42	第58図	第1号溝跡	105
第26図	第1号住居跡	44	第59図	溝跡出土遺物 (5)	106
第27図	第1号掘立柱建物跡 (1)	45	第60図	第2・3井戸跡	108
第28図	第1号掘立柱建物跡 (2)	46	第61図	井戸跡出土遺物	108
第29図	第2号掘立柱建物跡 (1)	47	第62図	第1号地下式坑	109
第30図	第2号掘立柱建物跡 (2)	48	第63図	グリッド出土遺物 (1)	110
第31図	第3号掘立柱建物跡 (1)	49	第64図	グリッド出土遺物 (2)	112
第32図	第3号掘立柱建物跡 (2)	50	第65図	グリッド出土遺物 (3)	114
第33図	第4号掘立柱建物跡 (1)	51	第66図	グリッド出土遺物 (4)	115
第34図	第4号掘立柱建物跡 (2)	52	第67図	グリッド出土遺物 (5)	117
第35図	第1号竪穴状遺構	53	第68図	調査区出土遺物 (3)	118
第36図	竪穴状遺構出土遺物 (1)	54	第69図	正福院貝塚 (第2地点) 全測図 及び遺構図	120
第37図	竪穴状遺構出土遺物 (2)	55	第70図	土坑・ビット焼土跡出土遺物	121
第38図	竪穴状遺構出土遺物 (3)	56	第71図	第1層出土遺物 (1)	123
第39図	第44~56・99・100・159号土坑	57	第72図	第1層出土遺物 (2)	124
第40図	土坑出土遺物 (2)	60	第73図	第2層出土遺物 (1)	126
第41図	第57~62・66~70・101~103・ 116号土坑	61	第74図	第2層出土遺物 (2)	127
第42図	第63~65・71~75・77~79・82・83・ 169号土坑	64	第75図	攪乱1出土遺物 (1)	129
第43図	土坑出土遺物 (3)	66			
第44図	第76・80・81・84~86・89・105~107・ 128・234号土坑	69			

第76図	攪乱1出土遺物(2)……………	130	第80図	調査区出土遺物(4)……………	136
第77図	攪乱2出土遺物(1)……………	132	第81図	調査区出土遺物(5)……………	137
第78図	攪乱2出土遺物(2)……………	133	第82図	調査区出土遺物(6)……………	138
第79図	攪乱4出土遺物……………	134			

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表……………	4	第6表	溝跡・井戸跡号出土石器計測表……………	107
第2表	入耕地遺跡(第8地点)出土石器計測表……………	37	第7表	グリッド出土石器計測表……………	118
第3表	掘立柱建物跡ピット計測表……………	50	第8表	正福院貝塚(第2地点)ピット計測表……………	121
第4表	竪穴状遺構出土石器計測表……………	56	第9表	正福院貝塚(第2地点)出土石器計測表……………	138
第5表	土坑出土石器計測表……………	104			

写真図版目次

図版1	掘削作業状況(1) 掘削作業状況(2) 実測作業状況(1) 実測作業状況(2)		第18号土坑 第19号土坑 第25号土坑	
図版2	トレンチ2 トレンチ6		図版6	第26号土坑 第27号土坑 第31号土坑
図版3	トレンチ7 トレンチ9		第32・33号土坑 第34号土坑 第35号土坑	
図版4	第1号土坑 第2号土坑 第3・4号土坑 第5号土坑 第6号土坑 第7号土坑 第8号土坑 第9号土坑		第36号土坑 第39号土坑	
図版5	第10・11号土坑 第13号土坑 第14号土坑 第16・24号土坑 第17号土坑		図版7	第5・9号溝跡 第6号溝跡 第8・12・17号溝跡 第9号溝跡 第10号溝跡 第11号溝跡 第12号溝跡 第13号溝跡
			図版8	第14号溝跡 第15号溝跡

	第21号溝跡		第76号土坑
	第24号溝跡		第77号土坑
	第26号溝跡		第78号土坑
	第27号溝跡		第80・81号土坑
	第28号溝跡		第84~86・89・105号土坑
	第1号井戸跡	図版17	第90号土坑
図版9	土坑出土遺物 (1)		第142号土坑
	溝跡出土遺物 (1)		第144・145号土坑
	溝跡出土遺物 (2)		第170~172号土坑
	溝跡出土遺物 (3)		第176号土坑
	溝跡出土遺物 (4)		第182号土坑
	調査区出土遺物 (1)		第183号土坑
図版10	トレンチ1~5出土遺物		第185号土坑
	トレンチ7~11出土遺物	図版18	第186号土坑
図版11	調査区西部全景		第190号土坑
	調査区東部全景		第192~196号土坑
図版12	第40号土坑		第197号土坑
	第41号土坑		第199~202号土坑
	第42・43号土坑		第203・204・212号土坑
	第30号溝跡		第208・209号土坑
	第31号溝跡		第213号土坑
	調査区出土遺物 (2)	図版19	第217号土坑
図版13	調査区全景 (北より)		第221・222号土坑
	調査区全景 (南より)		第223号土坑
図版14	第1号住居跡		第225号土坑
	第1号竪穴状遺構		第232号土坑
図版15	第44・45・159号土坑		第2号井戸跡
	第46号土坑		第3号井戸跡
	第48号土坑		第1号地下式坑
	第49号土坑	図版20	第32号溝跡
	第51号土坑		調査区北半部柵列跡
	第52号土坑	図版21	竪穴状遺構出土遺物 (1)
	第54・55号土坑		竪穴状遺構出土遺物 (2)
	第60号土坑		竪穴状遺構出土遺物 (3)
図版16	第72号土坑		土坑出土遺物 (2)
	第73号土坑	図版22	土坑出土遺物 (3)
	第74・75号土坑		土坑出土遺物 (4)

- | | | | |
|------|--------------|------|----------------|
| | 土坑出土遺物 (5) | | 南側調査区第2層遺物出土状況 |
| | 土坑出土遺物 (6) | | 焼土跡検出状況 |
| 図版23 | 土坑出土遺物 (7) | 図版27 | 土坑・ビット・焼土跡出土遺物 |
| | 溝跡出土遺物 (5) | | 第1層出土遺物 (1) |
| | 井戸跡出土遺物 | | 第1層出土遺物 (2) |
| | グリッド出土遺物 (1) | | 第2層出土遺物 (1) |
| | グリッド出土遺物 (2) | | 第2層出土遺物 (2) |
| 図版24 | グリッド出土遺物 (3) | 図版28 | 攪乱1出土遺物 (1) |
| | グリッド出土遺物 (4) | | 攪乱1出土遺物 (2) |
| | グリッド出土遺物 (5) | | 攪乱2出土遺物 (1) |
| | 調査区出土遺物 (3) | | 攪乱2出土遺物 (2) |
| 図版25 | 北側調査区全景 | | 攪乱4出土遺物 |
| | 南側調査区全景 | 図版29 | 調査区出土遺物 (4) |
| | 調査地点遠景 | | 調査区出土遺物 (5) |
| 図版26 | 南側調査区東壁 | | 調査区出土遺物 (6) |

I 調査の概要

1 調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.92km²の市で、東西約10km、南北約6kmと東西方向に長い。市の中央部を南北にJR宇都宮線（東北本線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま・栗橋線沿いに市街地が形成されている。しかし市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と大山村及び日勝村の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であった。しかし、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま・栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40km圏内である当市はベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅の増加が目立ち始め、山林は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目ざましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告する入耕地遺跡（第8・9・11地点）、正福院貝塚（第2地点）の発掘調査は、以下の経緯で調整された。

2 調査の経過

入耕地遺跡（第8地点）は、平成19年2月15日～20日に実施した試掘調査の結果を受け、分譲住宅建設工事の内、住宅部分は盛土保存、道路部分を中心に発掘調査をすることになり、同年中に発掘調査を行った。調査地点は遺跡の北端に位置し、標高は約12mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成19年12月6日・7日	表土除去
12月10日・11日	周辺環境整備
12月12日～21日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
平成20年1月7日	作業再開
1月8日～2月8日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
2月18日・19日	埋め戻し作業、調査終了

入耕地遺跡（第9地点）は、平成21年9月9日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の北東寄りに位置し、標高は約12mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成21年9月11日	表土除去
------------	------

9月15日・16日 周辺環境整備、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業

9月17日・18日 埋め戻し作業、調査終了

入耕地遺跡（第11地点）は、平成24年11月9日に実施した試掘調査の結果を受け、翌年度に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の中央に位置し、標高は約13mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成25年4月8日 準備作業

4月9日・10日 調査区北半部表土除去

4月11日・12日 周辺環境整備

4月15日～5月15日 遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業

5月16日～21日 排土反転、調査区南半部表土除去

5月22日～6月7日 遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業

6月11日 埋め戻し作業、調査終了

正福院貝塚（第2地点）は、周辺の発掘調査成果等によって遺構・遺物の広がりが確実であることから、発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の南寄りに位置し、標高は約14mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成13年4月17日 表土人力掘削

4月18日 包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業

4月19日 写真撮影、実測作業、埋め戻し作業、調査終了

II 位置と環境

1 遺跡の立地と地理的環境

入耕地遺跡と正福院貝塚の位置する地域は、近世村名をとって白岡地区といわれ、地形的には大宮台地白岡支台上にあたる。白岡支台は久喜市除堀付近から、当市の篠津地区、白岡地区、小久喜地区を経て、蓮田市黒浜付近まで南北約9kmにわたって展開している。支台の東側に広がる沖積地は「白川筋」と呼ばれる利根川水系の旧河道である。西側には元荒川の沖積低地が広がっている。

白岡支台の特徴は、北部と南部で標高や低地との比高差が異なることである。北部では標高12m、低地との比高差は1m程と低平なのに対し、南部では約15～16m、比高差5～6mと明瞭な崖線を形成する。これは埼玉県加須市を中心とする関東造盆地運動に起因するといわれている。また支台の東縁と西縁の台地形状も対照的で、東縁は沖積低地との差が不明瞭なのに対し、西縁は支谷が発達し切り立った崖線を形成するという特徴がある。

2 歴史的環境

大宮台地白岡支台上に展開する遺跡の内、入耕地遺跡と正福院貝塚周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、層位的な出土ではないものの、入耕地遺跡をはじめ白岡支台西縁部の山道跡やタタラ山道跡、小久喜地区の南鬼窪氏館跡などで、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。

縄文時代は早期から晩期までの遺跡がみられる。縄文時代前期初頭の花積下層式期では、タタラ山道跡で住居跡40軒以上や炉穴群が検出され、埼玉県下でも屈指の規模の集落であったことが判明した。同遺跡の豊富な遺構、遺物量、ことに造形豊かな石製裝飾品群の出土は、今後の該期文化の研究を強力に推進するものとなる。前期後半以降は、諸磯Ⅱ式期に茶屋遺跡やタタラ山道跡で住居跡や土坑等が検出されるものの、集落規模は縮小傾向にある。

再び集落遺跡が確認されるようになるのは、縄文時代中期後半の加曾利E式期からで、山道跡をはじめ、新屋敷遺跡やタタラ山道跡などでも一定規模の集落の展開が明らかになっている。

縄文時代後期から晩期になると、再び遺跡数は集約されるかわりに、一遺跡において膨大な量の遺構と遺物を伴うようになる。入耕地遺跡では堀之内式期と加曾利B式期及びび行3a～3d式期の集落が形成され、昭和26年には國學院大學考古学会が発掘調査を行っている。入耕地遺跡は、小支谷を挟んで北側の正福院貝塚と一体となって環状盛土遺構を形成している。

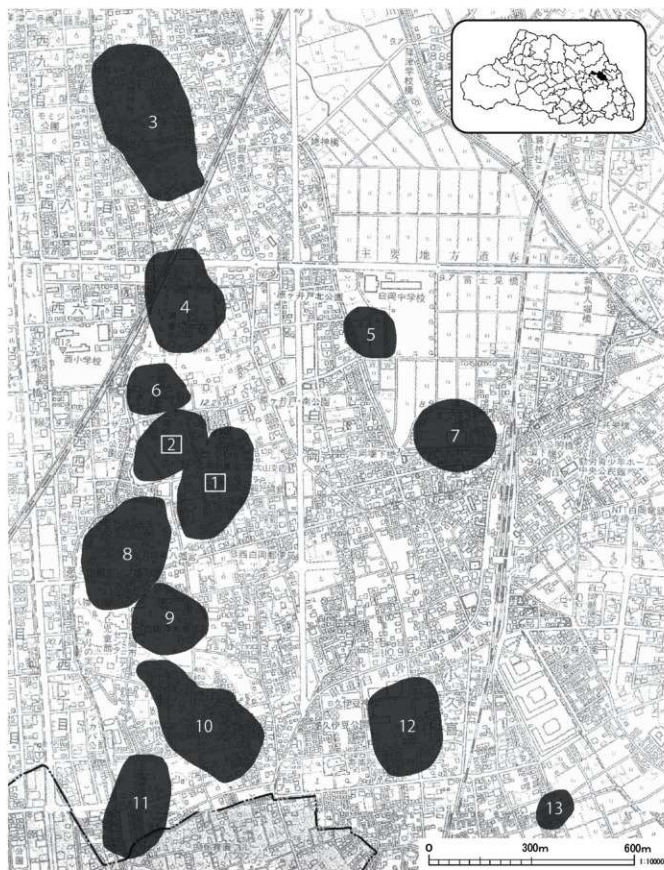
弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。古墳時代前期では入耕地遺跡や茶屋遺跡で住居跡が認められ、一定規模の集落規模の展開が窺われるほか、正福院貝塚では方形周溝墓が検出されている。一方、古墳時代中・後期は中妻遺跡や神山遺跡で住居跡が数軒検出される程度である。

奈良・平安時代では、中妻遺跡が居住域及び生産域の中心であったと考えられる。中妻遺跡では精錬作業を含む製鉄を行っていた8世紀代の鍛冶工房跡が検出された。山道跡や南鬼窪氏館跡においても同時期の炭坑窯跡が検出されており、鍛冶関連遺構への炭の供給が想定される。

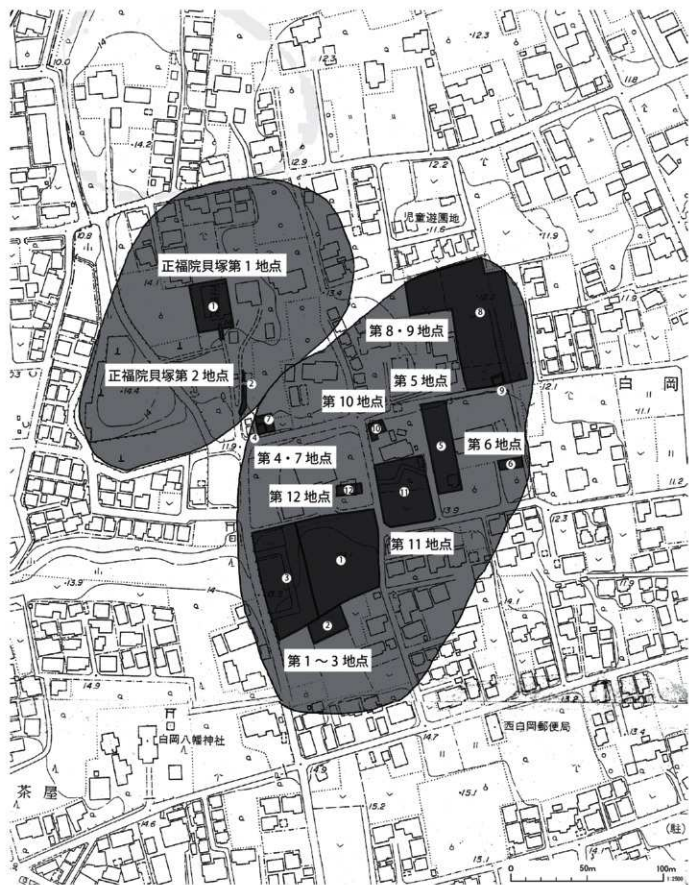
中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14～16世紀の館跡とともに舶載陶磁器類が多数出土している。また、中妻遺跡においても掘立柱建物跡群や大規模な堀が検出されている。白岡支台は中世の埼玉西部に属し、武蔵七党の野与党の有力一族、鬼窪氏が本貫地としたといわれる。遺跡周辺に存在する白岡八幡宮や正福院、篠津久伊豆神社などは、草創や社殿造立に同氏との関わりが伝承されている。

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	発掘調査(年度)
1	入耕地遺跡	白岡字茶屋・東	縄文早・前・後・晩、古墳前、中世、近世	昭和26・平成3・4・7・15・16・17・19・23・25・28
2	正福院貝塚	白岡字茶屋	縄文早～晩、古墳前、中世、近世	昭和62・平成13
3	中妻遺跡	篠津字中妻・神山・磯・宿	縄文早～後、古墳前～後、奈良・平安、中世、近世	平成12・14・16・18・21・22・24・25・26・27・28
4	神山遺跡	篠津字神山・白岡東	縄文前・中、古墳中・後、中世、近世	昭和51・平成5・12・17・25・26
5	西下谷遺跡	白岡字西下谷・東	縄文中、古墳前	
6	白岡東遺跡	白岡字東	縄文早・前・後、中世	
7	七カマド遺跡	白岡字東下谷	縄文後、中世、近世	平成22
8	茶屋遺跡	白岡字茶屋	縄文早・前・後、古墳前	昭和57・平成6・8・13・14・18
9	新屋敷遺跡	白岡字茶屋	縄文早～後、平安、近世	平成6
10	山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和62・平成2・9・11・12・18・21・23・25・27
11	タタラ山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和59・平成4・6・11・12・13・25・29
12	南鬼窪氏館跡	小久喜字中村	旧石器、縄文中～晩、奈良・平安、中世、近世	平成7・9・18・19
13	神辺遺跡	小久喜字神辺	縄文中、近世	



第1図 入耕地遺跡・正福院貝塚と周辺の遺跡分布図



第2図 入耕地遺跡・正福院貝塚の位置と発掘調査区

Ⅲ 入耕地遺跡（第8・9・11地点）の調査

1 遺跡の概要

入耕地遺跡は大宮台白岡支台の中央部に位置する。同支台の西側は元荒川の沖積地と接して明瞭な崖線を形成する。崖線縁辺は若干の小支谷が入り込み、それを取り囲むように遺跡が連綿と形成される。入耕地遺跡もそのような小支谷の谷頭部に展開する。

当遺跡はこれまでに本報告地点を含む計12地点で発掘調査を実施しており、西側の小支谷に近い地点（第1～3地点）は縄文時代後期から晩期の大規模集落に加え、14～16世紀の中世館跡が検出されている。調査地点の内、本報告の第8・9地点は遺跡の北東端、第11地点は遺跡の中央に位置し、標高は第8・9地点で約12m、第11地点で約13mである。

なお、第8地点については試掘調査の結果から、分譲住宅建設工事の内、住宅部分は盛土保存、道路部分を中心に発掘調査をすることになった。そのため、調査対象範囲内に幅約5mのトレンチを12本設定し、調査を実施した。トレンチの配置は第3図、各トレンチの全測図は第4～9図のとおりである。

2 第8地点の遺構と遺物

(1) 土坑

●第1号土坑（第10図）

トレンチ1に位置し、東半部はトレンチ外である。東側はトレンチ外であるため長径は不明であるが、短径約2.3mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第13図）

土器 1は志野焼の小皿の口縁部破片である。

●第2号土坑（第10図）

トレンチ1に位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

出土遺物（第13図）

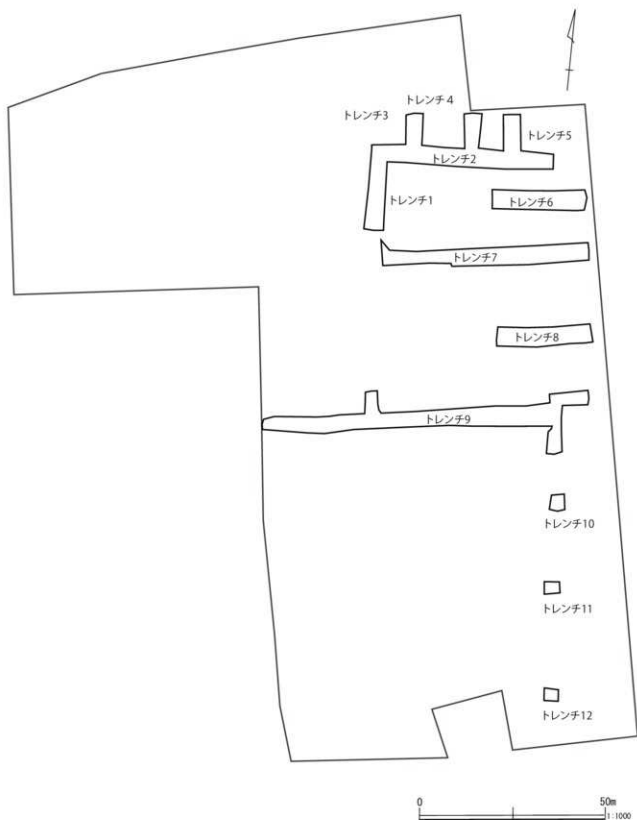
土器 2は内湾する安行式土器の口縁部資料である。口縁部の縄文帯下端を画すシャープな沈線が観察される。3は無文の胴部資料である。焼成は良好で胎土に少量の砂粒を交える。

●第3号土坑（第10図）

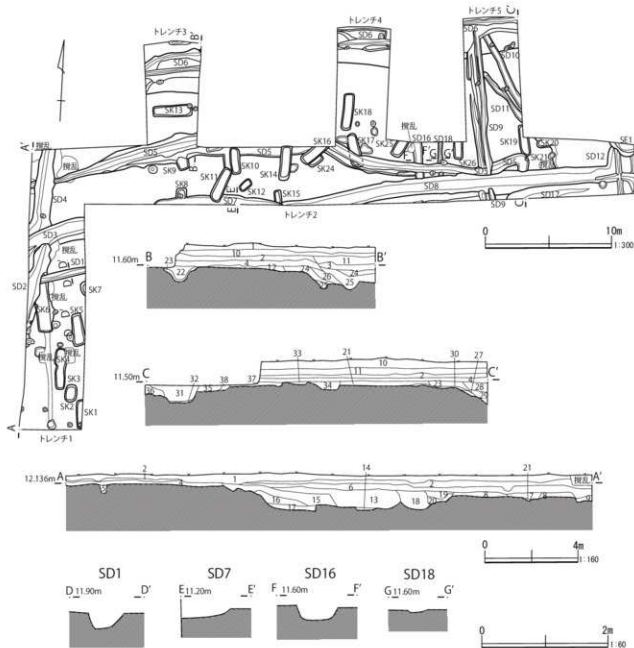
トレンチ1に位置し、第4号土坑を切る。平面形は長径約1.9m、短径約0.8mの長楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第13図）

土器 4は安行3c式から3d式にかけての深鉢形土器の胴部資料である。頭部に引かれた2条の横走沈線と口縁部文様帯を構成したと思われる左下がりの沈線を見ることができる。内面は頭部に稜線を持ち胴部



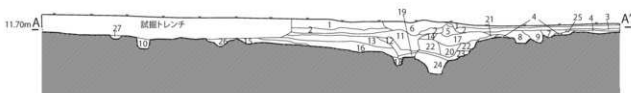
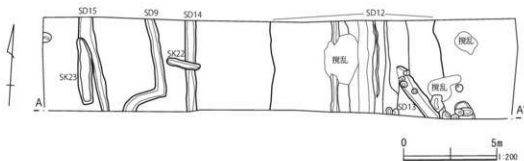
第3図 入耕地遺跡（第8地点）トレンチ配置図



- 基本土層
- 1 黒色土 締まり弱 現在の耕作土。
 - 2 黒色土 締まり非常に強 白砂粒子多 跡田の床土。
 - 3 黒色土 締まり非常に強 2層と同質層 マンガン沈着 SD6の上にあって陥没したものか。
 - 4 暗褐色土 径0.1cmのローム粒子を多。
 - 5 黒色土 締まり強 径1cmのロームブロックわずか 径0.1cmのローム粒子多。
 - 6 黒色土 締まり強 灰色粒子多 横土粒子わずか。
 - 7 黒色土 締まりやや弱 径0.1~0.4cmのローム粒子多。
 - 8 暗褐色土 締まり強 斜面より上から流れてきた二次堆積ローム土。
 - 9 黒色土 締まり強 径0.1cmのローム粒子多。 1cmのロームブロックわずか。
 - 10 黒色土 締まり強 ローム土混土層 現代の客土。
 - 11 暗褐色土 締まり強 10層と同じ客土SD6上を念入り埋めたもの。
 - 12 黒色土 締まり強 下層のソフトローム土が強状に混じり。
 - 13 黒色土 締まり強 径5cmのロームブロック少 ローム粒子多。
 - 14 暗褐色土 締まり強 流濁水により底面に圧着した層 径0.1cm以下のローム粒子多。
 - 15 黒色土 締まり強 径0.5~5cmのロームブロック。 径0.1cmのローム粒子多。
 - 16 黒色土 締まり強 径0.1~0.4cmのローム粒子多。
 - 17 黒色土 締まり強 流濁水により底面に圧着した層 径0.1cmのローム粒子非常に多。
 - SD3 18 黒色土 締まりやや弱 流濁水はあまりない 径0.1~0.4cmのローム粒子と灰色粒子多。
 - SD4 19 暗褐色土 締まりやや弱 粒子径のローム土と黒色土との混ざった層。
 - 20 黒色土 締まり強 径0.1cmのローム粒子多。

- SD5 21 黒色土 締まり強 径0.1cm以下のローム粒子多。
- 22 黒色土 締まり強 径0.1cmのローム粒子わずか。
- 23 暗褐色土 締まり強 2層をまじえる2次堆積ローム。
- SD6 24 黒色土 締まり強 径0.1cm~0.4cmのローム粒子多。
- 25 黒色土 締まり強 径0.5~1cmのロームブロック少。
- 26 黒色土 締まり強 径0.5cmのロームブロックわずか。
- 27 黒色土 締まりやや弱 径0.5cmのロームブロックと 径0.1cmのローム粒子多。
- 28 黒色土 締まり強 径1cmのロームブロック少。
- 29 淡黒色土 締まり強 径0.2cmのロームブロック多。
- 30 黒色土 締まり強 白色砂粒を含む。
- SD8 31 淡黒色土 締まり強 径0.1cm以下のローム粒子と炭化物粒子少。
- 32 黒色土 締まり非常に強 31層が流濁水により着したしたもの。
- SD10 33 暗褐色土 締まり強 黒色土とローム土との混じり。
- SD11 34 黒色土 締まり強 径0.1cm以下のローム粒子多。
- 35 黒色土 締まり強 径0.5~1cmのロームブロックと 径0.1cmのローム粒子多。
- SD17 36 黒色土 締まり強 35層に近似するが径0.1cmのローム粒子と 白色砂粒多。
- SK19 37 黒色土 締まり強 径0.1cmのローム粒子わずか。
- SK21 38 黒色土 締まり強 37層に似るが色調暗い。

第4図 トレンチ1~5及び遺構図



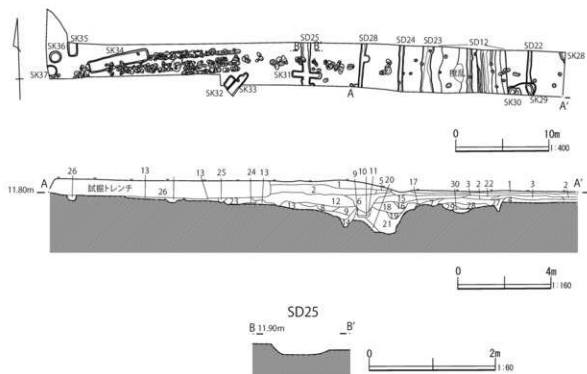
基本土層

- 1 暗灰色土 締まり弱 現在の耕作土。白色砂粒含む。
- 2 暗灰色土 締まり非常に強。ブロック状に亀裂入る。マンガン沈着顯著。隣田の床土。
- 3 黒色土 締まり良。
- 4 暗黄褐色土 締まり良。3層とソフトローム土との中間層。
- 5 暗灰色土 径0.1cmのローム粒子と白色砂粒わずか。耕作土。
- 6 褐色土 締まり弱。径0.5~3cmのロームブロック多。炭化材を含む。最近まで機能していた溝か。
- 7 黒色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子多。ビッド覆土。
- 8 明黒色土 締まり良。5層に近似する褐色調強い。ビッド覆土。
- 9 黒色土 締まり良。径0.1~0.2cmのローム粒子多。ビッド覆土。

- SD0 暗灰色土 締まりやや強。径0.1cmのローム粒子わずか。
- SD12 暗灰色土 締まりやや弱。径0.1cmのローム粒子わずか。顆粒状の腐植。5段階目の溝覆土。
- 11 暗灰色土 締まりやや弱。径0.1cmのローム粒子多。顆粒状の腐植。5段階目の溝覆土。
- 13 暗灰色土 締まりやや弱。径0.1cmのローム粒子非常多。灰色粘土層が腐植に挟まる。5段階目の溝覆土。
- 14 暗灰色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子わずか。4段階目の溝覆土。
- 15 黄褐色土 締まり良。14層に近似し、よりローム土の割合が多い。4段階目の溝覆土。
- 16 暗灰色土 締まりやや弱。径0.1~0.4cmのローム粒子と径0.5~1cmのロームブロック多。顆粒状の腐植。4段階目の溝覆土。
- 17 暗黄褐色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子と径0.5~3cmのロームブロック主体層。ブロック状の腐植。4段階目の溝覆土。
- 18 暗灰色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子多。顆粒状の腐植。4段階目の溝覆土。
- 19 暗灰色土 締まりやや弱。含有物なし。細粒状の腐植。3段階目の溝覆土。
- 20 暗灰色土 締まり良。ローム粒子非常に少。顆粒状の腐植。3段階目の溝覆土。
- 21 暗黄褐色土 締まり弱。ソフトローム層との混ざり土。2段階目の溝覆土。
- 22 暗灰色土 締まり良。ローム粒子を非常に多。暗灰色粘土層が腐植に挟まる。顆粒状の腐植。2段階目の溝覆土。
- 23 暗赤褐色土 締まり良。マンガン沈着顯著。顆粒状の腐植。2段階目の溝覆土。
- 24 暗灰色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子を非常に多。マンガン沈着。顆粒状の腐植。初段階の溝覆土。

- SD13 暗灰色土 締まりやや弱。径0.1~0.2cmのローム粒子多。
- SD14 暗灰色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子多。
- SD15 暗灰色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子わずか。
- 27 暗灰色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子わずか。

第5図 トレンチ6及び遺構図



基本土層

- 1 暗灰色土 締まり弱 現在の耕作土。白色砂粒含む。
- 2 暗灰色土 締まりし非常に強。ブロック状に堆積する。マンガン沈着面層。跡田の床土。
- 3 黒色土 締まり良。
- 4 暗褐色土 締まり良。3層とソフトローム土との中間層。
- 5 暗灰色土 径0.1cmのローム粒子和白色砂粒わずか。耕作土。

SD12

- 6 灰褐色土 径1~3cmのロームブロック多。ボソボソの層。5段階目の溝覆土。
- 7 褐色土 締まりやや弱。色調明るい。5段階目の溝覆土。
- 8 黒褐色土 径1cmのロームブロックと径0.1cmのローム粒子和。4段階目の溝覆土。
- 9 褐色土 締まりやや弱。径1cmのロームブロックと径0.1cmのローム粒子和。4段階目の溝覆土。
- 10 灰色粘土層 締まり良。腐状に堆積。水に沁透する層。4段階目の溝覆土。
- 11 暗灰色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子和わずか。4段階目の溝覆土。
- 12 灰褐色土 締まりやや弱。径0.1~0.4cmのローム粒子和径0.5~1cmのロームブロック多。顆粒状の層位。4段階目の溝覆土。
- 13 暗褐色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子和径0.5~3cmのロームブロック多。顆粒状の層位。4段階目の溝覆土。
- 14 暗灰色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子和多。顆粒状の層位。4段階目の溝覆土。
- 15 暗灰色土 締まりやや弱。含有物なし。顆粒状の層位。5段階目の溝覆土。
- 16 暗灰色土 締まり良。ローム粒子和非常に少。顆粒状の層位。5段階目の溝覆土。
- 17 暗褐色土 締まり弱。ソフトローム層との混ざり。2段階目の溝覆土。
- 18 暗灰色土 締まり良。ローム粒子和非常に多。暗灰色粘土層が腐状に挟まる。顆粒状の層位。2段階目の溝覆土。
- 19 暗灰色土 18層に近照するがキメがやや粗い。2段階目の溝覆土。
- 20 暗灰色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子和多。マンガン沈着。初段階の溝覆土。
- 21 暗灰色土 締まり良。径0.1cmのローム粒子和非常に多。マンガン沈着。顆粒状の層位。初段階の溝覆土。

SD22

- 22 灰黒色土 締まり良。2層と3層との中間層。

SD23

- 23 暗灰色土 締まり良。径1~3cmのロームブロック多。径0.1~0.4cmのローム粒子和多。
- 24 黄褐色土 締まり良。ロームブロック土に23層が混じる。
- 25 暗灰色土 締まり良。径0.1~0.3cmのローム粒子和多。遺構確認面より上層の溝か。

SD24・28

- 26 暗灰色土 締まり良。径0.1~0.3cmのローム粒子和少。

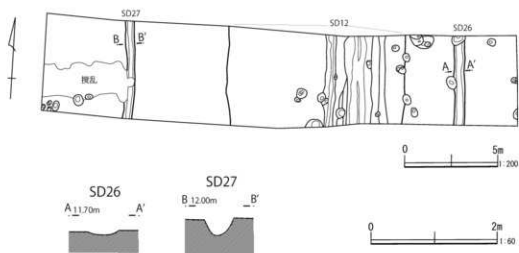
SK29

- 27 暗褐色土 締まり良。粘土粒子和わずか。

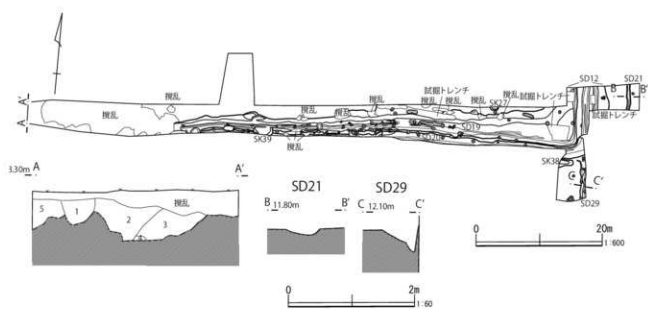
SK30

- 28 淡褐色土 締まり良。粘土粒子和わずか。
- 29 黒褐色土 締まり良。粘土粒子和わずか。径0.1cmのローム粒子和多。
- 30 暗褐色土 締まり良。

第6図 トレンチ7及び遺構図



第7図 トレンチ8及び遺構図



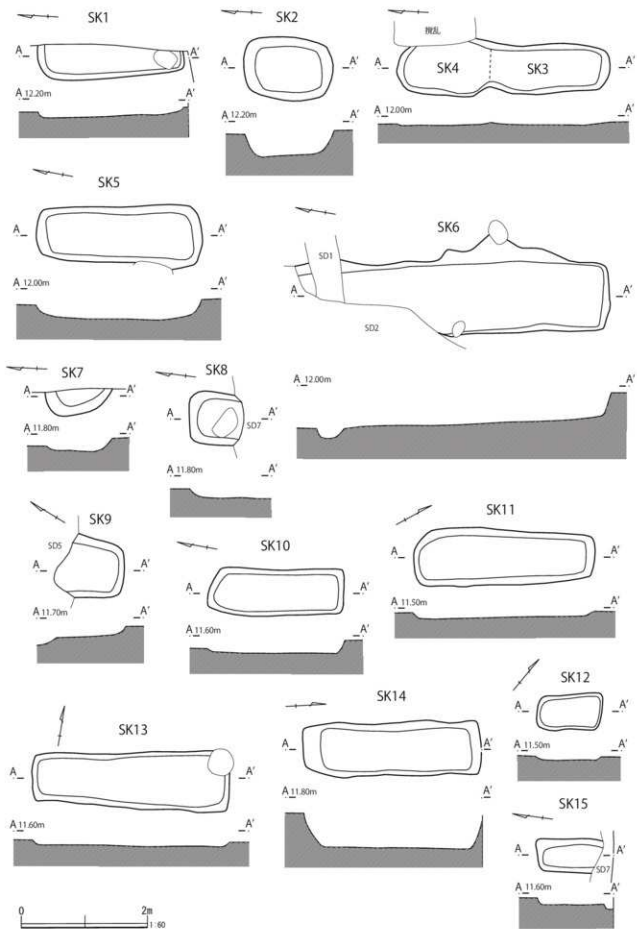
基本土層

- | | |
|--------|--|
| 1 炭黑色土 | 径0.1cmのローム粒子多 径1cmのロームブロックわずか 灰化材含む 最近の溝か。 |
| SD19 | |
| 2 褐色土 | 綿まり良 径0.1cmのローム粒子少。 |
| 3 炭黑色土 | 綿まり良 やや顆粒状。 |
| 4 炭黑色土 | ローム土版じりの層。 |
| SD09 | |
| 5 炭黑色土 | 綿まり良 径0.1cmのローム粒子多。 |

第8図 トレンチ9及び遺構図



第9図 トレンチ10～12及び遺構図



第10图 第1~15土坑

は内湾する。

●第4号土坑（第10図）

トレンチ1に位置し、第3号土坑と攪乱に切られる。平面形は長径約1.5m、短径約0.8mの長楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第5号土坑（第10図）

トレンチ1に位置する。平面形は長径約2.6m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第13図）

石器 5はチャート製の凹基無茎石鏃である。正面は、基部方向からの度重なる加撃で厚みが削がれ、その後、両側縁を中心に押圧剥離による丁寧な調整加工が施される。裏面中央には、基部方向からと、先端部方向からの整形加工が観察されるが、素材剥片の主剥離と思われる古い剥離面の痕跡がわずかに残される。両側縁は、正面同様押圧剥離による丁寧な調整加工が認められる。

●第6号土坑（第10図）

トレンチ1に位置し、第1・2号溝跡に切られる。平面形は北端を切られるが、残存部で長径約3.9m、短径約1.1mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第7号土坑（第10図）

トレンチ1に位置し、東半部はトレンチ外である。東側はトレンチ外であるため長径は不明であるが、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

●第8号土坑（第10図）

トレンチ2に位置し、第7号溝跡に切られる。平面形は南端を切られるが、残存部で長径約0.9m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第9号土坑（第10図）

トレンチ2に位置し、第5号溝跡に切られる。平面形は北端を切られるが、残存部で長径約1.1m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第10号土坑（第10図）

トレンチ2に位置し、第5号溝跡を切る。平面形は長径約2.1m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第11号土坑（第10図）

トレンチ2に位置し、第7号溝跡を切る。平面形は長径約2.8m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面

から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第13図)

土器 6は内湾傾向を示す安行式の深鉢形土器の口縁部資料である。7は単節縄文の施された縄文帯下端を1条の沈線で画す胴部資料である。8は深鉢形土器の胴部資料と思われる、無文となるものである。器面は荒れている。

●第12号土坑 (第10図)

トレンチ2に位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.5mの不整形円を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第13号土坑 (第10図)

トレンチ3に位置する。平面形は長径約3.1m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第14号土坑 (第10図)

トレンチ2に位置する。平面形は長径約2.8m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第13図)

土器 9は平縁の深鉢形土器の口縁部資料である。無文でやや外反傾向を示す。10~12はいずれも胴部資料で、10はやや右下がりとなる燃糸文の見られるもの、11は左下なりに斜行する条線文の観察されるもの、12は横位の整形痕の残される無文の資料である。

●第15号土坑 (第10図)

トレンチ2に位置し、第7号溝跡に切られる。平面形は南端を切られるが、残存部で長径約1.0m、短径約0.5mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第16号土坑 (第11図)

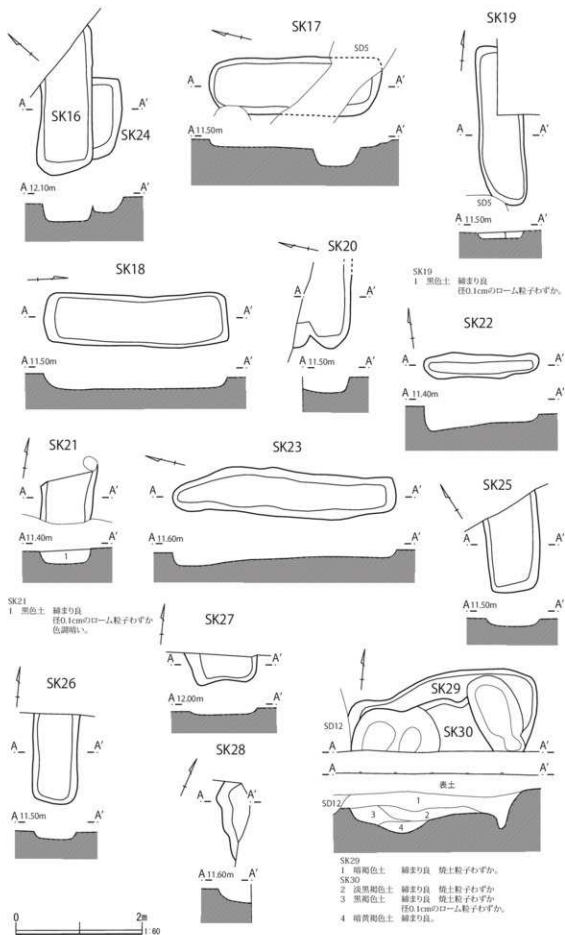
トレンチ2に位置し、第24号土坑と第5号溝跡を切る。北端はトレンチ外であるが、残存部で長径約1.8m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第13図)

鉄滓 13は鍛錬鍛冶滓と考えられる鉄滓である。長さ3.4cm、幅4.1cm、厚さ1.6cm、重量は29.1gを測る。メタルが多く遺存しており、磁着度は5であった。

●第17号土坑 (第11図)

トレンチ2・4に位置し、第5号溝跡に切られる。平面形は長径約2.7m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。



第11図 第16~30土坑

●第18号土坑（第11図）

トレンチ4に位置する。平面形は残存部で長径約1.8m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第13図）

土器 14は瀬戸美濃系陶器の胴部資料である。15は在地産の拙鉢の口縁部資料である。口縁部内面に、横位の整形痕を明瞭に残す。

●第19号土坑（第11図）

トレンチ2・5に位置し、北東端がトレンチ外である。平面形は長径約2.5m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第20号土坑（第11図）

トレンチ2に位置し、第12号溝跡に切られる。平面形は西端を切られるが、残存部で長径約1.4m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第21号土坑（第11図）

トレンチ2に位置し、第5号溝跡に切られる。南側を切られるため長径は不明であるが、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第22号土坑（第11図）

トレンチ6に位置し、第14号溝跡を切る。平面形は長径約1.8m、短径約0.4mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第23号土坑（第11図）

トレンチ6に位置し、第15号溝跡を切る。平面形は長径約3.5m、短径約0.8mの長楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第24号土坑（第11図）

トレンチ2に位置し、第16号土坑に切られる。北側を切られているため長径は不明であるが、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第25号土坑（第11図）

トレンチ2に位置し、北半部はトレンチ外である。北側はトレンチ外であるため長径は不明であるが、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第26号土坑（第11図）

トレンチ2に位置し、北半部はトレンチ外である。北側はトレンチ外であるため長径は不明であるが、

短径約0.7mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第27号土坑（第11図）

トレンチ9に位置し、北半部はトレンチ外である。北側はトレンチ外であるため長径は不明であるが、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第28号土坑（第11図）

トレンチ7に位置し、東半部はトレンチ外である。東側はトレンチ外であるため長径は不明であるが、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第29号土坑（第11図）

トレンチ7に位置し、第30号土坑と第22号溝跡を切り、第12号溝跡に切られる。南側はトレンチ外であるため長径は不明であるが、短径約2.8mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。東端に楕円形のピットが認められる。

●第30号土坑（第11図）

トレンチ7に位置し、第29号土坑に切られる。上層は第29号土坑に切られるとともに、南側はトレンチ外であるため平面形が定かではないが、第29号土坑同様の楕円形を呈すものと思われる。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第31号土坑（第12図）

トレンチ7に位置し、第25号溝跡に切られる。平面形は長径約3.1m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.6mを測り、底面は東西両端が浅く窪む。

●第32号土坑（第12図）

トレンチ7に位置する。南端はトレンチ外であるが、残存部で長径約1.4m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第33号土坑（第12図）

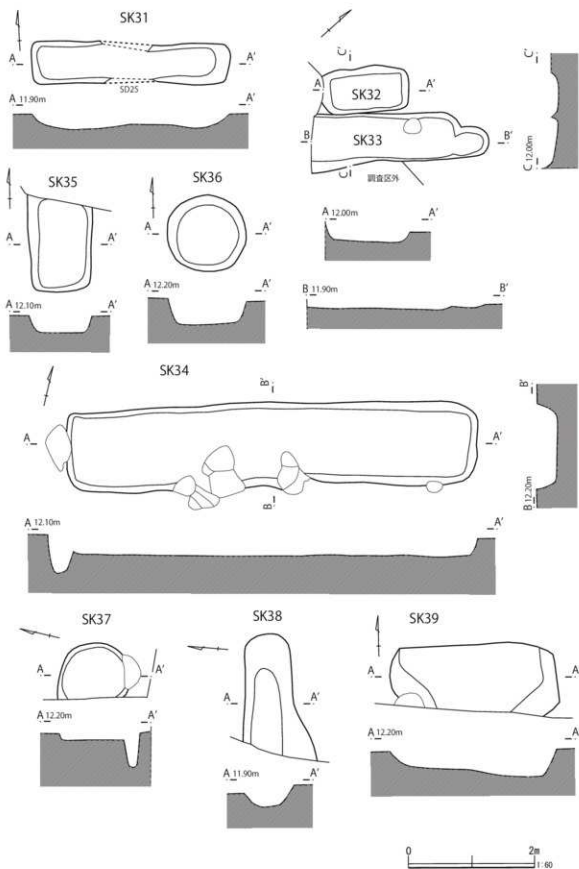
トレンチ7に位置する。南端はトレンチ外であるが、残存部で長径約2.8m、短径約0.9mの長楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第34号土坑（第12図）

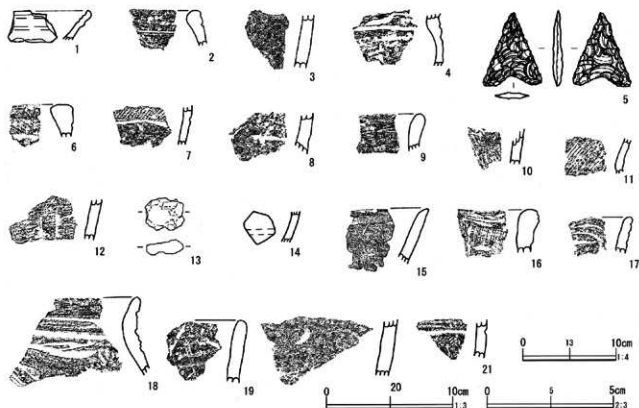
トレンチ7に位置する。平面形は長径約6.4m、短径約1.4mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第13図）

土器 16はやや外反する口唇部を持つ平縁土器で、縦位の粗い整形痕を明瞭に残すほか、外を向く口唇



第12图 第31~39土坑



第13図 土坑出土遺物(1)

部端面に横位の整形痕が観察される。17は緩波状を呈する口縁部資料で、波状縁にそうように沈線が引かれるものである。18は内湾する体部から緩やかに屈曲し口縁部のみ外反する平縁の広口壺形土器と思われる、括れ部に幅の広い平行沈線が引かれ、体部には、細い斜行沈線の充填されるレンズ状の文様の一端が窺われる。19は波状縁となる口縁部資料で、波頂部から両側に振り分けるように沈線が引かれる。20は無文の胴部資料、21は横走沈線の下位に縄文の施される胴部資料である。

●第35号土坑(第12図)

トレンチ7に位置する。南端はトレンチ外であるが、残存部で長径約1.5m、短径約1.0mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第36号土坑(第12図)

トレンチ7に位置する。平面形は直径約1.2mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第37号土坑(第12図)

トレンチ7に位置する。西端はトレンチ外であるが、残存部から直径1.2mの円形を呈すものと考えられる。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第38号土坑（第12図）

トレンチ9に位置する。南端はトレンチ外であるが、残存部で長径約1.9m、短径約1.1mの長楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第39号土坑（第12図）

トレンチ9に位置し、第19号溝跡に切られる。南側はトレンチ外であるため長径は不明であるが、短径約2.6mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.5mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

(2) 溝跡

●第1号溝跡（第4図）

トレンチ1に位置し、第6号土坑を切り、第2号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、西から東へ約3.8m延伸し、西・東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.6mを測り、確認面からの最大深は約0.4mを測る。

●第2号溝跡（第4図）

トレンチ1に位置し、第6号土坑と第1号溝跡を切り、第3号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約6.8m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約1.6mを測り、確認面からの最大深は約0.8mを測る。

出土遺物（第14図）

土器 1は大きく内湾する平縁資料で、口縁部外面及び頸部に横走る刺突列が観察される。2は内湾する壺形土器の胴部資料で、横走る2条の沈線と沈線間に施された刺突列が見られる。3はカワラケの底部資料である。推定底径は3.2cmであり、回転糸切り痕が残される。

石器 4は扁平な網雲母片岩製の資料で、左側縁に研磨痕が残される。

●第3号溝跡（第4図）

トレンチ1に位置し、第2・4号溝跡を切る。調査区内で確認できる部分では、西から東へ約4.6m延伸し、西・東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約1.7mを測り、確認面からの最大深は約0.7mを測る。

出土遺物（第14図）

土器 5は内径する胴部資料である。6は志野焼の小皿の底部資料で、高台が付されたことがわかる。7は瓦質の焙烙の口縁部資料で、口縁部内面にわずかに段を持ち口唇部は角頭状を呈する。8は安行式に該当する平縁土器で、口縁部の縄文帯の下に菱形の縄文区画を持つものと思われる。菱形の中央には蛇行沈線が垂下する。

土製品 9は瓦片を転用したサイコロ状の砥石である。6面に研磨痕が残される。

●第4号溝跡（第4図）

トレンチ1・2に位置し、第5号溝跡を切り、第3号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、

北から南へ約4.6m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約1.7mを測り、確認面からの最大深は約0.5mを測る。

●第5号溝跡（第4図）

トレンチ2に位置し、第9・17号土坑と第16・18号溝跡を切り、第10・14・16号土坑と第4・9号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、西から東へ約14.3m延伸し、西・東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約3.0mを測り、確認面からの最大深は約0.7mを測る。

出土遺物（第14図）

土器 10は口縁部に縄文帯の観察される平縁土器である。11は口縁部が大きく外反する壺形土器の口縁部資料である。口唇部は玉縁状を呈する。12・13は頭部で屈曲する平縁土器である。外反する口縁部は無文となる。前者は、括れ部に引かれた沈線の下には縄文が、後者は燃糸文が施される。14・15は縄文帯を持つ深鉢形土器の胴部資料で、後者では縄文帯と磨消文帯とを跨ぐ蛇行沈線が観察される。16～19は安行式に該当する深鉢形土器の胴部下半の資料で、16・17・19は右下がりに斜行する条線文が施される。18は無文となるようである。20は大振りの台付鉢の鉢底付近の資料である。外面には細かな単節縄文が施され、内面は丁寧に整形される。21・22は常滑焼の大甕の胴部破片である。前者では外面に叩き目が観察される。両者とも淡緑色の自然釉がかかる。

●第6号溝跡（第4図）

トレンチ3・4・5に位置し、第9・10号溝跡を切る。調査区内で確認できる部分では、西から東へ約31.3m延伸し、西・東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約2.6mを測り、確認面からの最大深は約0.6mを測る。

調査区北側を区画する意図を持って掘られ、深跡として機能し得たものと考えられる。

出土遺物（第14図）

土器 23は瀬戸美濃系陶器の胴部資料である。24は天目茶碗の胴部上半の資料である。25は瀬戸美濃系陶器の三足の香炉の底部資料である。推定底径10.8cmを測る。26はカワラケの底部資料で、底径5.8cmを測る。

●第7号溝跡（第4図）

トレンチ2に位置し、第8・15号土坑と第8号溝跡を切り、第11号土坑に切られる。調査区内で確認できる部分では、西から東へ約10.9m延伸し、西・東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.8mを測り、確認面からの最大深は約0.3mを測る。

●第8号溝跡（第4図）

トレンチ2に位置し、第15号土坑と第5・9・5・16・18号溝跡を切り、第7・17号溝跡に切られる。第12号溝跡とも接するが、切り合い関係は不明である。調査区内で確認できる部分では、西から東へ約28.0m延伸し、西・東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約2.1mを測り、確認面からの最大深は約0.9mを測る。

出土遺物 (第14図)

土器 27・28は晩期安行式に該当する粗製土器の口縁部資料である。前者は内湾傾向が強く、刺突列を施す口縁部下端をシャープな沈線で画すもの、後者は、口縁部外面に粘土紐を貼り、圧着するように連続刺突を施すものである。29は口唇角頭状を呈する無文の口縁部資料である。30は極めて薄手に仕上げられた深鉢形土器の胴部資料で、縄文帯と磨消文帯を跨ぐ同心円状の弧線が観察される。31は無文となる胴部資料である。32～34は瀬戸美濃系陶器である。32は口縁部資料、33・34は底部資料である。

石器 35は砥石である。扁平な直方体形に仕上げられたものと思われるが、欠損している。残存する5面に研磨痕が残される。

●第9号溝跡 (第4・5図)

トレンチ2・6に位置し、第5号溝跡を切り、第6・8号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約25.0m延伸し、西・東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約1.2mを測り、確認面からの最大深は約0.6mを測る。

出土遺物 (第14図)

土器 36は単節縄文の施された胴部資料である。37は瓦質陶器の鉢形土器で、推定口径15.4cmを測る。内湾し無文となる口縁部下端をための沈線で画し、胴部には叩き目が残される。

●第10号溝跡 (第4図)

トレンチ5に位置し、第6号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、北西から南東へ約6.2m延伸し、北西・南東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.5mを測り、確認面からの最大深は約0.3mを測る。

●第11号溝跡 (第4図)

トレンチ5に位置し、第9号溝跡と接するが、切り合い関係は不明である。調査区内で確認できる部分では、北西から南東へ約4.9m延伸し、北西は収束するようであるが、南東側は調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.5mを測り、確認面からの最大深は約0.2mを測る。

●第12号溝跡 (第4・5・6・7・8図)

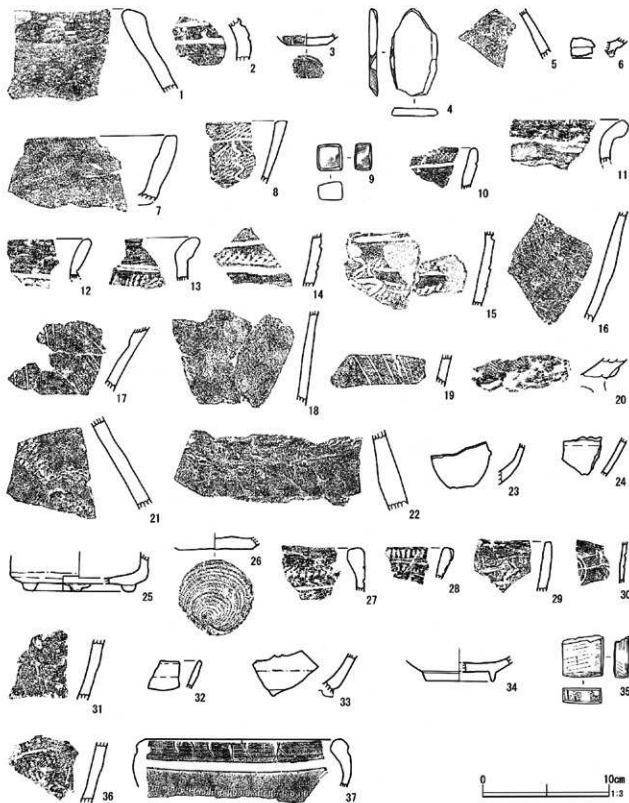
トレンチ2・6～9に位置し、第29号土坑と第13号溝跡を切り、第1号井戸跡に切られる。第8・17・19号溝跡とも接するが、切り合い関係は不明である。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約77.0m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約4.7mを測り、確認面からの最大深は約1.4mを測る。

幅広で深く掘り上げられ、濠跡として機能し得た大溝であり、土層の断面観察の結果、少なくとも計4回に渡って掘り直されたものと考えられる。

出土遺物 (第15図)

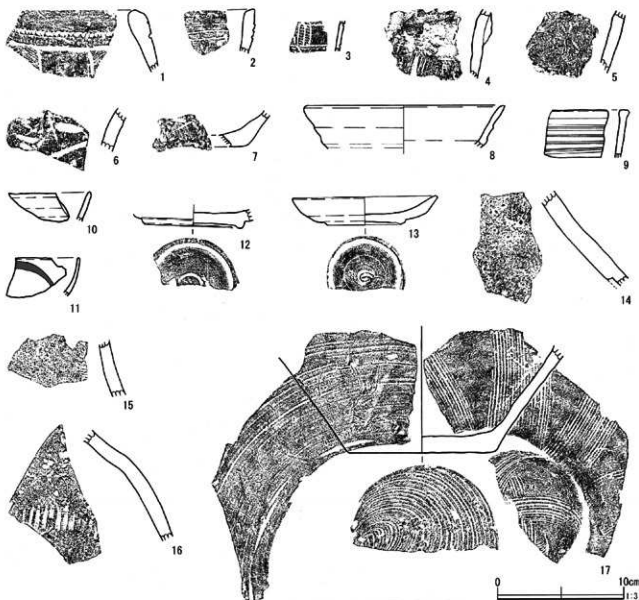
土器 1は内湾する平縁深鉢の口縁部資料である。口縁部外面には連続刺突列が引かれ、口縁部下端区画を起点とする縦位の沈線2条が観察される。沈線間は磨り消され、両側には細密沈線が充填される。2は

口縁部に3条の平行沈線が引かれる平縁土器、3は極めて薄手に仕上げられた精製土器で、よく磨かれた器面の上下に横走沈線が看取されるほか、これを繋ぐように梯子状のモチーフが施される。加曾利B式に該当しよう。4は縦位の条線文を地文とする胴部資料で、楕円形の貼瘤が付される。5は無文となる胴



第14図 満跡出土遺物(1)

部資料、6は破片右下に斜行する沈線が見られ、その左側には刺突風の短沈線が施されるものである。7は無文の底部資料である。磨耗しており底径を窺うことはできない。8は瀬戸美濃系陶器の鉢の口縁部資料で、推定口径14.8cmを測る。9は胎色の釉の掛かる香炉の口縁部資料である。10・11は磁器の口縁部破片である。後者には、右下がりとなる弧状の模様が残される。12は皿の底部資料と思われ、低い高台を持つ。推定底径は7.8cmを測る。13は志野焼の皿で口径11.5cm、底径6cmを測る。削り出しの高台の内側は、回転篋削りの痕跡を残す。14～16は常滑焼の大甕の胴部破片である。いずれも外面に自然釉が掛かり、内傾することから、頸部から肩部にかけての資料と思われる。17は内面に縦位の播目、外面に横位の篋削りの痕跡を残す播鉢の胴部下半の資料である。底径は11.5cm、残存高は10cmほどである。底面には明瞭な回転糸切痕が残る。



第15図 溝跡出土遺物(2)

●第13号溝跡（第5図）

トレンチ6に位置し、第12号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、北西から南東へ約3.3m延伸し、北西側は不明であるが、南東側は調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.7mを測り、確認面からの最大深は約0.6mを測る。

●第14号溝跡（第5図）

トレンチ6に位置し、第22号土坑を切る。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約4.8m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.5mを測り、確認面からの最大深は約0.2mを測る。

●第15号溝跡（第5図）

トレンチ6に位置し、第23号土坑に切られる。調査区内で確認できる部分では、北から南東へ約5.1m延伸し、北・南東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.8mを測り、確認面からの最大深は約0.3mを測る。

●第16号溝跡（第5図）

トレンチ2に位置し、第5・8号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約1.7m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.7mを測り、確認面からの最大深は約0.3mを測る。

●第17号溝跡（第5図）

トレンチ2に位置し、第8号溝跡を切る。第12号溝跡とも接するが、切り合い関係は不明である。調査区内で確認できる部分では、西から東へ約9.3m延伸し、西・東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約1.0mを測り、確認面からの最大深は約0.8mを測る。

●第18号溝跡（第5図）

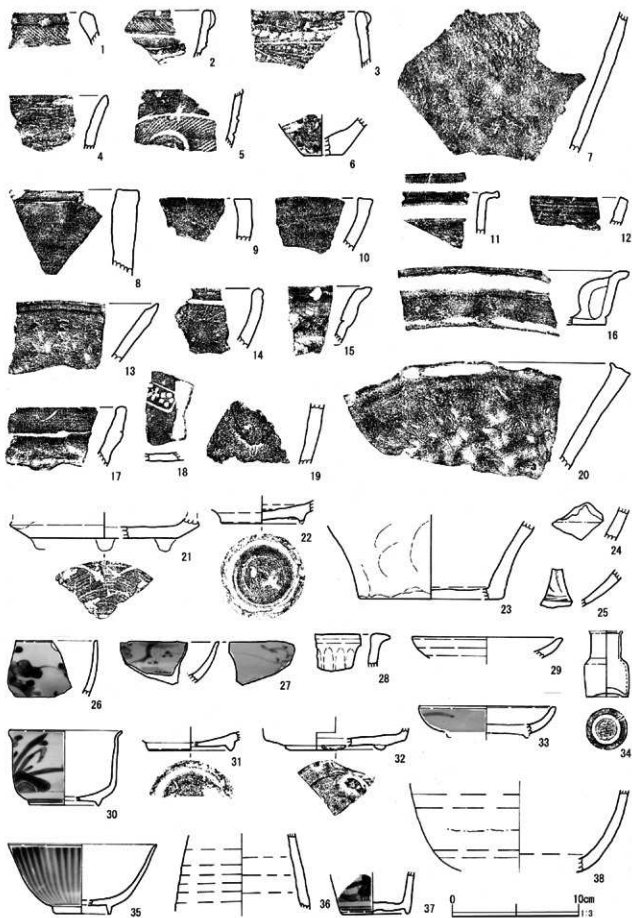
トレンチ2に位置し、第5・8号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約1.8m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.3mを測り、確認面からの最大深は約0.7mを測る。

●第19号溝跡（第8図）

トレンチ9に位置し、第39号土坑と第20号溝跡を切る。第12号溝跡とも接するが、切り合い関係は不明である。調査区内で確認できる部分では、西から東へ約60.0m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約3.8mを測り、確認面からの最大深は約0.7mを測る。

出土遺物（第16・17図）

土器 第16図1・2は口縁外縁に縄文帯を持つ平縁土器、3は口縁外縁に粘土紐を貼って肥厚させ、その下端に沿って刺突列を配する粗製土器の口縁部、4は外反傾向を示す無文の平縁土器である。5は2条の弧線



第16图 满跡出土遺物(3)

で画された縄文帯の観察される胴部上半の資料である。6は推定底径5cmほどの底部資料、7は粗い単節縄文の施された胴下半の資料である。8~10は角頭状の口唇部を持つ常滑焼の鉢形土器と思われ、9はわずかに内湾傾向を示す。11はL字に折れる口縁部を持つ瓦質の陶器である。上を向く口縁端面には、指頭でナデたような太く浅い沈線が引かれる。12・15~17は焙烙の口縁部資料である。15は比較的大きく外傾するもの、16は内耳の残されるもので、いずれも外面には横位のナデ整形の痕跡が残される。18は焙烙の底面の破片資料で、梅花模様と「大」の字読み取れる長方形の印が押される。19・20は常滑焼の鉢形土器と思われ、体部には指頭圧痕と思われる多数の凹凸が残される。21・32は三足の香炉の底部、22・31は碗形の陶磁器の底部で高台を持つもの、前者の底径は6.6cm、後者は6.9cmを測る。23は甕の底部破片で、体部には叩き整形の痕跡を留める。推定底径は、11.5cmほどである。24は天目茶碗、25は青磁の破片資料である。26・27・30・35は磁器の小碗で、27はいわゆるクラワンカ茶碗、30は腰部から真直ぐ立ち上がり口唇部が外反する湯飲み茶碗状の資料で、底径5.4cm、口径9.3cm、器高6cmほどを測る。35は底径4.5cm、口径11.7cm、器高5.4cmほどの飯茶碗風の資料である。28は口唇部が「く」の字に屈曲するもので、胎色の釉葉が掛けられる。29は瀬戸美濃系の皿で、推定口径は11cmほどである。33は緩やかに内湾しながら立ち上がる皿で、推定口径10.8cmほどである。36は内径する瓶形の陶器で、内外面に水挽痕を残す。37は底径5.4cmを測る底部資料、38は丸みを帯びて立ち上がる陶器の胴下半部の資料である。水挽痕が顕著である。

第17図1は茶色の鉄軸の掛かる燈明皿で、推定口径10cm、器高2.1cmを測る。2は薄く仕上げられた陶器の底部で、底面を上げ底風に削り込み外縁に貼瘤を付す。3・4は磁器の底部資料で、見込みに青絵付けのモチーフが残される。底径は前者が4.2cm、後者が9cmを測る。5・6は播磨鉢の底部資料で、前者は赤茶色の焼成色を持つもの、後者は黄白色の胎土の大振りの資料である。

石器 第17図7・8はともに磨石で、前者は周縁部を敲打して円形に近い形状に整形したものである。正面はよく磨られており、ほぼ中央に浅い潰痕が見られる。裏面は剥落している。後者は、不整形の資料で、残存部位にはことごとく研磨痕が残され、非常に高い使用度が推測される。9は砂岩製の砥石と思われる扁平な資料である。馬蹄形を呈する上部には縁状の隆起を残すが、ほかは研磨の痕跡を残す。10は磨製石斧で、刃部を欠く。扁平に仕上げられ、器面には整形痕をよく留める。11は磨石兼敲打石で、敲打痕は、上部から右側縁、下部へ「コ」の字に残される。

ガラス製品 第16図34は小型のガラス瓶で、底径3.3cm、口径2.5cm、器高5.4cmを測る。上げ底となる底面には円形の陽刻文字が見られ「日吉」と読める。

●第20号溝跡（第8図）

トレンチ9に位置し、第19号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、西から東へ約60.0m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.6mを測り、確認面からの最大深は約0.6mを測る。

出土遺物（第17図）

土器 12は外反する口縁部破片である。2条の沈線と沈線間に穿たれた刺突文を見ることができる。13は平縁深鉢で、口縁部縄文帯の上に縦位の貼瘤が看取される。14は無文の胴部破片である。15は瀬戸美濃系の小皿である。削り出し高台を持つ底径は6.6cm、口径は12cmほどである。16は小碗の口縁部資料であ

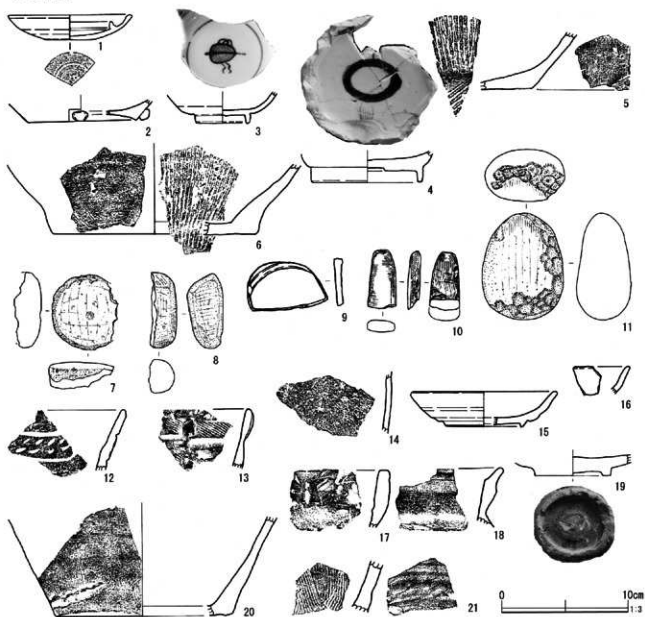
る。17・18は焙烙の口縁部資料、19は器内の厚い底部資料である。20は推定底径14.5cmほどと思われる底部資料である。21は播鉢の底部資料である。

●第21号溝跡（第8図）

トレンチ9に位置する。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約3.7m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.5mを測り、確認面からの最大深は約1.5mを測る。

●第22号溝跡（第6図）

トレンチ7に位置し、第29号土坑に切られる。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約3.4m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.5mを測り、確認面からの最大深は約0.1mを測る。



第17図 溝跡出土遺物 (4)

●第23号溝跡（第6図）

トレンチ7に位置する。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約4.8m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約1.3mを測り、確認面からの最大深は約0.3mを測る。

●第24号溝跡（第6図）

トレンチ7に位置する。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約5.0m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.5mを測り、確認面からの最大深は約0.3mを測る。

●第25号溝跡（第6図）

トレンチ7に位置し、第31号土坑を切る。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約4.5m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約1.0mを測り、確認面からの最大深は約0.3mを測る。

●第26号溝跡（第7図）

トレンチ8に位置する。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約4.4m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.6mを測り、確認面からの最大深は約0.1mを測る。

●第27号溝跡（第7図）

トレンチ8に位置する。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約5.2m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.5mを測り、確認面からの最大深は約0.3mを測る。

●第28号溝跡（第7図）

トレンチ7に位置する。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約4.7m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.5mを測り、確認面からの最大深は約0.4mを測る。

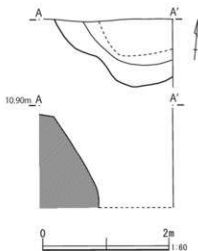
●第29号溝跡（第8・9図）

トレンチ9～12に位置する。調査区内で確認できる部分では、北から南へ約70.0m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約1.3mを測り、確認面からの最大深は約0.7mを測る。

(3) 井戸跡

●第1号井戸跡（第18図）

トレンチ2に位置し、第12号溝跡を切る。北・東側がトレンチ外であるため、全貌は不明であるが、確認できる部分では、長径約1.9m、短径約1.0mを測り、不整形面を呈すものと考えられる。開口部がやや広がり、下部は直線的に落ち込む。中世の所産である可能性も考えられる。



第18図 第1号井戸跡

(4) トレンチ出土遺物

●トレンチ1 (第4図)

出土遺物 (第19図)

土器 1は双刺瘤の付される波状縁深鉢の波頂部資料、2は玉縁状の口縁部を持つ平縁土器で、口縁外面には細かな縄文が看取されるもの、3は条線文の施された胴部資料である。

●トレンチ2 (第4図)

出土遺物 (第19図)

土器 4～10は同一個体と思われる資料で、いずれも砂粒を含む胎土で細い燃糸文が施される。器形を窺うことのできる7から、残存部の最大径は21cmほどと推定される胴下半部資料である。諸磯a式期の東関東系土器群として知られる八幡脇類と呼ばれる一群であろう。11は常滑焼の甕の肩部資料である。12は推定口径31cm、残存高13.5cmほどの平縁深鉢である。口縁部に半截竹管による平行沈線を重畳させ、胴部には、同一工具による弧線を連ねるものである。浮島式系譜の資料で、前述の4～10と近似する時期の所産と思われることから、本トレンチ周辺に当該期の遺構が存在した可能性がある。13は自然軸の掛かる胴部資料、14は瀬戸美濃系の碗の口縁部資料、15は燈明皿の蓋の破片資料、16は同安窯系の青磁碗の胴下半の資料、17は焙烙の内耳部分の破片資料である。

土製品 18はいわゆる泥面子と思われる。欠損部もあり判然としなが、獅子頭をかたどるものであろうか。

鉄滓 19は鍛錬鍛冶滓と考えられる鉄滓である。長さ3.7cm、幅4.6cm、厚さ1.7cm、重量は30.5gを測る。両側縁が直線的な形状を呈し、鉄塊利用を試みてカットした痕跡の可能性も考えられる。磁着度は3であった。

●トレンチ3 (第4図)

出土遺物 (第19図)

土器 20は燃糸文の見られる胴部資料、21～23は無文の胴部資料である。いずれも縄文時代後期から晩

期に位置付けられよう。26はカワラケの底部資料である。底面は回転斡削りを施しわずかに上げ底風を呈する。33は推定口径23.5cm、胴部最大径29cm、残存高15cmほどの砲弾形平縁深鉢である。口縁部に縄文帯を持ち、要所に貼瘤を持つ。口縁部文様帯には崩れたステッキ状の入組文が見られる文様帯下端は単沈線で閉じられ、以下は無文となるようである。安行3a式に比定されよう。

石器 30は砥石である。断面は正方形に近く、残された4面全面が使用されている。

●トレンチ4 (第4図)

出土遺物 (第19図)

土器 24は天目茶碗の口縁部資料である。全体に鉄軸が掛かる。25は網代痕の残される底部資料である。胴部は無文であるが、縄文時代後期後葉の資料と思われる。

石器 31は砥石である。扁平な砂岩を素材としたもので、面取り整形などは施されない。全体に細かな研磨痕が観察されるほか、ところどころ不規則に彫りの深い溝状の研磨痕が見られる。

●トレンチ5 (第4図)

出土遺物 (第19図)

土器 27は内湾する砲弾形の平縁深鉢である。口縁部には2条の沈線が引かれるが、刺突や隆帯は見られない。28・29は単節RL縄文を縦位施文する胴部資料である。縄文時代中期の所産であろう。

石器 32は、砥石である。断面は長方形に整えられ、残される4面すべてが使用されている。正面は、長軸方向に湾曲しさらに両縁の角を使って研磨した痕跡も残される。

●トレンチ7 (第6図)

出土遺物 (第20図)

土器 1は直立する平縁土器である。口縁部に2条の横走沈線が見られる。2はかなり肉厚な底部資料である。推定底径は、10cmほどである。3～5は常滑焼の陶器片で、3は大きく外傾する鉢状の資料、4は大型の甕の頭部と思われる資料である。

石器 8は緑泥片岩製の石剣の頭部である。扁平に仕上げられており、被熱痕跡を認める。

●トレンチ8 (第7図)

出土遺物 (第20図)

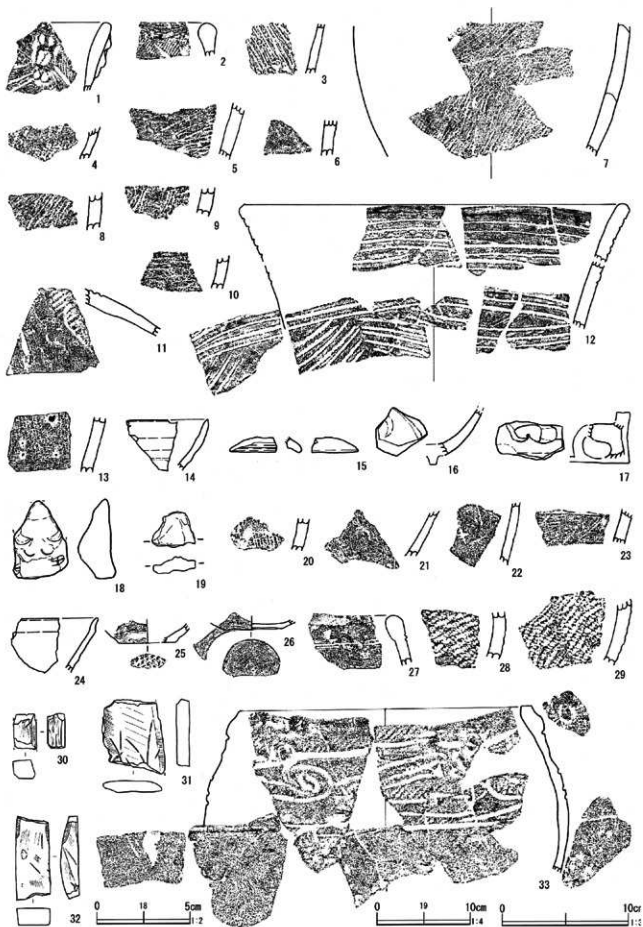
土器 6は玉縁状の口縁を持つ平縁深鉢で、わずかに内傾傾向がある。口縁部を含め沈線で区画された縄文帯と磨消文帯が交互に見られる。7・9～11は常滑焼の破片資料である。9では放射状の叩き目が看取される。11は右側の割口を使った転用砥石である。

石器 15はやや大振りの磨石の残欠である。扁平な円礫を素材とし縁辺に敲打を加え整形している。

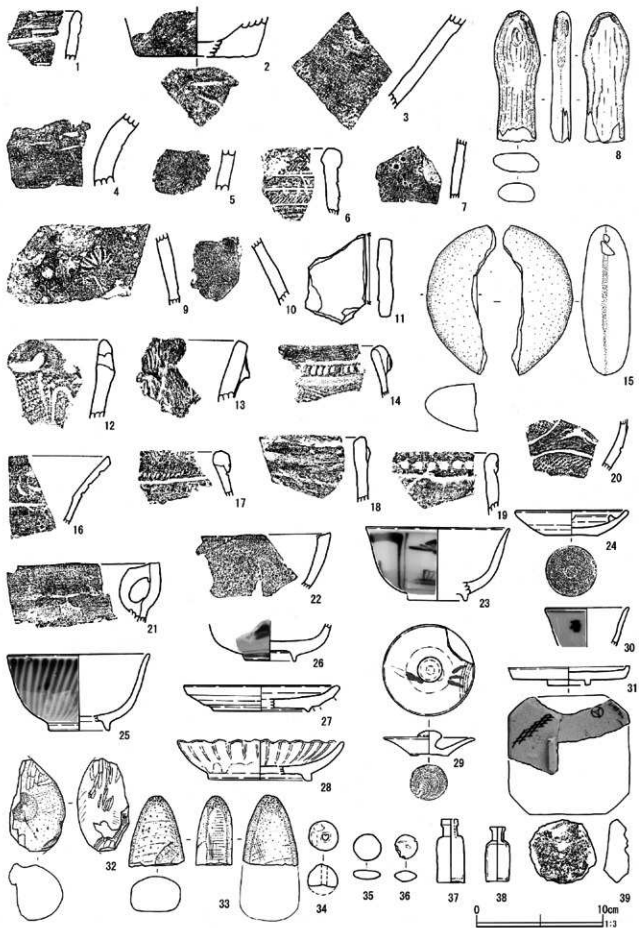
●トレンチ9 (第8図)

出土遺物 (第20図)

土器 12はやや開き気味の口縁部を持つ平縁深鉢で数単位の突起を持つ。突起はなだらかな山形で、貫



第19図 トレンチ1~5出土遺物



第20図 トレンチ7~9・11出土遺物

通孔を持ち、そこから突起を巡るように太目の沈線が引かれる。地文は単節縄文で、蕨手状となる磨消文が垂下するものと思われる。13は魚尾状突起を持つ波状縁深鉢である。突起には貼輪が付される。14・17～19は晩期安行式に伴う粗製土器の口縁部資料で、14は口縁部に鎖状隆帯を貼るもの、17は連続刺突を付す口縁部の下端を沈線で閉じるもの、18は直立気味で横走する丈の低い隆帯を貼るもの、19は折り返した口縁部に筥状工具による刺突列が引かれるものである。16は口縁部が大きく外反する皿状の土器で、口縁部文様帯には入組文が見られる。20は碗形土器の胴部資料で、弧線で画された縄文帯の間隙を磨消し、三叉文を施すものである。21・22は焙烙で、前者は内耳部分の資料である。23・25は飯茶碗状の磁器で、ともに口径11.8cm、底径5.4cmほどを測る。24は鉄軸の施された燈明皿、26はいわゆるクラワンカ茶碗である。27は鼠志野の皿で、口径12.3cm、底径7.8cmほどを測る。高台は削り出しである。28は瀬戸美濃系の輪花皿である。口径13.5cm、底径8cm、器高3cmほどを測る。29は土瓶の蓋である。口径7.5cmほどで内面に回転糸切痕を残す。30は小型の湯飲み上の磁器である。推定口径6.6cmを測る。31は、唐津系の角皿で、四方を隅切する。高台は2列の棒状の付高台である。

土製品 34は直径2.4cmほどの土玉で、貫通孔が穿たれる。古墳時代前期の資料であろう。35・36は碁石と思われる。彩色は失われている。直径は、前者が2.1cm、後者が1.8cmほどである。

石器 32は磨石兼凹石である。比較的丈のある円礫を素材としたもので面取り加工は施されない。凹部は残存部に1か所見られるが、残存率からするとさらに数個の凹部が存在した可能性がある。欠損後砥石に転用されており、表裏に細長く幅のある研磨痕が残される。33は、磨製石斧である。ほぼ中央部で欠損しており刃部を欠く。基部には敲打痕が著しく、着柄に伴う調整加工の痕跡と思われる。

ガラス製品 37・38は小型のガラス瓶である。前者が、器高5.4cm、底径2.1cm、後者は、器高4.2cm、底径1.8cmほどである。文字等は残されていないが、大きさから薬瓶と推測される。

●トレンチ11（第9図）

出土遺物（第20図）

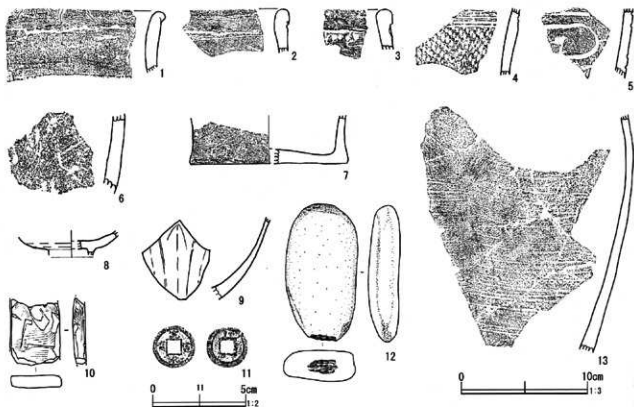
土製品 39は土製円盤である。素材となった土器は判然としなない。周辺部を打ち欠いて整形し研磨などは施さない。

(5) 調査区出土遺物（第21図）

土器 1・2は無文の口縁部資料で、前者は口唇部をわずかに外側に折り返している。後者は口縁部に1条の沈線が引かれる。3はやや内湾傾向を示す平縁土器で、口縁部に沿って連続刺突が観察される。4は単節縄文を地文に持つ胴部資料で、横走する平行沈線が観察される。5はステッキ状の入組文が施された胴部資料、6は斜行する条線文がわずかに残る胴部資料、7はやや張り出し気味の底部資料で、推定底径は13.2cmほどである。13はやや弧線風の条線文の施された胴下半の大型破片資料である。8は高台を持つ陶磁器の底部周辺の資料、9は龍泉窯系の青磁碗である。蓮弁の銘を明瞭に観察することができる。

石器 10は砥石である。断面形状は扁平な長方形を示し、残された4面すべてが使用されている。12は敲石である。扁平な円礫を素材とし、その両小口側を使用面としている。

銭貨 11は寛永通宝である。



第21図 調査区出土遺物 (1)

第2表 入耕地遺跡 (第8地点) 出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
13	5	SK5	石鏃	砂岩	2.9	2.4	0.4	1.5	
14	4	SD2	二次加工剥片	網雲母片岩	6.9	3.7	0.6	25.9	
14	9	SD4	砥石	瓦	1.9	1.5	1.4	(9.9)	瓦転用
14	35	SD8	砥石	泥岩	(3.3)	3.1	1.2	(20.9)	
17	7	SD19	磨石	安山岩	(5.1)	5.9	2.1	(79.3)	
17	8	SD19	磨石	硬砂岩	(1.7)	5.8	2.6	(39.5)	
17	10	SD19	磨製石斧	泥岩	(4.6)	2.2	1.0	(17.1)	
17	11	SD19	磨石	砂岩	8.4	6.4	4.1	308.0	
19	30	トレンチ3	砥石	泥岩	(2.7)	1.4	1.5	(10.4)	
19	31	トレンチ4	砥石	砂岩	(5.7)	4.6	1.0	(45.2)	
19	32	トレンチ5	砥石	泥岩	(6.5)	2.6	1.4	(42.4)	
20	8	トレンチ7	石棒	緑泥片岩	(10.3)	3.6	1.5	(94.3)	
20	15	トレンチ8	磨石	砂岩	(11.7)	(4.0)	3.7	(246.0)	
20	32	トレンチ9	磨石兼凹石	砂岩	(7.0)	(4.3)	(4.3)	(161.6)	
20	33	トレンチ9	磨製石斧	砂岩	(5.5)	(4.3)	(2.8)	(97.0)	
21	10	調査区	砥石	泥岩	(5.0)	3.9	1.0	(34.2)	
21	12	調査区	砥石	緑泥片岩	10.7	5.6	2.3	268.0	

3 第9地点の遺構と遺物

(1) 土坑

●第40号土坑 (第23図)

調査区南西寄りに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約0.9mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。東西端に円形のピットが認められる。

●第41号土坑 (第23図)

調査区南端に位置し、南半部は調査区外である。南側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第42号土坑 (第23図)

調査区北東寄りに位置し、第43号土坑に切られる。平面形は長径約1.8m、短径約1.3mの不整形円形、円形を連ねたような形状を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。縄文時代的な覆土を持つが、堆積状況や平面形状から植生痕の可能性も考えられる。

●第43号土坑 (第23図)

調査区北東寄りに位置し、第42号土坑を切る。平面形は直径約1.0mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

(2) 溝跡

●第30号溝跡 (第22図)

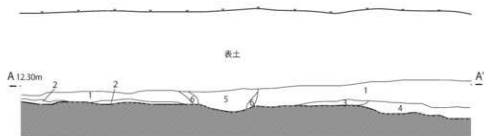
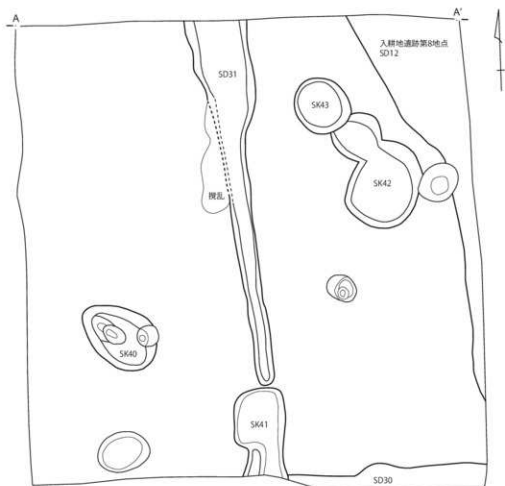
調査区中央部に位置し、調査区内を南北へ約5.8m延伸する。調査区東端で第8地点の第12号溝跡の肩部を検出したが、直交する本遺構はそれを切るようである。南端は調査区内で認められるが、北側は調査区外へ延びる。調査区での最大幅は1.0mを測り、確認面からの最大深は約0.4mを測る。

●第31号溝跡 (第22図)

調査区南東端に位置し、調査区内を東西へ約3.2m延伸する。溝跡の大部分が調査区外であるため、幅や深さは不明である。

(3) 調査区出土遺物 (第24図)

土器 1は、細片であり判然としないが、文様帯の下端を細かな連続刺突列で画する土器である。刺突列の上下には沈線が引かれる。文様帯中側には、直行するような沈線も窺われることから、縦位分割が行われる文様帯であったものと思われる。2は右下がりに斜行する燃糸文が観察される胴部資料である。3は無文の胴部資料である。



基本土層

- 1 淡黒色土 締まり強 旧耕作土 深0.1cm以下のローム粒子、白色砂粒多 炭化物粒子、粘土粒子を含む。
 2 暗褐色土 締まり強 深0.1cm以下のローム粒子を 炭化物粒子含む。

SD12

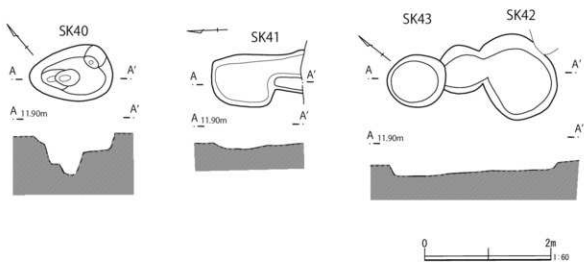
- 3 暗褐色土 締まり強 2層に黒色土が混じったもの。
 4 淡黒色土 締まり強 径5cm以下のロームブロック多。

SD31

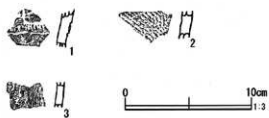
- 5 淡黒色土 締まり強 1層とほぼ同じだが下層は白色砂粒含まず。
 6 淡黒色土 締まり強 5層にローム土が混入したもの。



第22図 入耕地遺跡（第9地点）全測図及び遺構図



第23图 第40~43号土坑



第24图 調査区出土遺物(2)

4 第11地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

●第1号住居跡 (第26図)

F5・F6・G5・G6グリッドに位置する。住居跡の掘り込みは、中世以降の遺構形成に伴う地形改変等によって、床面まで既に失われており情報量はごく限られている。出土遺物の散布範囲や弧状に展開するピット等から全体像を把握せざるを得なかった。

住居跡の推定規模は、長径約8.2m、短径約6.2mの楕円形を呈すものと思われ、住居跡の東隅は調査区外にまで広がっていたものと考えられる。住居跡に伴うピットは7基を数え、壁際に位置するであろうP1・6を結んだラインが住居跡の主軸になるものと考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

●第1号掘立柱建物跡 (第27・28図)

C5・D3・D4・D5グリッドに位置する。桁行3間、梁行1間の側柱建物で、主軸方位はN-20°—Eを指す。桁行約4.5m、梁行約2.4mを測る。柱穴の規模は第3表のとおりである。

●第2号掘立柱建物跡 (第29・30図)

D3・E2・E3・F3グリッドに位置する。桁行4間、梁行1間の側柱建物で、主軸方位はN-75°—Wを指す。桁行約5.6m、梁行約2.8mを測る。柱穴の規模は第3表のとおりである。

●第3号掘立柱建物跡 (第31・32図)

E3・F3・F4グリッドに位置する。桁行3間、梁行1間の側柱建物で、主軸方位はN-75°—Wを指す。桁行約3.8m、梁行約2.3mを測る。柱穴の規模は第3表のとおりである。

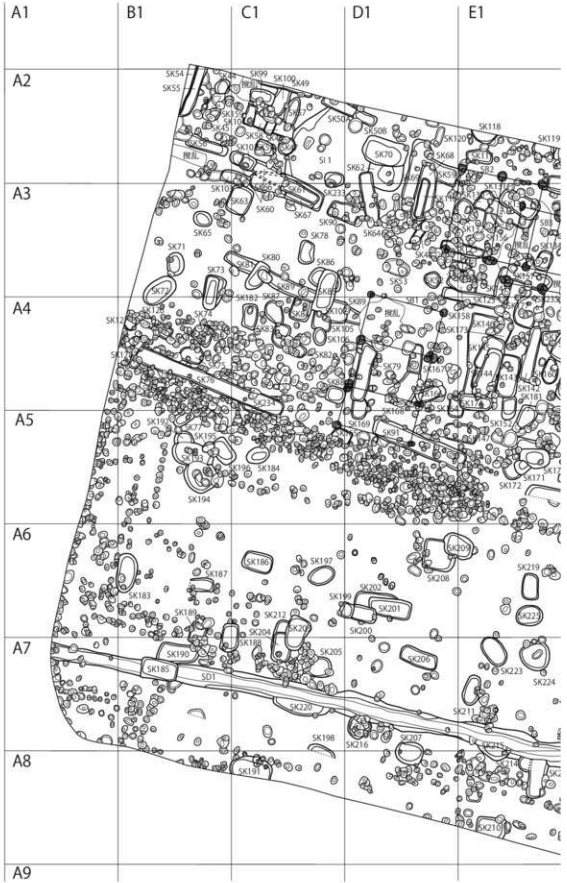
●第4号掘立柱建物跡 (第33・34図)

F4・F5・G4・G5グリッドに位置する。桁行3間、梁行1間の側柱建物であるが、北・南両側に庇が付く。主軸方位はN-85°—Wを指す。桁行約3.8m、梁行約2.2mを測り、庇と母屋との間は約1m離れる。柱穴の規模は第3表のとおりである。

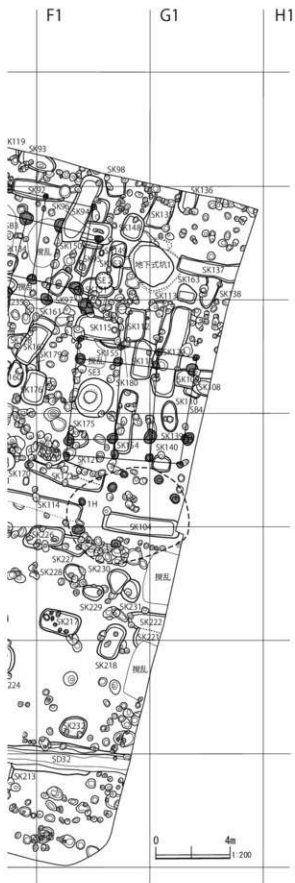
(3) 竪穴状遺構

●第1号竪穴状遺構 (第35図)

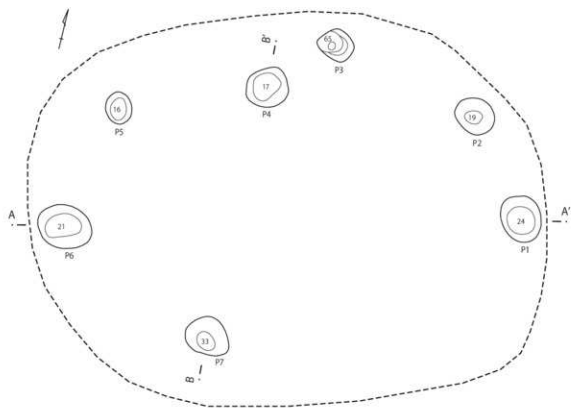
C2・C3・D2・D3グリッドに位置する。土坑やピットと多数切り合い、平面形は明らかでないが、直径6m程の円形の範囲内で掘り込みが認められた。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は凹凸が目立つ。明確な床面を伴わず、遺構に伴う柱穴も確認されなかったことから、住居跡とはせず、竪穴状遺構として報告する。遺構内からは、縄文時代後・晩期の縄文土器が多数出土した。当地点の隣地には縄文時代後・晩期の環状盛土遺構から存在することから、削平された盛土が竪穴状遺構の覆土として堆積したのと考えられる。



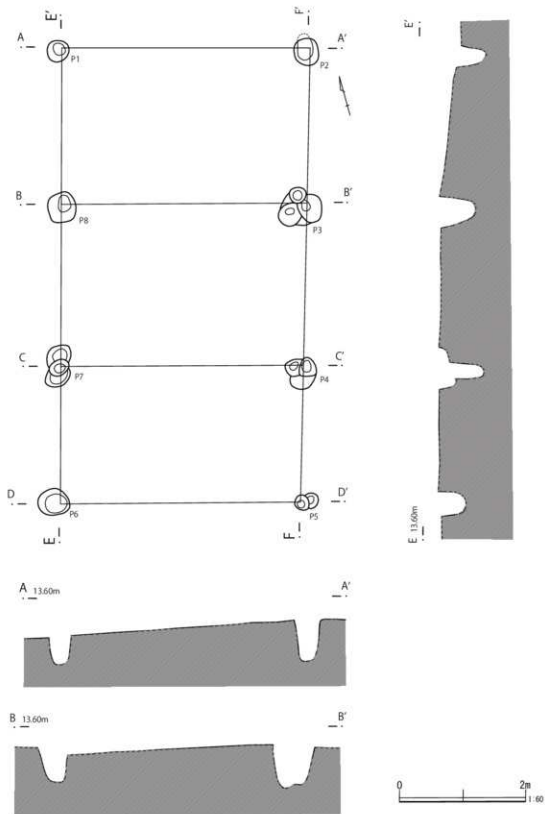
第25図 入耕地遺跡



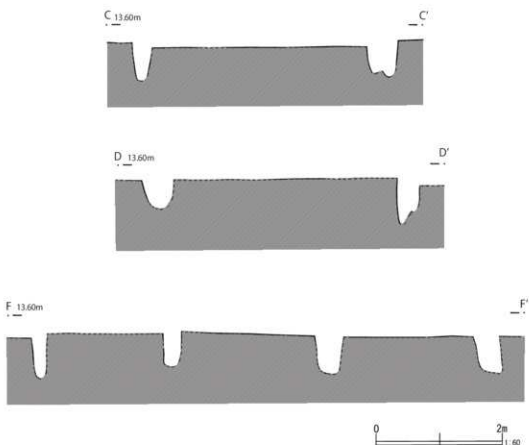
(第11地点) 全測図



第26图 第1号住居跡



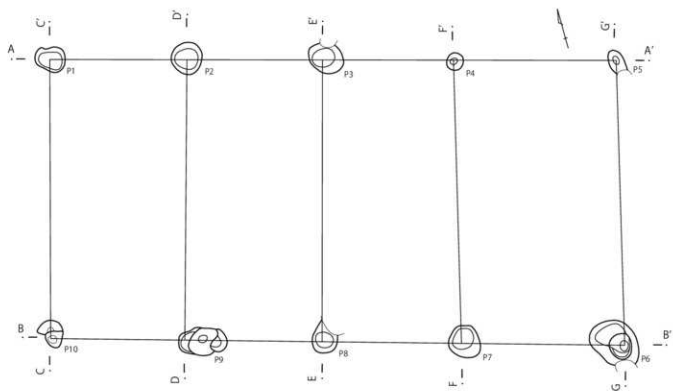
第27图 第1号掘立柱建物跡(1)



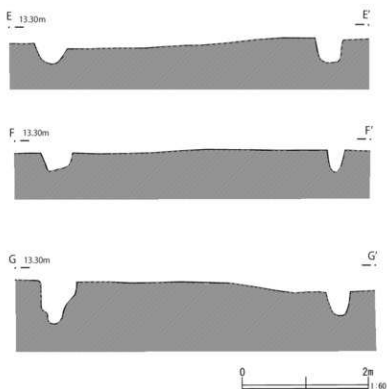
第28図 第1号掘立柱建物跡(2)

出土遺物 (第36・37・38図)

土器 第36図1は精製の浅鉢の口縁部資料である。口縁部内面には刺突が加えられるほか、横走沈線帯を設け沈線間に刻み目を付している。2は緩い波状線深鉢と思われるもので、口縁部には2条の沈線が引かれるほか縦長の貼瘤が付される。3は外反気味に開く口縁部資料で、緩波状を呈する可能性が高い。口唇部は外側に張り出すように整形され、胴部上半の文様帯には、矢羽状の沈線が施される。4は「く」の字に屈曲する胴部資料で、屈曲部の直上には細い縄文帯が設けられる。5・8・9は類例で、わずかに内湾傾向を示す平縁深鉢である。横走沈線を重ね、縄文帯と磨消文帯を交互に形成する。口縁部には刻みのない貼瘤が付される。6・10~12は類例である。内湾傾向を示す平縁深鉢で、肥厚させた口縁部に1帯、明瞭な磨消文帯を挟んでもう1帯の縄文帯が観察される。7は縄文帯と磨消文帯とを重畳させる波状線深鉢の波底部である。各帯を連結するように垂下降帯が付される。13~15は平縁を呈する口縁部資料で、縄文帯の口縁部を持ち、沈線で区画された磨消文帯を持つが、その下端に刻目文帯が配される。また3例とも口縁部から小突起や降帯が垂下する。14では垂下降帯上も横位に刻まれる。15では垂下降帯下端には双刺瘤が付される。16は内湾傾向の強い平縁土器で、肥厚する口縁部の縄文帯と上向きの弧状の縄文帯との交点に縦位の刻みを持つ貼瘤が付されたものである。17は三叉文が陰刻される口縁部資料、18は渦巻文の看取される胴部資料である。19は下向きの弧線区画内に縄文が充填されるもの、20は刻目文帯で背合わせ弧線区画が施されると推測されるものである。21は小型の壺形ないしは注口土器の肩部と思われる、



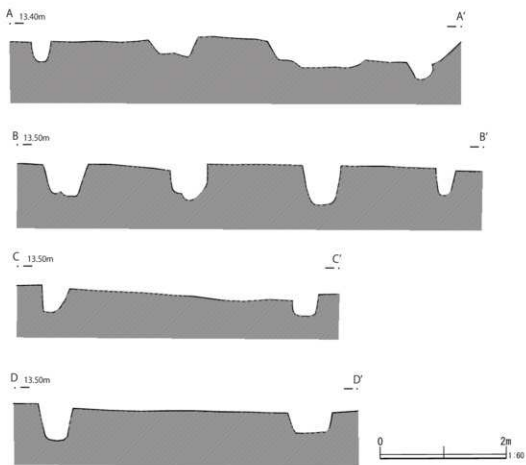
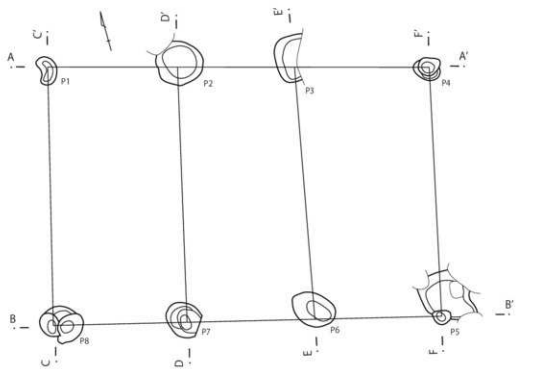
第29图 第2号掘立柱建物跡 (1)



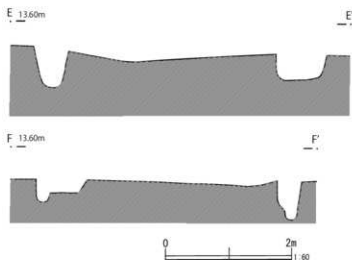
第30図 第2号掘立柱建物跡(2)

縄文地上に三叉文が描出される。22は文様帯の縦位分割軸に2連の双刺瘤が付されたもの、23は緩やかに括れる胴部文様帯の文帯や文様帯の斜行区画に刺突文帯を用いたものである。24~26は口縁部に刺突文帯を持つ平縁深鉢である。25では胴部上半の文様帯にも弧線で区画した刺突文帯が用いられる。27・28は口縁部が直立する平縁深鉢で、口縁部には多截竹管を用いた連続刺突が施され、以下は斜行する条線文となるものである。29~35・37は口縁部に刺突を伴う隆帯を貼る平縁深鉢である。29・32は口縁部がやや外反し肥厚しないもの、31は文様帯内の縦位分割が認められるもの、35はレンズ状の縦位区画が看取されるものである。36は内湾する肥厚口縁に小さな刺突の施されるもので、文様帯には三日月状のモチーフが配されるようである。38~43は胴部上半の文様帯下端を刺突列や刺突を伴う隆帯で閉じる胴部資料である。40・41は三角形の連続刺突、39・42・43は刺突を伴う隆帯の例である。44~46は条線文の観察される胴部資料である。

第37図1は口縁部を内側に折り返す平縁土器で、外面に2条1組の弧線が見られる。2は平縁深鉢で、幅のある無文の口縁部下端を横走沈線で画するものである。3は縦位の垂下沈線が2条認められる平縁資料、4・5は内湾する玉縁となる口縁部を持つ無文の資料、6は「く」の字に屈曲する無文の口縁部資料、7は内面に2条の沈線を巡らせる資料、8は口縁部に扇形の突起を付し、扇の要の位置には貼瘤を配するものである。9・10は無文の平縁土器の口縁部資料で、前者は外傾、後者は内湾する。11~17は無文の胴部資料である。11は頭部に緩い括れを持つもの、13は底部に近く外反傾向の強いものである。18~23・28・29は無文の底部資料で、18はやや丸みを持つ底径4cmほどのもの、20は底面がやや外側に張り出す底径10cmを測るもの、21は浅鉢と思われる底径9.5cmほどのものである。24~26は台付土器の脚台部である。



第31图 第3号掘立柱建物跡(1)



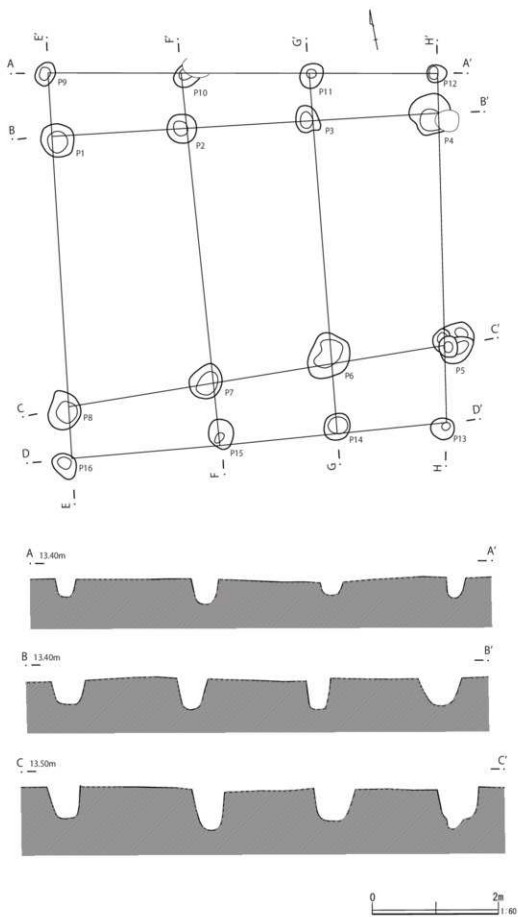
第32図 第3号掘立柱建物跡 (2)

第3表 掘立柱建物跡ビット計測表

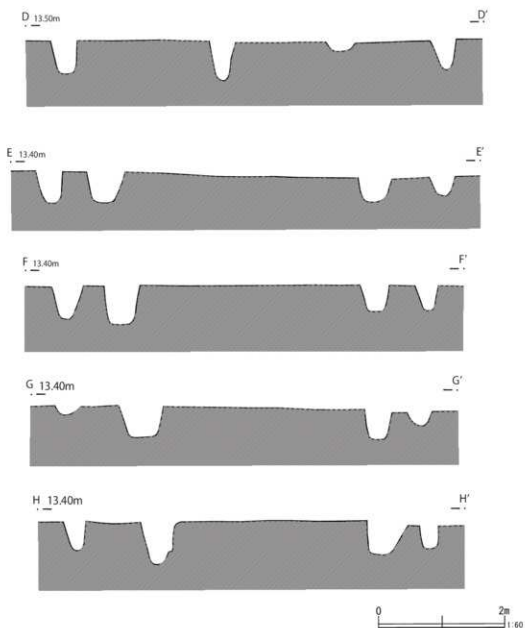
番号	長径	短径	深さ
SB1 P1	36	36	49
SB1 P2	48	38	64
SB1 P3	(40)	38	63
SB1 P4	(30)	(26)	54
SB1 P5	24	22	66
SB1 P6	50	44	44
SB1 P7	38	24	72
SB1 P8	48	44	58
SB2 P1	46	(38)	38
SB2 P2	50	50	36
SB2 P3	58	46	39
SB2 P4	27	26	34
SB2 P5	(40)	24	38
SB2 P6	40	32	70
SB2 P7	58	52	33
SB2 P8	(36)	44	25
SB2 P9	(22)	32	37
SB2 P10	(28)	(28)	70

※単位は全てcm

番号	長径	短径	深さ
SB3 P1	74	50	60
SB3 P2	68	64	37
SB3 P3	69	44	37
SB3 P4	38	34	60
SB3 P5	34	24	42
SB3 P6	42	24	60
SB3 P7	26	24	58
SB3 P8	56	38	48
SB4 P1	52	52	33
SB4 P2	48	46	42
SB4 P3	40	35	48
SB4 P4	60	(30)	47
SB4 P5	57	39	61
SB4 P6	72	62	51
SB4 P7	56	50	50
SB4 P8	60	50	64
SB4 P9	(36)	(32)	49
SB4 P10	34	(30)	46
SB4 P11	41	35	41
SB4 P12	28	28	33
SB4 P13	39	32	45
SB4 P14	42	40	13
SB4 P15	50	38	62
SB4 P16	44	34	52



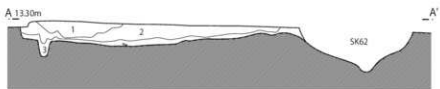
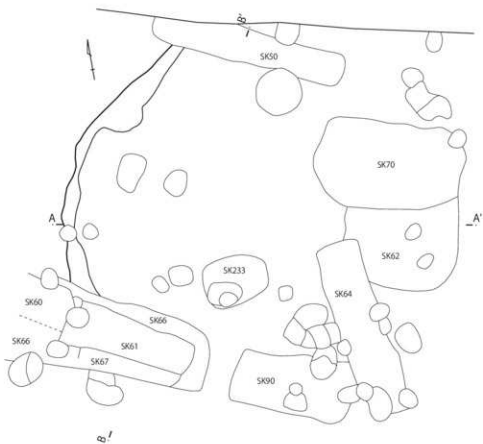
第33图 第4号掘立柱建物跡 (1)



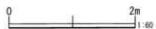
第34図 第4号掘立柱建物跡(2)

24は縄文の施された脚裾部、25は鉢底部から台部への接続部、26は円窓を持つ脚台部である。27は推定底径4cmほどの胴部下半の資料で、残存部最大径は12cmほどで、小型の深鉢形土器である。横位の単筋RL縄文が施される。30は斜行する条線文の施された胴部下半の資料で、推定底径は4cm、残存部最大径は、17cmほどを測る深鉢形土器である。31は天目茶碗の底部資料で、底径4cmを測る。32・34は大振りのカワラケである。前者は、推定口径18cm、器高5.2cmを測り、底面がやや厚い。後者も推定口径18.2cm、推定器高5cmを測る。33は内耳土鍋の口縁部である。やや深さのあるものと思われ、口縁部で屈曲する。

土製品 第38図1は推定直径1.8cmほどと思われる不整形を呈する土製品である。残存部では貫通孔等は確認されない。



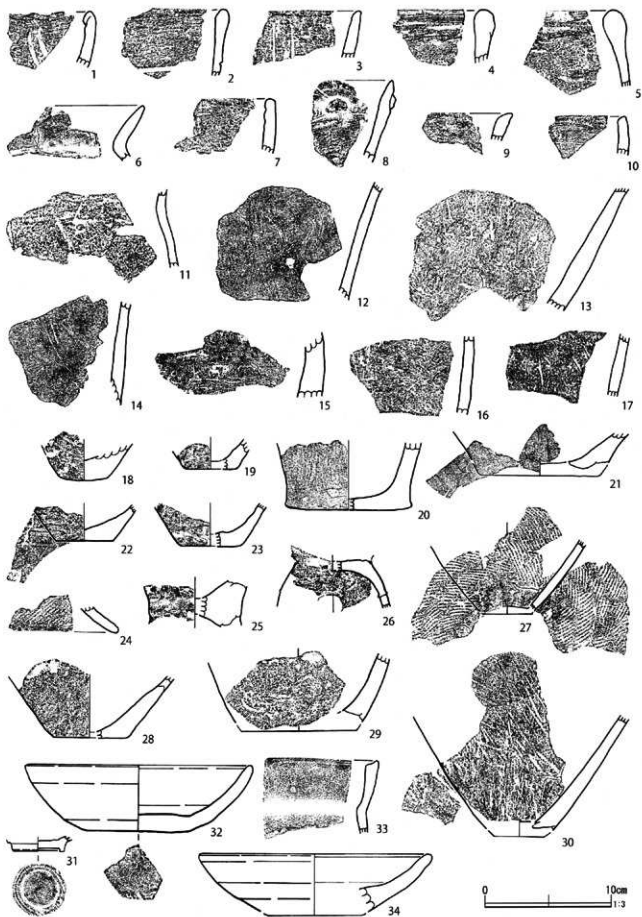
- SI1
 1 黄褐色土 締まりやや強 粘性やや有 ローム土多。
 2 赤褐色土 締まり有 粘性有 径3~4cmのロームブロックと炭化物粒子若干。
 3 赤褐色土 締まり有 粘性有 径5~6cmのロームブロック多。
 GP
 4 黄褐色土 締まり有 粘性有 径5cmほどのロームブロック多。
 5 黄褐色土 締まり有 粘性有 ローム土多。



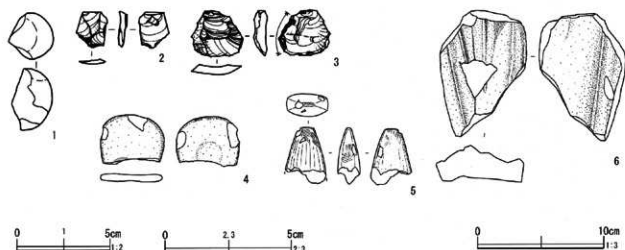
第35図 第1号竖穴状遺構



第36圖 豎穴状遺構出土遺物 (1)



第37圖 竖穴状遺構出土遺物 (2)



第38図 竪穴状遺構出土遺物 (3)

第4表 竪穴状遺構出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
38	2	SI1	二次加工剥片	チャート	1.4	1.3	0.2	0.6	
38	3	SI1	二次加工剥片	チャート	1.8	2.1	0.5	1.8	
38	4	SI1	凹石	砂岩	(3.6)	(3.1)	1.7	(30.1)	
38	5	SI1	磨製石斧	砂岩	(10.0)	(6.8)	2.4	(168.0)	
38	6	SI1	砥石	砂岩	(3.4)	5.0	0.6	(19.3)	

石器 第38図2・3は二次加工剥片である。前者は、やや縦に長い剥片を素材とし、右側縁と先端部に二次加工が施される。先端部は比較的明瞭で、表裏両面から細かい押圧剥離が加えられる。後者は、貝殻状の剥片を素材とし、右側縁に主に正面からの押圧で二次加工を施している。正面左側縁は素材礫の表皮、裏面は素材剥片の主剥離を残す。4は扁平な楕円礫で、裏面中央に浅い潰痕が認められる。5は定角式の磨製石斧の基部残欠である。基部端は、丸みの強い体部からかなり薄く仕上げられている。全体に被熱の痕跡が認められる。6は砥石である。断面形状を見てわかるように、溝状に深く掘れる部分、浅く平坦な部分、鋸状の稜を持つ部分など、かなり複雑な形状を示す。

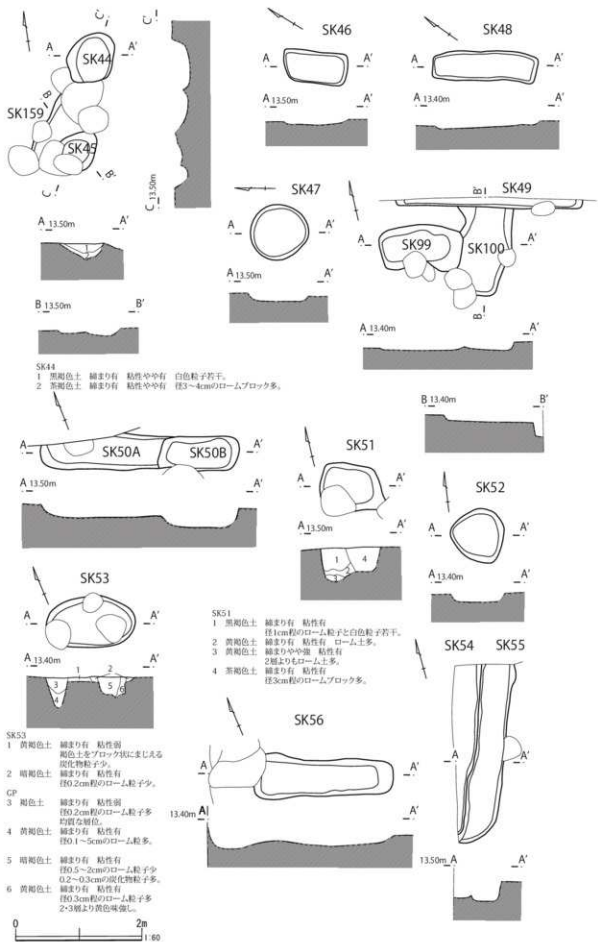
(4) 土坑

●第44号土坑 (第39図)

B2グリッドに位置する。平面形は直径約0.8mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物 (第40図)

土器 1は三叉状入組文の施される平縁土器である。



第39図 第44~56・99・100・159号土坑

●第45号土坑（第39図）

B2グリッドに位置し、第117号土坑を切る。平面形は直径約0.5mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第46号土坑（第39図）

C2グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.5mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第47号土坑（第39図）

C2グリッドに位置する。平面形は直径約0.9mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第40図）

土器 2はやや口縁部が肥厚する平縁深鉢である。口縁部に1条の沈線を持ち、その下位に2条1組の沈線でモチーフが描かれるようである。3・4は晩期安行式に伴う粗製土器である。前者は平縁となる口縁部全体に隆帯を貼り、肥厚させたくえで連続刺突列を施すもの、後者は口縁部に貼った低い隆帯を圧着するように三日月形の連続刺突を施すものである。5は同系統の粗製土器の口縁部文様帯の破片で、斜行する条線文の地文上に縦位のレンズ状文を配すなどするものである。6は壺形土器の肩部の資料で、良く磨かれた器面にやや幅の狭い縄文帯が巡るもの、7は胴部文様帯下端を締める沈線の引かれた資料である。8は無文の底部資料である。底面円盤は輪積みから脱落している。

●第48号土坑（第39図）

D3グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約0.4mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は東寄り浅く窪む。

●第49号土坑（第39図）

C2グリッドに位置し、第57号土坑を切る。北側の大部分が調査区外であるが、残存部で長径約2.9m、を測る。平面形は長方形を呈すものと思われる。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第40図）

土器 9は内湾傾向を示す平縁土器である。肥厚する口縁部に引かれた沈線と背合わせ弧線区画を形成すると思われる弧線が看取される。10は口縁外縁に単節縄文の施される平縁土器である。縄文帯は、稜を持つ幅の狭い帯状の口縁部に施文されるが、その上下は区画されない。

●第50号土坑（第39図）

C2・D2グリッドに位置する。図中でAとBとして示したように、2基の土坑が連なったような形態を呈すが、両者の幅が同一である点や調査時の所見から同一遺構として扱った。Aは北端が調査区外であるが、残存部で長径約1.9m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約1.0mを測り、

底面は平坦である。Bは長径約1.2m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約1.0mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第40図）

土器 11・12は晩期安行式に伴う砲弾形の粗製土器の口縁部資料である。両者とも口縁部には連続刺突列を持つ。前者は、口縁部文様帯を縦位に分割すると思われる垂下沈線が引かれる。13は付加条縄文の地文上に彫りの深いしっかりとした沈線を重畳させるものである。大洞式系譜の一群であろう。14は器面を巡る刺突文帯に双刺瘤を貼る胴部資料、15は幅の狭い縄文帯の看取される碗形土器、16は胴部を巡る沈線が看取される資料である。17は肉厚の底部資料である。

土製品 18・21はいずれも耳飾りの破片資料である。18・19は滑車形の素文の資料、20は栓状の資料、21は、透かし彫りの資料である。

●第51号土坑（第39図）

C2グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.7mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第40図）

土器 22は外傾する鉢形を呈すると思われる土器の口縁部資料である。緩波状を形成するものと思われ、山形をなす波頂部の内外には貼瘤が施される。23～25は、胴部資料で、23は単節縄文の施されるもの、24・25は無文となる資料である。26は器壁の厚い底部資料である。

●第52号土坑（第39図）

D3グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第53号土坑（第39図）

D3グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約0.8mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第40図）

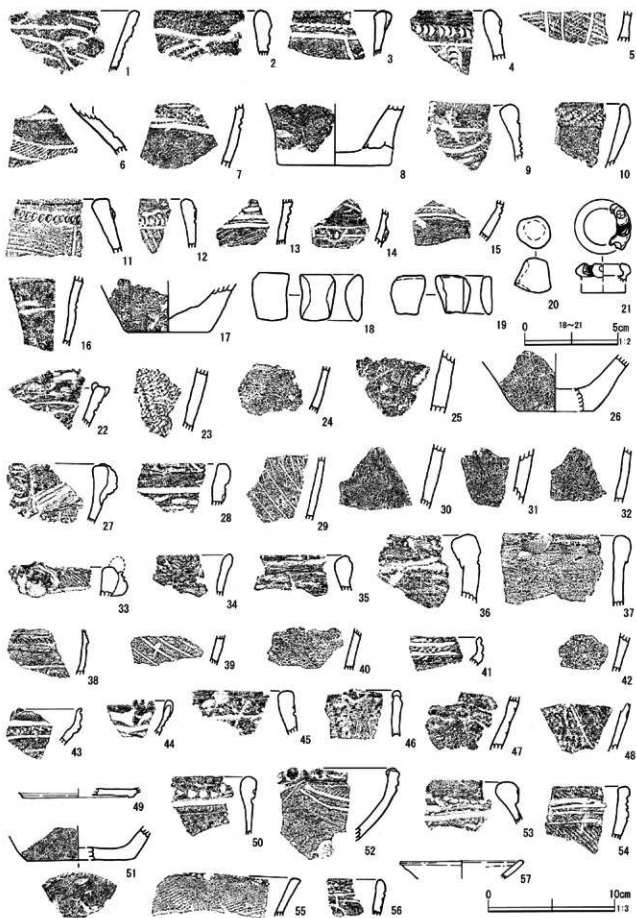
土器 27は波状縁深鉢の波底部の資料である。波底部に丈の高い貼瘤が貼られる。28は、口縁部に上下を沈線で画す刺突文帯が形成される資料である。29～32は胴部資料で、29は斜行する条線文が施されるが残り3点は無文である。

●第54号土坑（第39図）

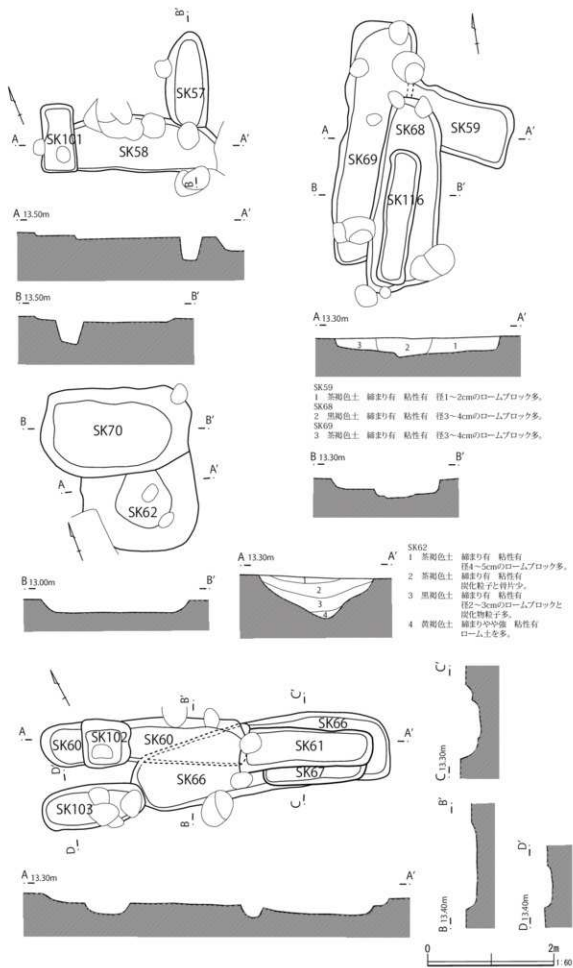
B2グリッドに位置し、第55号土坑を切る。西・北側の大部分が調査区外であるが、残存部で長径約2.8m、短径0.4mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第55号土坑（第39図）

B2グリッドに位置し、第54号土坑に切られる。西側を切られ北側が調査区外であるが、残存部で長径



第40圖 土坑出土遺物(2)



第41図 第57・62・66・70・101・103・116号土坑

約2.8m、短径0.4mを測る。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第40図)

土器 33は突起の付される平縁土器の口縁部資料である。口縁部の縄文帯上に丸い貼瘤が貼られ、これと符合する口唇部上にも突起が付された痕跡が残される。34~37はいずれも無文の口縁部資料で、34は薄手で外反するもの、35は内湾傾向の強いもの、36は肉厚で大振りな資料、37は直立傾向の強い大振りな資料である。38は薄手の精製土器の胴部資料で、縄文の施される細い横走隆帯や沈線が看取される。39は右下がりの条線文の施されるもの、40は無文のものである。

●第56号土坑 (第39図)

B2グリッドに位置する。平面形は長径約2.2m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第57号土坑 (第41図)

C2グリッドに位置し、第58号土坑に切られる。南側を切られるが、残存部で長径約1.5m、短径0.7mを測る。確認面から床面までの深さは約0.9mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第40図)

土器 41は内湾する小型の精製土器で、幅の狭い縄文帯が口縁部を巡る。42は無文の胴部資料である。

●第58号土坑 (第41図)

C2グリッドに位置し、第57号土坑を切り、第101号土坑に切られる。西側を切られるが、残存部で長径約2.0m、短径0.8mを測る。確認面から床面までの深さは約0.7mを測り、底面は平坦である。

●第59号土坑 (第41図)

D2グリッドに位置し、第68・69号土坑に切られる。西側を切られるが、残存部で長径約1.7m、短径0.9mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第40図)

土器 43はやや受け口風に屈曲する口縁部資料で、口縁部外周を幅狭の縄文帯が巡る。44は外反する薄手の平縁土器で、口縁部に刻みを持つ突起が配される。45は小さな刺突列の施される口縁部資料である。刺突文帯下端は横走沈線で画される。46は無文の口縁部資料で、口唇部には折り返し風の隆帯が看取される。47・48は胴部資料で、前者は意図的に輪積痕を残すものである。

●第60号土坑 (第41図)

C2グリッドに位置し、第61・66・102号土坑に切られる。東側を切られるが、残存部で長径約2.0m、短径0.7mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第40図)

土器 49は、扁平な高台の付される陶器底部資料である。推定底径は9cmである。50は、肥厚する口縁部に刺突の施される平縁土器である。

●第61号土坑（第41図）

C2・C3グリッドに位置し、第60・66・67号土坑を切る。平面形は長径約2.0m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第40図）

土器 51は推定底径9cmを測る縄文土器の底部資料である。体部、底面とも無文である。

●第62号土坑（第41図）

D2・D3グリッドに位置し、第64・70号土坑に切られる。平面形は長径約1.8m、短径約1.2mの不整形平面を呈す。確認面からの深さは約0.52mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第40図）

土器 52は平緑若しくはごく緩い波状線を呈する浅鉢形土器の口縁部資料で、口唇部から口唇内面にかけて扁平な貼瘤が付される。これを起点として「八」の字状に開く2条1組の沈線が見られる。53は強く内湾する平緑粗製土器の口縁部資料で、玉緑状をなす口縁外面には刺突列が施される。54は口縁部に至って直立傾向を強める平緑土器で、口縁部外面には数条の横走沈線帯が形成される。55はいわゆる外傾頭部縄文帯型の平緑土器口縁部である。56は刺突の施される口縁部文様帯の下に弧線文を見てとることのできる資料である。57は推定口径9.5cmほどの陶器皿である。

●第63号土坑（第42図）

B2・C2・C3グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.2mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第43図）

土器 1は口縁部に縄文帯の施された比較的薄手の資料、2は内湾する砲弾形の粗製土器の口縁部資料、3は無文の口縁部資料である。4は刺突のある貼瘤が付された頭部資料で、小型の壺形土器と思われる。5は垂下する2条の沈線で区画された内部に横位の平行沈線が引かれるものである。6は刺突の付される隆帯が胴部を巡る安行式に伴う粗製土器、7は横位の鋸歯文が形成されると思われる胴部資料、8は口縁部の脱落した砲弾形の粗製土器であろう。

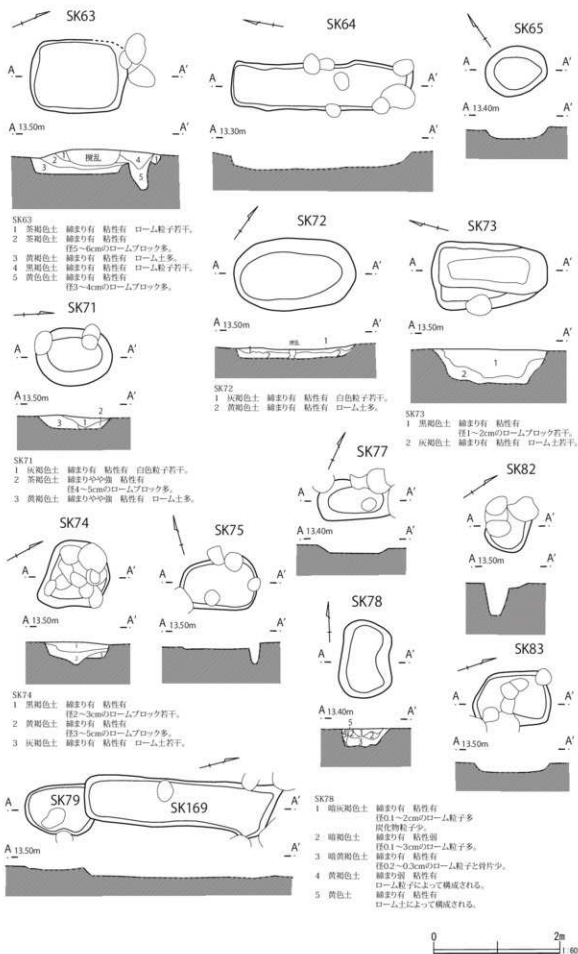
石器 9は磨石兼敲石である。厚みのある円礫を素材とし、側縁に敲打を加えて整形したもので、欠損後、もう一度石鱗状に整形しなおすとともに、敲石としても使用している。

●第64号土坑（第42図）

D2・D3グリッドに位置し、第62・90号土坑を切る。平面形は長径約2.8m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は北寄りがやや浅く窪む。

出土遺物（第43図）

土器 10は縄文帯のみられる波状線深鉢である。資料は波底部から波頂部平行する中間部に相当する。11は縄文の施される胴部に「の」の字状の入組文が施されるとと思われる資料である。12は三日月状の刺突の施された隆帯が看取される粗製土器、13～15は無文の胴部資料である。



第42図 第63・65・71・75・77・79・82・83・169号土坑

●第65号土坑（第42図）

B3グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第66号土坑（第41図）

D2・D3グリッドに位置し、第60号土坑を切り、第61・67・103号土坑に切られる。平面形は長径約4.0m、短径約1.4mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第67号土坑（第41図）

C3グリッドに位置し、第66号土坑を切り、第61号土坑に切られる。北側を切られるため、短径は不明であるが、長径約1.6mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第68号土坑（第41図）

D2・D3グリッドに位置し、第59・69号土坑を切り、第74号土坑に切られる。平面形は長径約3.0m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第43図）

土器 16～18は無文の口縁部資料で、16は外反する口唇部を肥厚させる平縁資料、17は内湾するもの、18は肥厚しながらやや外傾するものである。19は三日月状の刺突の施された粗製土器の胴部資料、20は無文の台付鉢の鉢底周辺部の資料である。

●第69号土坑（第41図）

D2・D3グリッドに位置し、第59号土坑を切り、第25号土坑に切られる。平面形は長径約4.0m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第43図）

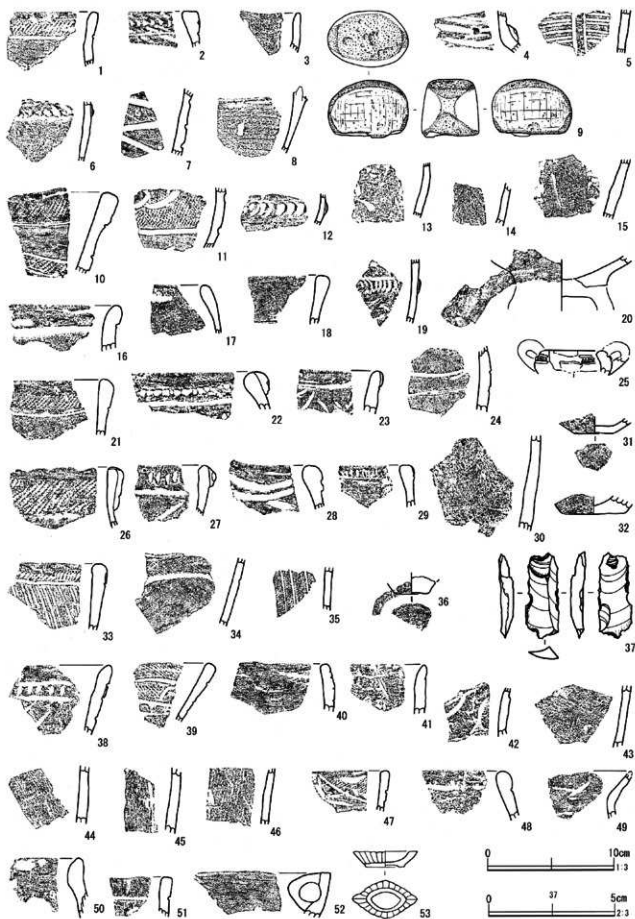
土器 21は細い沈線で画された縄文帯の看取される平縁深鉢である。22・23は粗製土器の口縁部資料で、前者は内湾傾向が強く肥厚口縁上に刺突列の形成されるもの、後者は丈の低い隆帯を貼った口縁部を1条の沈線で画し、以下に2条1組の沈線で鋸歯状のモチーフを施すものである。24は横走沈線の見られる胴部資料である。25はごく小さいが精製の資料で、推定口径5.4cmを測り、よく磨かれた口縁部に精緻な刺突文帯を巡らせ、比較的大きな橋状把手を配したと思われる資料である。

●第70号土坑（第41図）

D2グリッドに位置し、第62号土坑を切る。平面形は長径約0.2m、短径約0.1mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第43図）

土器 26は肥厚させた口縁部に縄文帯を持つ平縁広口壺と思われる資料である。口唇部には漣状の刻みが施される。27は隆帯を貼って肥厚させた口縁部に刺突を施す平縁資料、28は内湾する口縁部に弧状沈



第43圖 土坑出土遺物(3)

線を配する資料、29は口縁外周に連続刺突を施す砲弾形の平縁土器である。30は単節縄文の施された胴部資料、31・32は底部資料である。

●第71号土坑（第42図）

B3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第43図）

土器 33は口縁外周に連続刺突を施す砲弾形の平縁土器で胴部上半の文様帯にはやや右下がりとなる条線文が充填される。34は細密沈線の施された胴部資料、35は縦位の沈線が見られる胴部資料である。36は小型の底部資料で、底径は、2～4cmしかない。

●第72号土坑（第42図）

B3グリッドに位置する。平面形は長径約1.9m、短径約1.1mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第73号土坑（第42図）

B3・B4グリッドに位置する。平面形は長径約1.8m、短径約1.0mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが窪む。

出土遺物（第43図）

土器 38は外傾する口縁部に、刺突文帯を巡らせる平縁土器、39は地文に縄文を持つ平縁の浅鉢形土器である。40・41はいずれも無文の口縁部資料で、意図的に輪積痕を残す。42は2条1組の弧線文と縦長の楕円文と思われる弧線が看取される資料、43～45は無文の胴部資料である。

石器 37は黒曜石製の縦長剥片で、正面には、上部からの加撃による剥離面が大きく2面残される。裏面は主剥離面で、上部に打瘤と打瘤裂痕が残される。両側縁及び先端部に二次加工の痕跡を認める。

●第74号土坑（第42図）

B4グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.9mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は中央がやや浅く窪む。

出土遺物（第43図）

土器 46は無文の胴部破片である。

●第75号土坑（第42図）

B4グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.8mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第76号土坑（第44図）

B4・C4・C5グリッドに位置し、第86・192号土坑を切る。平面形は長径約8.3m、短径約0.9mの長方形

を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第43図)

土器 47は薄手に作られた精製土器の口縁部で、「八」の字を描く弧線文で縄文帯を画して形成された磨消文帯に三叉文を描出している。48は内湾する口縁部資料で口縁部を巡る1条の沈線が観察される。49は「く」の字に屈曲する口縁部付近の資料である。50は内湾傾向を示す無文の口縁部資料、51は角頭状の口唇部を持つ平縁資料で、口縁部に1条の沈線が引かれる。52は焙烙の口縁部資料で、内耳が付される。

ガラス製品 53はガラス製の紅皿と思われ、平面形状は菱形で輪花風に鑄が形成される。

●第77号土坑 (第42図)

B5グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.6mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第78号土坑 (第42図)

C3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.8mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第45図)

土器 1は、わずかに内湾する口縁部資料で、2条の沈線で画された口縁部には細かな刺突列が見受けられる。2は無文の胴部資料、3は、在地産陶器の摺鉢片である。

●第79号土坑 (第42図)

D4グリッドに位置し、第169号土坑を切る。平面形は長径約3.0m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第45図)

土器 4はわずかに内湾する口縁部資料で、1条の沈線で画された口縁部には三角形の刺突列が見られる。5は口縁部文様帯下端に丈の高い隆帯を貼り、丸みを帯びる胴部には、入組弧線文を配し縄文帯にするとと思われる資料である。6は縄文帯上に双刺瘤の施される深鉢形土器の胴部資料である。

●第80号土坑 (第44図)

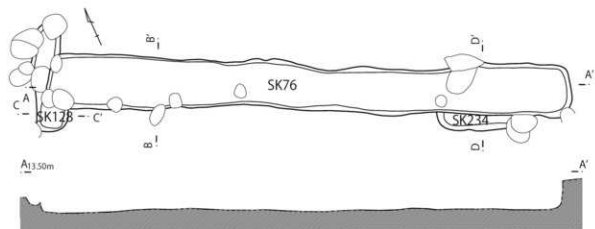
C3グリッドに位置し、第81・89号土坑を切る。平面形は長径約1.6m、短径約0.8mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

出土遺物 (第45図)

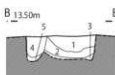
土器 7は刺突文帯が胴部を巡るとと思われる資料、8は無文の胴部資料である。9は底径10cmほどを測る比較的大振りの青磁碗底部である。高台は欠損する。

●第81号土坑 (第44図)

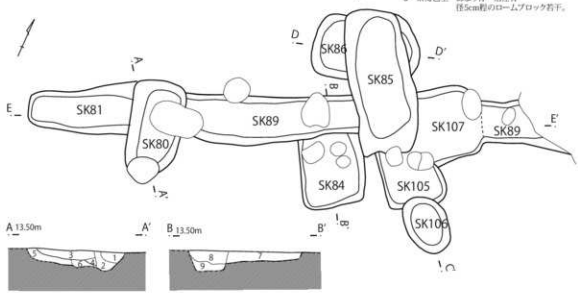
C3グリッドに位置し、第37号土坑に切られる。東側は切られるが、残存部で長径約1.2m、短径約0.8mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。



A 13.50m



- SK76
- 1 黒褐色土 締まり有 粘性有 径1~2cmのロームブロック若干。
 - 2 灰褐色土 締まり有 粘性弱 ローム土若干。
 - 3 黄褐色土 締まりや中強 粘性有 ローム土多。
 - 4 黒褐色土 締まり有 粘性有 径3~4cmのロームブロック若干。
 - 5 茶褐色土 締まり有 粘性有 径5cm程のロームブロック若干。



A 13.50m



B 13.50m



C 13.50m



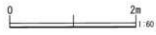
D' 13.40m



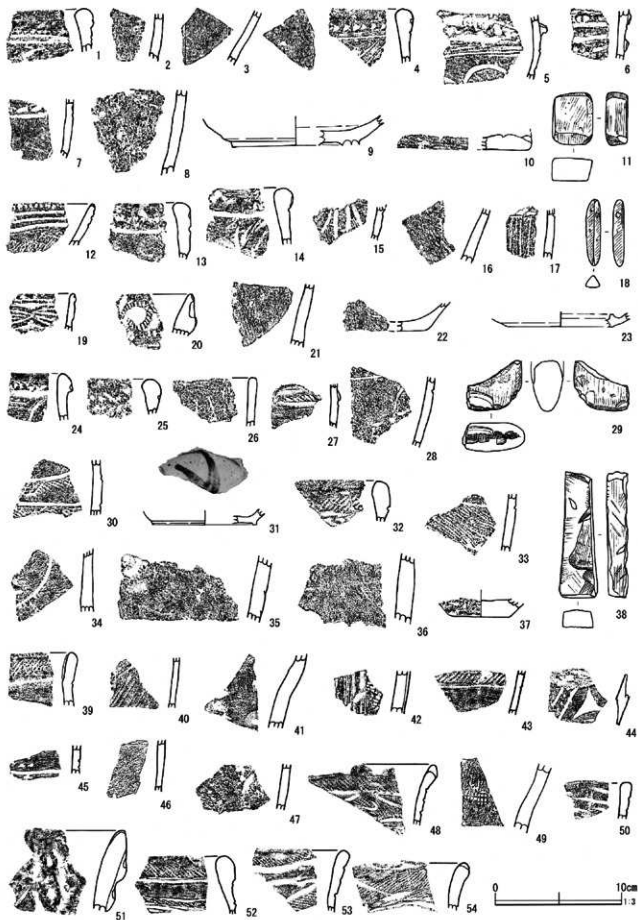
E 13.50m



- SK80
- 1 黒褐色土 締まり弱 粘性弱 径0.2~1.5cmのローム粒子多 炭化物粒子少。
 - 2 暗黄褐色土 締まり弱 粘性有 黒褐色土をまじえる ローム粒子主体層。
 - 3 暗灰褐色土 締まり有 粘性有 径0.2cm程のローム粒子多 炭化物粒子少。
 - 4 灰黒色土 締まり有 粘性有 径0.2cm程のローム粒子少 径0.5cm程の炭化物粒子を含む。
 - 5 暗灰色土 締まり有 粘性有 径0.2cm程のローム粒子多 炭化物粒子少。
 - 6 暗褐色土 締まり強 粘性有 径0.2cm程のローム粒子多。
- SK84
- 7 黒褐色土 締まり有 粘性有 径2~3cmのロームブロックとローム粒子若干。
- SK89
- 8 茶褐色土 締まり有 粘性有 ローム粒子と白色粒子若干。
 - 9 黄褐色土 締まりや中強 粘性有 径7~8cmの丸粒のロームブロック多。



第44図 第76・80・81・84~86・89・105~107・128・234号土坑



第45圖 土坑出土遺物(4)

●第82号土坑（第42図）

C4グリッドに位置する。東側はグリッドピットに切られるが、残存部で長径約0.7m、短径約0.6mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第83号土坑（第42図）

C4グリッドに位置し、第44号土坑を切る。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第84号土坑（第44図）

C3・C4グリッドに位置し、第89号土坑に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約1.2m、短径約1.0mを測る。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第85号土坑（第44図）

C3・C4グリッドに位置し、第86・89・105・107号土坑を切る。平面形は長径約2.3m、短径約1.0mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第86号土坑（第44図）

C3グリッドに位置し、第85号土坑に切られる。平面形は長径約1.7m、短径約1.5mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第45図）

土器 10は平底を呈する縄文土器の底部資料である。

土製品 11は瓦転用砥石である。断面形状は長方形で、消しゴムの様な直方体をなす。6面すべての面に研磨痕が残される。

●第87号土坑（第46図）

C4グリッドに位置し、第83号土坑に切られる。平面形は長径約1.3m、短径約0.8mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第88号土坑（第46図）

C4グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.8mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第89号土坑（第44図）

C3・C4・D4グリッドに位置し、第84号土坑を切り、第80・85・107号土坑に切られる。両端は切られるが、残存部で長径約6.3m、短径約0.8mを測る。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第45図）

土器 12は外反する浅鉢形土器の口縁部資料である。口縁部には3条の沈線が回り、口唇部には刻みが施される。大洞式系譜の資料であろう。13・14は粗製土器の口縁部資料である。前者は、口縁部に刺突文帯を置くもの、後者は、拓本では判然としないが、刺し切るような刺突を有する。摩擦が進行している。15は垂下する2条の沈線を挟んで「八」の字に開く沈線が引かれるものである。形成された鋭角の鋸歯内には縄文が充填される。16は無文の胴部資料、17は縦位の条線の看取される胴部資料である。

土製品 18は、瓦転用砥石である。断面三角形の棒状に整形されたもので、三面すべてに研磨痕が残される。手で持ち細部を研磨したものと思われる。

●第90号土坑（第46図）

C3・D3グリッドに位置し、第64号土坑に切られる。平面形は長径約1.9m、短径約0.9mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第45・68図）

土器 19は、弧線と直線が組み合わされた木葉文が横位に連続する資料で、連結部の上下には三叉文が陰刻される。薄く仕上げられた平縁の資料で、晩期末葉に比定されようか。

銭貨 第68図7は、摩滅しており判読できないが、大きさその他から推測すると明治時代の半銭銅貨である可能性が高い。

●第91号土坑（第46図）

D5・E5グリッドに位置する。平面形は長径約5.2m、短径約1.0mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第45図）

土器 20は口縁部に刻みを持つ渦巻文の配される平縁土器である。渦巻きの内側は陰刻される。21は無文の胴部、22は無文の底部資料である。23は灯明皿の破片資料である。

●第92号土坑（第46図）

E3・F3グリッドに位置する。平面形は長径約2.7m、短径約1.0mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

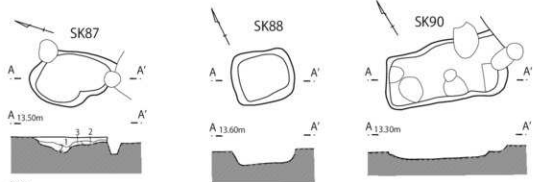
出土遺物（第45図）

土器 24・25は安行式期に伴う粗製土器の口縁部である。ともに平縁で、前者は、口縁部を肥厚させ鎖状隆帯を巡らせるもの、後者は、刺突列を巡らせるものである。26は無文の口縁部資料、27は細い隆帯状に単節縄文を施す縄文帯が器面を巡るもの、28は文様帯下端区画と思われる1条の沈線が観察されるものである。

石器 29は磨製石斧の刃部残欠である。もともときれいに調整加工を施された定角式の磨製石斧と見られる。刃部は使用によるものか、刃潰れが著しい。

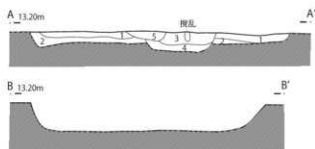
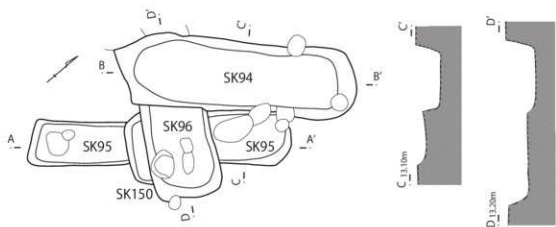
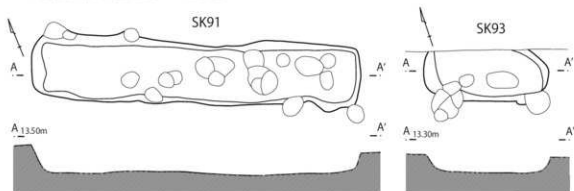
●第93号土坑（第46図）

E2グリッドに位置する。北側は調査区外が、残存部で長径約2.0m、短径約1.8mを測る。確認面から



SK87

- 1 茶褐色土 締まり有 粘性有
- 2 黄褐色土 締まり有 粘性有 径6cm程のロームブロック多。
- 3 黄褐色土 締まりやや強 粘性有 ローム土層多。



SK95

- 1 茶褐色土 締まり有 粘性有 ローム粒子和赤色粒子多。

- 2 灰褐色土 締まりやや強 粘性やや強 径1~2cmのロームブロック多。

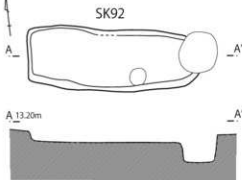
SK96

- 3 灰褐色土 締まりやや強 粘性やや強 径2cm程のロームブロックと赤色粒子多。

- 4 黒褐色土 締まり有 粘性有 径2~3cmのロームブロック若干。

SK150

- 5 茶褐色土 締まり有 粘性有 径2cm程のロームブロック多。



第46図 第87・88・90~96・150号土坑

の深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第45図)

土器 30は、2条の沈線が観察される胴部資料、31は、底径8.2cmほどと思われる磁器の底部である。

●第94号土坑 (第46図)

F2・F3グリッドに位置し、第52・53号土坑を切る。平面形は長径約3.8m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第45図)

土器 32は肥厚する口縁部に縄文の施される平縁土器である。33～35は胴部資料で、33は沈線の下側に単節縄文が充填されるもの、34は無文地に縦位の弧線が引かれるもの、35・36は無文のものである。37は底径5cmほどの底部資料である。

石器 38は、砥石である。断面形状は扁平な台形で、裏面は剥落する。残される4面全てに研磨痕が見られる。

●第95号土坑 (第46図)

F3グリッドに位置し、第94・96・150号土坑を切る。平面形は長径約4.1m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

●第96号土坑 (第46図)

F3グリッドに位置し、第95・150号土坑を切り、第51号土坑に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約1.4m、短径約1.1mを測る。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第45図)

土器 39はわずかに外反傾向を示す平縁土器で、1条の沈線で区画された口縁部には単節縄文が施される。40・41は無文の胴部資料で、前者は左下がりの整形痕が明瞭に残される。

●第97号土坑 (第47図)

F3グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第98号土坑 (第47図)

F2・F3グリッドに位置する。北側は調査区外であるが、残存部で長径約1.3m、短径約1.2mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第99号土坑 (第39図)

C2グリッドに位置し、第57号土坑を切る。平面形は長径約1.3m、短径約0.6mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第100号土坑（第39図）

C2グリッドに位置し、第6・56号土坑に切られる。平面形は長径約1.4m、短径約0.8mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第101号土坑（第41図）

C2グリッドに位置し、第15号土坑を切る。平面形は長径約1.1m、短径約0.3mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第102号土坑（第41図）

C2グリッドに位置し、第60号土坑を切る。平面形は直径約0.8mの正方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第103号土坑（第41図）

B2・C2グリッドに位置し、第66号土坑を切る。平面形は長径約1.8m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第104号土坑（第47図）

F5・F6・G5・G6グリッドに位置する。平面形は長径約3.8m、短径約1.0mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第45図）

土器 42は2条の沈線で縁取られた垂下隆帯と縦位回転の単節縄文を見てとることのできる胴部資料である。縄文中期の資料である。43は下端を細い単沈線で画す縄文帯の見られる胴部資料である。

●第105号土坑（第44図）

C4グリッドに位置し、第107号土坑を切り、第42・64号土坑に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約1.0m、短径約0.9mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第106号土坑（第44図）

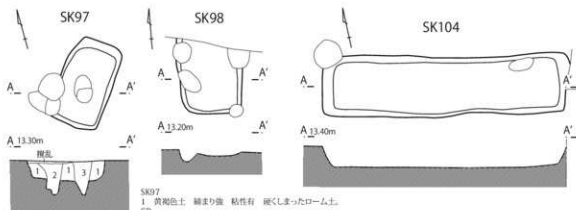
B2・C2グリッドに位置し、第63号土坑を切る。平面形は長径約0.9m、短径約0.7mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第45図）

土器 44は、斜行する2条の沈線と三叉文の観察される胴部資料、45は、横走沈線の施された胴部資料である。

●第107号土坑（第44図）

C4グリッドに位置し、第46号土坑を切り、第85・105号土坑に切られる。西側は切られるが、残存部で長径約1.2m、短径約1.0mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。



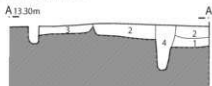
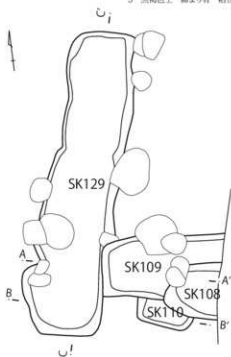
SK97

1 黄褐色土 締まり強 粘性有 硬くしまったローム土。

CP

2 黒褐色土 締まり有 粘性有 径2cm程のロームブロック多。

3 黒褐色土 締まり有 粘性有 ローム粒子と炭化物粒子多。



SK108

1 灰褐色土 締まりやや強 粘性有 ローム粒子若干。

SK109

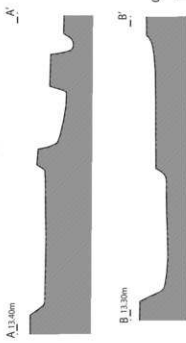
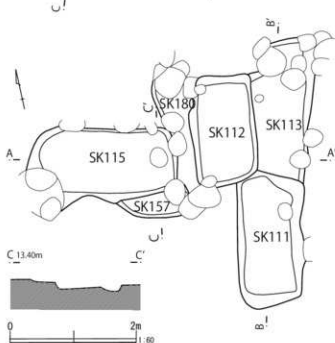
2 黄褐色土 締まり有 粘性有 ローム土若干。

SK129

3 黄褐色土 締まり有 粘性有 ローム土若干。

CP

4 黒褐色土 締まり有 粘性有 ローム粒子若干。



第47図 第97・98・104・108～113・115・129・155・180号土坑

●第108号土坑（第47図）

G4グリッドに位置し、第67・68号土坑を切る。東側は調査区外であるが、残存部で長径約0.9m、短径約0.8mを測る。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第109号土坑（第47図）

G4グリッドに位置し、第68・87号土坑を切り、第66号土坑に切られる。東側は調査区外であるが、残存部で長径約2.0m、短径約0.9mを測る。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第45図）

土器 46・47は、ともに無文の胴部資料である。

●第110号土坑（第47図）

G4グリッドに位置し、第108・109号土坑に切られる。大部分を切られているため、平面形は定かではないが、不整形を呈すものと思われる。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第111号土坑（第47図）

F4グリッドに位置し、第113号土坑を切り、第112号土坑に切られる。平面形は長径約2.1m、短径約1.0mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第45図）

土器 48は、口唇部に2個1組の突起を持つ平縁深鉢で、口縁部文様帯内には、縦位の大振幅の鋸歯文と鋸歯文同士の間隙に垂下する蛇行沈線を見ることができる。地文は単節RL縄文である。49は、正格子の叩き目の観察される常滑焼の大甕破片である。

●第112号土坑（第47図）

F4グリッドに位置し、第111・113・180号土坑を切る。平面形は長径約1.7m、短径約1.0mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第113号土坑（第47図）

F4・G4グリッドに位置し、第111・112号土坑に切られる。南側は切られるが、残存部で長径約2.2m、短径約1.0mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第114号土坑（第48図）

E5・F5グリッドに位置する。南側は削平されるが、残存部で長径約4.8m、短径約0.9mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第45・49図）

土器 第45図50は彫りの深い沈線で三叉状入組文などを描出すると思われる資料で、ごく緩い波状縁を呈するものと思われる。51は魚尾状把手の付される波状縁深鉢である。把手外面には刺突を有する縦位の貼瘤が付される。52～54は縄文の施された口縁部資料である。52は内湾傾向の強いもの、53・54は外

傾するもので後者は口唇部に貼瘤が付される。

第49図1はわずかに内湾する口縁部外面に彫りの深い沈線が1条巡るものである。2は「く」の字に括れる頸部に鎖状隆帯が巡るもの、3は下向きの連弧文が見られるもの、4は無文の胴部資料である。

石器 第49図5は、磨石の残欠である。側縁調整等は施されていない。

●第115号土坑（第47図）

F4グリッドに位置し、第155・180号土坑を切る。平面形は長径約2.3m、短径約1.1mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第49図）

土器 6は肥厚する口縁部に細かい単節縄文を施す平縁深鉢である。口縁部文様帯には弧線で画された磨消文帯と縄文帯とが看取される。7は縦位の整形痕が顕著な胴部資料である。

●第116号土坑（第41図）

D2・D3グリッドに位置し、第25号土坑を切る。平面形は長径約2.1m、短径約0.5mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第117号土坑（第48図）

E2グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第118号土坑（第48図）

E2グリッドに位置する。北側は調査区外であるが、残存部で長径約1.4m、短径約0.6mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第119号土坑（第48図）

E2グリッドに位置する。北側は調査区外であるが、残存部で長径約1.1m、短径約0.7mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第49図）

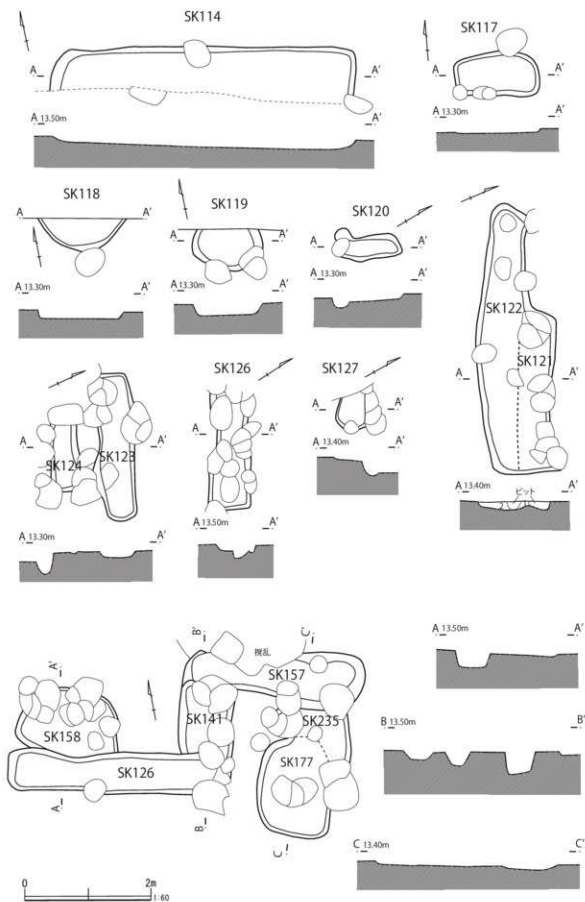
土器 8は口縁部に彫りの深い1条の沈線が観察される平縁土器、9は無文の胴部資料である。

●第120号土坑（第48図）

D2グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.4mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は南寄りが高く窪む。

●第121号土坑（第48図）

F5グリッドに位置し、第80号土坑と接するが切り合い関係は不明である。平面形は長径約2.6m、短径約0.5mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。



第48图 第114·117~127·141·157·158·177·235号土坑

出土遺物 (第49図)

土器 10は胴部が膨らみ、口縁部が直立する無文地の深鉢で、横走沈線で画された口縁部には上開きの、膨らんだ胴部には下開きの連弧文が観察される。

●**第122号土坑** (第48図)

D5・F5グリッドに位置し、第79号土坑と接するが切り合い関係は不明である。平面形は長径約4.2m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●**第123号土坑** (第48図)

E3グリッドに位置する。平面形は長径約2.3m、短径約0.5mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第49図)

土器 11は、肥厚する口縁部に単節RL縄文が施される平縁土器である。

●**第124号土坑** (第48図)

E3グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.5mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●**第125号土坑** (第48図)

E4グリッドに位置し、第99・116号土坑を切る。平面形は長径約3.3m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●**第126号土坑** (第48図)

B4グリッドに位置する。平面形は長径約1.7m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●**第127号土坑** (第48図)

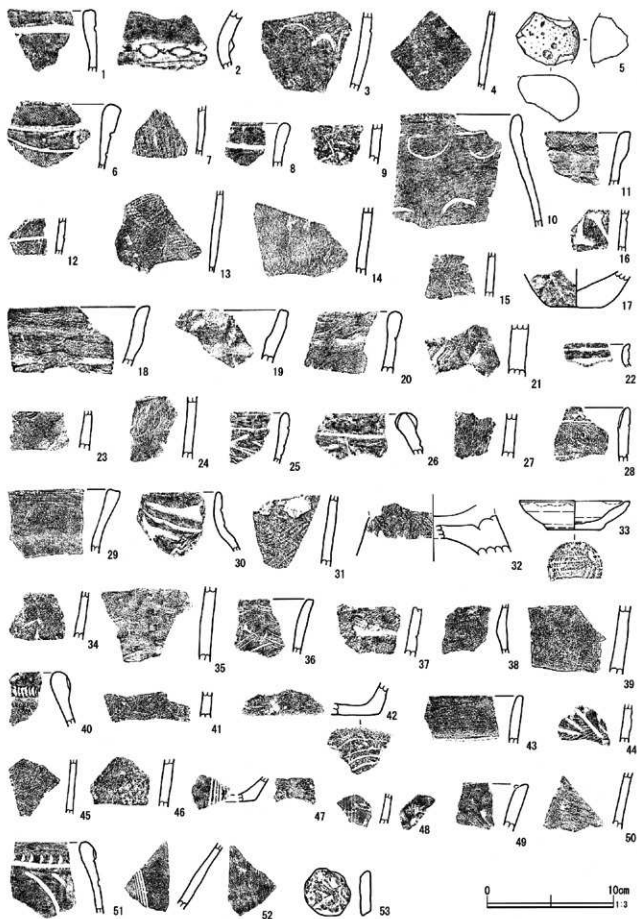
B4グリッドに位置する。西側は調査区外であるが、残存部で長径約0.6m、短径約0.4mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●**第128号土坑** (第44図)

B4グリッドに位置し、第33号土坑に切られる。平面形は長径約1.7m、短径約0.5mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●**第129号土坑** (第47図)

G4・B4グリッドに位置し、第67号土坑に切られる。平面形は長径約4.8m、短径約1.2mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。



第49圖 土坑出土遺物 (5)

出土遺物 (第49図)

土器 12は横走沈線の引かれる無文地の胴部資料、13は単節LR縄文が施された上からナデ整形を加える胴部資料である。

●**第130号土坑** (第50図)

E3グリッドに位置し、第131号土坑を切り、第156号土坑に切られる。東側は切られるが、残存部で長径約0.7m、短径約0.6mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●**第131号土坑** (第50図)

E3グリッドに位置し、第130・133・156号土坑に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約3.1m、短径約0.6mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●**第132号土坑** (第50図)

E3グリッドに位置し、第131号土坑を切り、第156号土坑に切られる。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第49図)

土器 14~16はいずれも胴部破片で、前2者は無文のもの、後者は彫りの深い沈線で三叉状入組文等を描くものであろう。17は底部資料で、底径4cmほどを測る。

●**第133号土坑** (第50図)

E3グリッドに位置し、第131・156号土坑を切る。平面形は長径約2.1m、短径約1.0mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第49図)

土器 18・19はともに焙烙の口縁部資料である。

●**第134号土坑** (第50図)

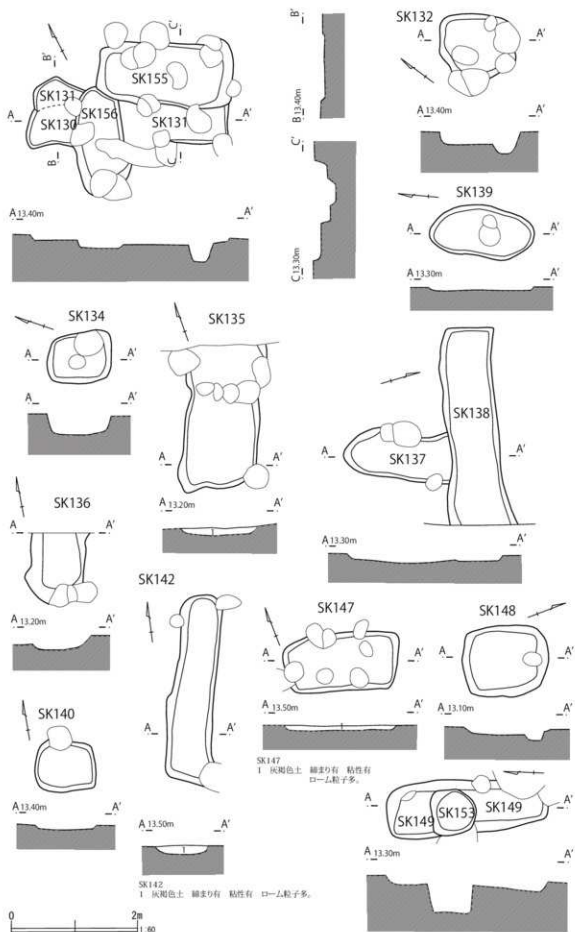
E3グリッドに位置する。平面形は長径1.0m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●**第135号土坑** (第50図)

G3グリッドに位置する。北側は調査区外であるが、残存部で長径約2.3m、短径約1.3mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第49図)

土器 20は、無文の口縁部資料で、口縁部に意図的に輪積痕を残す。



第50图 第130~140·142·147~149·153·156号土坑

●第136号土坑（第50図）

G3グリッドに位置する。北側は調査区外であるが、残存部で長径約1.1m、短径約1.0mを測る。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第137号土坑（第50図）

G3グリッドに位置し、第138号土坑を切る。西側は調査区外であるが、残存部で長径約3.1m、短径約1.1mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第49図）

土器 21は厚手の胴部資料で、破片左側に左下がりの条線文が残される。

●第138号土坑（第50図）

G3・G4グリッドに位置し、第95号土坑に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約1.7m、短径約0.7mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第139号土坑（第50図）

G4・G5グリッドに位置する。平面形は長径1.6m、短径約0.8mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第140号土坑（第50図）

G5グリッドに位置する。平面形は長径1.0m、短径約0.8mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第141号土坑（第48図）

E3グリッドに位置し、第157号土坑を切り、第125号土坑に切られる。南側は切られるが、残存部で長径約1.4m、短径約0.8mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第49図）

土器 22は口唇部がわずかに外反する小型の広口の壺形土器と思われ、平滑に整形された口縁部に2条の沈線が巡る。23・24は無文の胴部資料である。

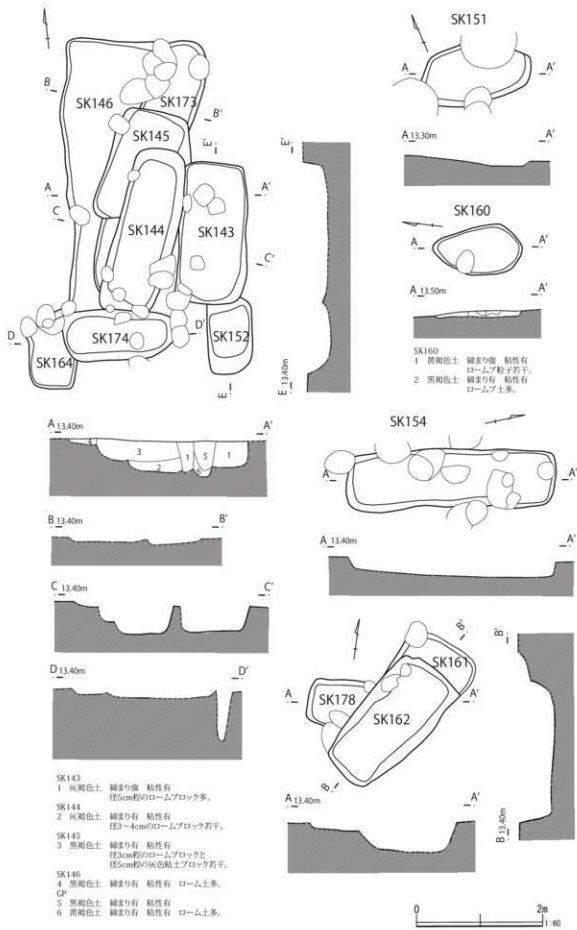
●第142号土坑（第50図）

E4グリッドに位置する。平面形は長径3.0m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第143号土坑（第51図）

E4グリッドに位置し、第145・152号土坑を切り、第144号土坑に切られる。平面形は長径2.2m、短径約1.0mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第49図）



第51図 第143~146・151・152・154・160~162・164・173・174・178号土坑

土器 25は直立する口縁部資料で口縁部を巡る1条の沈線のほか、斜行する沈線が見られるがモチーフ等は読み取れない。26は内湾する平縁深鉢で、肥厚する口縁部には沈線が巡る。口唇内縁には刻みを持つ。27は無文の胴部資料である。

●第144号土坑（第51図）

E4グリッドに位置し、第143・145・146・173号土坑を切り、第132号土坑に切られる。平面形は長径2.6m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

●第145号土坑（第51図）

E4グリッドに位置し、第146・173号土坑を切り、第143・144号土坑に切られる。平面形は長径1.9m、短径約1.1mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第146号土坑（第51図）

E4グリッドに位置し、第144・145・173・174号土坑に切られる。東・南側は切られるが、残存部で長径約4.3m、短径約1.2mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第49図）

土器 28はほぼ直立する口縁部資料で、口縁外周とやや間隔を置く位置に沈線が引かれる。29はやや深さのある内耳土鍋の口縁部資料である。

●第147号土坑（第50図）

D5・E5グリッドに位置する。平面形は長径1.8m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第148号土坑（第50図）

F3グリッドに位置する。平面形は長径1.4m、短径約1.1mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第149号土坑（第50図）

F3グリッドに位置する。第153号土坑に切られる。平面形は長径2.5m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第150号土坑（第46図）

F3グリッドに位置し、第95号土坑を切り、第96号土坑に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約1.1m、短径約0.3mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第151号土坑（第51図）

F3・F4グリッドに位置する。平面形は長径1.7m、短径約0.9mの不整形円形を呈す。確認面からの深さ

は約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第49図)

土器 30は口縁部が直立する広口壺で、口縁部には、右下がりに斜行する沈線を挟むように三叉文が陰刻される。31は単節LR縄文の施される胴部資料、32は台付鉢の脚部破片である。

●第152号土坑 (第51図)

E4・E5グリッドに位置し、第143号土坑に切られる。平面形は長径1.2m、短径約0.7mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第49図)

土器 33は口径9cm、底径4.2cmほどの小振りのカワラケである。口縁部内外に油煙が付着していることから灯明皿として使用されたものと思われる。

●第153号土坑 (第50図)

F3グリッドに位置する。第149号土坑を切る。平面形は直径約0.7mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第49図)

土器 34・35は、無文の胴部資料である。

●第154号土坑 (第51図)

F4・F5グリッドに位置する。平面形は長径3.3m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は中央がやや浅く窪む。

出土遺物 (第49図)

土器 36は、外反傾向を示す平縁土器で、両側へ下がる矢羽状の平行沈線が施される。37～39は無文の胴部資料である。

●第155号土坑 (第47図)

F4グリッドに位置し、第180号土坑を切り、第73号土坑に切られる。大部分を切られているため、平面形は定かではないが、不整形円形を呈すものと思われる。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第156号土坑 (第50図)

E3グリッドに位置し、第130・131号土坑を切り、第133号土坑に切られる。平面形は長径1.7m、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第157号土坑 (第48図)

E3グリッドに位置し、第193号土坑を切り、第141号土坑に切られる。平面形は長径約2.8m、短径約0.9mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第158号土坑（第48図）

E3グリッドに位置し、第125号土坑に切られる。南側は切られるが、残存部で長径約1.5m、短径約1.1mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第159号土坑（第39図）

B2グリッドに位置し、第45号土坑に切られる。グリッドピットに切られているため、平面形は定かではないが、不整形を呈すものと思われる。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第160号土坑（第51図）

E4グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約0.7mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第161号土坑（第51図）

E4グリッドに位置し、第162号土坑に切られる。南側は切られるが、残存部で長径約1.2m、短径約0.5mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第162号土坑（第51図）

E4・F4グリッドに位置し、第161・178・179号土坑を切る。平面形は長径約2.2m、短径約1.1mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第49図）

土器 40は玉縁となる口縁部に多截竹管を用いた連続刺突を施す粗製土器である。41は無文の胴部資料である。

●第163号土坑（第52図）

G3・G4グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.9mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第164号土坑（第51図）

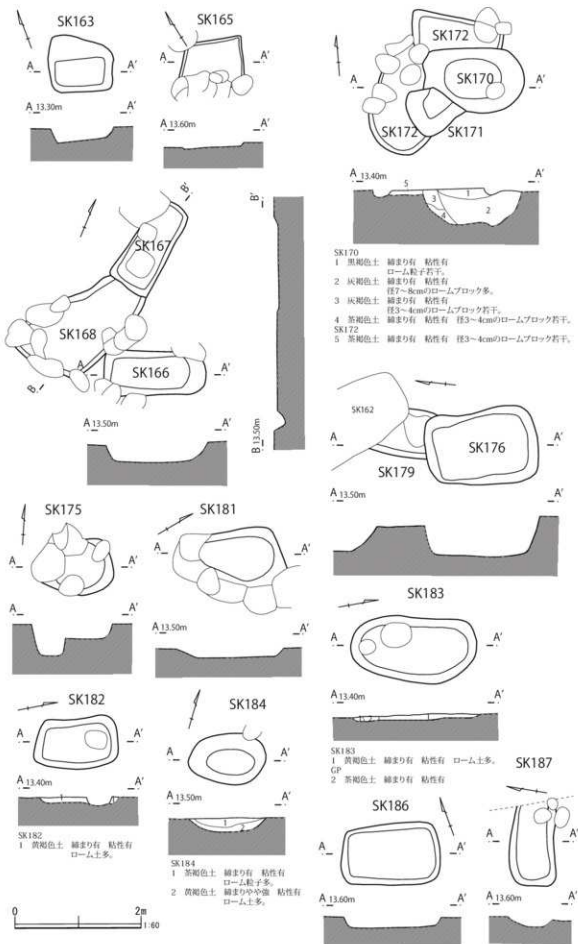
D4・D5グリッドに位置し、第174号土坑に切られる。東側は切られるが、残存部で長径約1.2m、短径約0.7mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第49図）

土器 42は角皿の底部資料である。体部は無文であるが、底面には4重の沈線が施される。

●第165号土坑（第52図）

C5・D5グリッドに位置する。南側はグリッドピットに切られるが、残存部で長径約1.0m、短径約0.7mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。



第52図 第163・165~168・170~172・175・176・179・181~184・186・187号土坑

●第166号土坑（第52図）

D4グリッドに位置する。平面形は長径約1.7m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第49図）

土器 43は直立する無文の口縁部資料である。44は胴部資料で、太く明瞭な沈線によって区画される横位と斜位の縄文帯が観察されるほか、破片右側には弧線も見受けられる。45・46は無文の胴部資料である。47は在地系の拙鉢の底部資料である。

●第167号土坑（第52図）

D4グリッドに位置し、第126号土坑を切る。平面形は長径約1.5m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第168号土坑（第52図）

D4グリッドに位置し、第125号土坑に切られる。平面形は長径約1.9m、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第169号土坑（第42図）

D4・D5グリッドに位置し、第79号土坑に切られる。平面形は長径約0.9m、短径約0.7mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第170号土坑（第52図）

E5グリッドに位置し、第171・172号土坑を切る。平面形は長径約1.6m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第49図）

土器 48は拙鉢の胴部破片である。掘り目がかなり細いことから口縁部に近い部位と思われる。

●第171号土坑（第52図）

E5グリッドに位置し、第172号土坑を切り、第170号土坑に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約0.8m、短径約0.7mを測る。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

●第172号土坑（第52図）

E5グリッドに位置し、第172号土坑を切り、第170号土坑に切られる。東側は切られるが、残存部で長径約2.3m、短径約1.2mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第173号土坑（第51図）

E4グリッドに位置し、第146号土坑を切り、第145・144号土坑に切られる。平面形は長径約4.3m、短径約0.9mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第174号土坑（第51図）

E4グリッドに位置し、第144・146・164号土坑を切る。平面形は長径約1.7m、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第175号土坑（第52図）

F5グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第176号土坑（第52図）

E4グリッドに位置し、第179号土坑を切る。平面形は長径約1.8m、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第49図）

土器 49は播鉢の口縁部破片、50は縄文土器の無文の胴部である。

●第177号土坑（第48図）

E4グリッドに位置し、第235号土坑を切る。平面形は長径約1.6m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第178号土坑（第51図）

E4グリッドに位置し、第120号土坑に切られる。東側は切られるが、残存部で長径約1.1m、短径約0.7mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第179号土坑（第52図）

E4グリッドに位置し、第162・176号土坑に切られる。両端を切られるが、残存部で長径約0.9m、短径約0.6mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第180号土坑（第47図）

F4グリッドに位置し、第112・115・155号土坑に切られる。大部分を切られているため、平面形は定かではないが、不整形円形を呈すものと思われる。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第181号土坑（第52図）

E5グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第182号土坑（第52図）

C4グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第183号土坑（第52図）

B6グリッドに位置する。平面形は長径約2.0m、短径約1.0mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第184号土坑（第52図）

C5グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第185号土坑（第53図）

B7グリッドに位置し、第190号土坑と第32号溝跡を切る。平面形は長径約1.9m、短径約1.1mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第49図）

土器 51は内湾傾向を示す粗製土器で、肥厚する口縁部に刺突列を配する他、胴部上半の文様帯には2条の弧線が観察される。52は在地産陶器の擂鉢の胴部破片である。53は土製円盤である。摩滅しており、素材となる土器片の文様は読み取れない。

●第186号土坑（第52図）

C6グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.0mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54図）

土器 1は無文の胴部資料である。

●第187号土坑（第52図）

B6グリッドに位置する。東側は切られるが、残存部で長径約1.3m、短径約0.7mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第188号土坑（第53図）

B6グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54図）

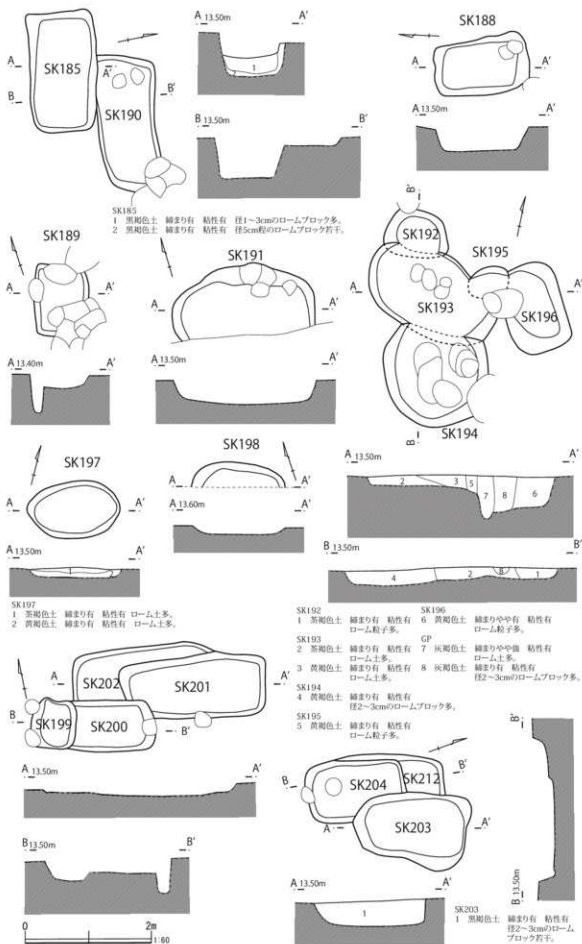
土器 2は口唇部に同心円状のモチーフを持つ波状縁深鉢である。3は擂鉢の胴部資料である。

●第189号土坑（第53図）

B6グリッドに位置する。南側はグリッドビットで切られるが、残存部で長径約1.1m、短径約0.9mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54図）

土器 4は2条1組の弧線が施された胴部資料である。5は胴部資料で、破片左隅に弧線が引かれることが



第53図 第185・188~204・212号土坑

わかる。

●第190号土坑（第53図）

B7グリッドに位置し、第185号土坑に切られる。平面形は長径約2.1m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第191号土坑（第53図）

B8・C8グリッドに位置する。南側は調査区外であるが、残存部で長径約2.3m、短径約1.1mを測る。確認面からの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54図）

土器 6は横走する集合沈線の観察される平縁土器である。補修孔が穿たれる。7は外反する口縁部資料で、横走する2条の沈線と右下りに斜行する沈線とが観察される。8は縦位の集合沈線の施される胴部資料である。9～11は、在地産陶器の播鉢である。9・11は底部、10は胴部である。

石器 12は曲玉の尾部である。頭部は拱面で欠損する。全体に丁寧に研磨されている。

●第192号土坑（第53図）

B5グリッドに位置し、第193号土坑を切る。平面形は長径約1.0m、短径約0.6mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第193号土坑（第53図）

B5グリッドに位置し、第194号土坑を切り、第192・195号土坑に切られる。平面形は長径約2.2m、短径約1.3mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54図）

石器 13は二次加工剥片である。横長の不整形剥片を素材とする。正面にポジティブな主剥離を残し、左側縁からの階段状剥離によって打縮を剥ぎ取っている。剥片の縁辺となる右側縁に押圧剥離による二次加工が施される。

●第194号土坑（第53図）

B5グリッドに位置し、第193号土坑に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約1.9m、短径約1.6mを測る。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第195号土坑（第53図）

B5グリッドに位置し、第193・196号土坑を切る。平面形は長径約0.7m、短径約0.4mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

●第196号土坑（第53図）

B5グリッドに位置し、第195号土坑に切られる。平面形は長径約1.4m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。

確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第197号土坑（第53図）

C6グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第198号土坑（第53図）

C7・C8グリッドに位置する。南側は削平されるが、残存部で長径約1.4m、短径約0.4mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第199号土坑（第53図）

C6・D6グリッドに位置し、第200号土坑を切る。平面形は長径約0.8m、短径約0.7mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第200号土坑（第53図）

D6グリッドに位置し、第201・202号土坑を切り、第199号土坑に切られる。西側は切られるが、残存部で長径約1.3m、短径約0.8mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第201号土坑（第53図）

D6グリッドに位置し、第202号土坑を切り、第200号土坑に切られる。平面形は長径約2.3m、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第54図）

土器 14は、折り返し口縁の無文の口縁部資料、15は、下向きの弧線の描出される口縁部資料である。

●第202号土坑（第53図）

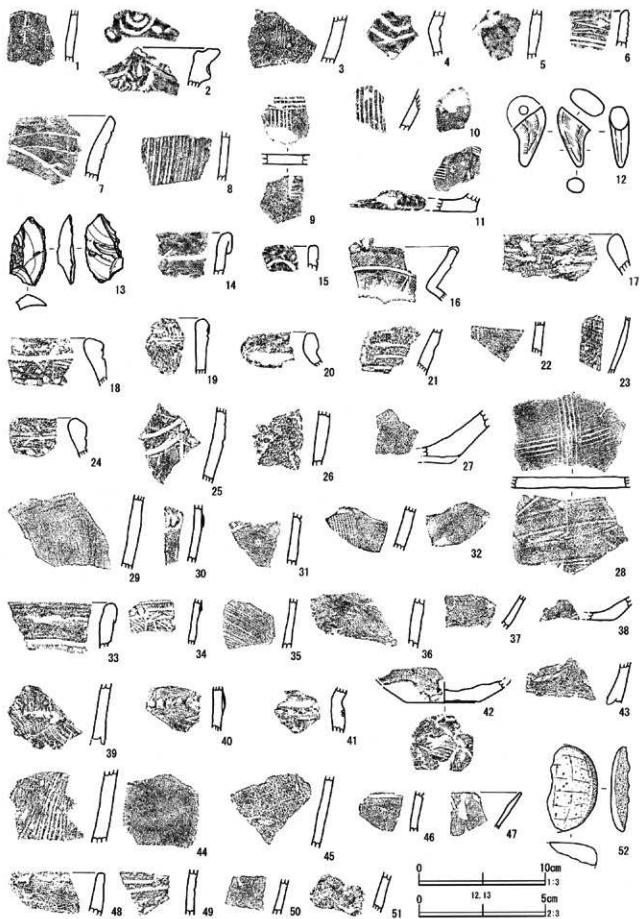
D6グリッドに位置し、第200・201号土坑に切られる。東・南側は切られるが、残存部で長径約2.3m、短径約0.8mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第203号土坑（第53図）

C6・C7グリッドに位置し、第204・212号土坑を切る。平面形は長径約1.8m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54図）

土器 16は「く」の字に屈曲する壺形土器の頸部から口縁部にかけての資料である。1条の沈線で画された口縁部には単節LR縄文が施される。また、口唇部には貼瘤が付される。17～20は粗製土器の口縁部資料である。17は内湾するもの、18・19は口縁部に刺突を施すものである。21は3条の横走沈線が窺われるもの、22・23は無文の胴部資料である。



第54圖 土坑出土遺物(6)

●第204号土坑（第53図）

C6・C7グリッドに位置し、第212号土坑を切り、第203号土坑に切られる。平面形は長径約1.5m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54・68図）

土器 24は、内湾傾向を示す平縁土器で、口縁部に縄文帯を持つ。25は、垂下沈線とここから派生する弧線文が観察される胴部資料、26は、無文の胴部資料、27は、無文の底部資料である。28は、在地産陶器の播鉢の底面破片である。

銭貨 第68図1・2は銭貨である。前者は開元通宝、後者は永樂通宝である。

●第205号土坑（第55図）

C7グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54図）

土器 29・31は縄文土器の胴部破片で、30は横走隆帯上を刻むような連続刺突が施されるものである。32は播鉢の胴部破片である。

●第206号土坑（第55図）

D7グリッドに位置する。平面形は長径約2.0m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第54図）

土器 33は口縁部にやや幅の広い無文帯を置く平縁深鉢である。口縁部無文帯下端は単沈線で区画される。34は縦横の区画帯の交点に双刺瘤を貼る胴部資料、35は、右下がりに斜行する条線文の施される資料、36・37は無文の胴部資料である。38は無文の底部資料である。

●第207号土坑（第55図）

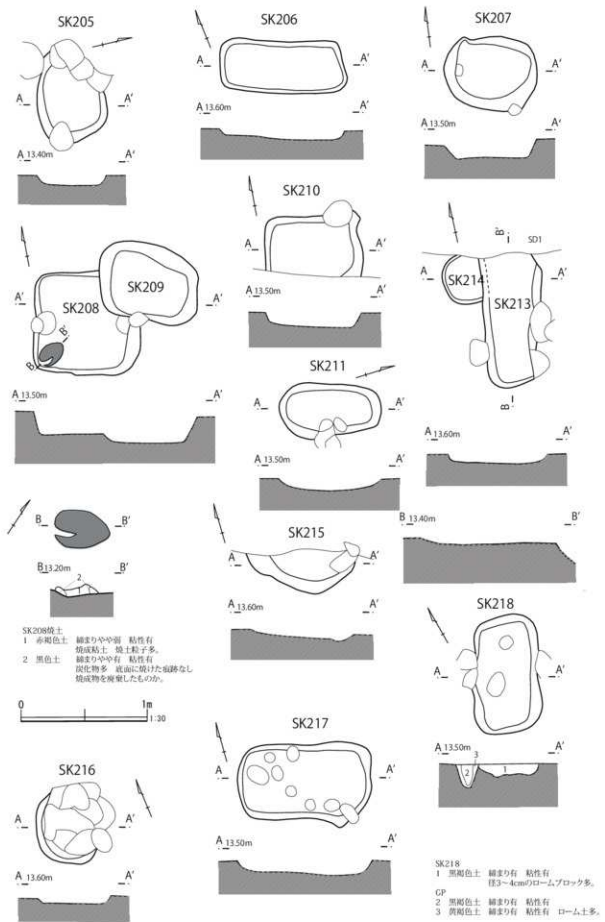
D7・D8グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54図）

土器 39～41は胴部資料で、39は縦位、斜位の整形痕の残る資料、40は連続刺突を施す低平な隆帯を持つ資料、41は括れの下に刺突列が観察される資料である。

●第208号土坑（第55図）

D6グリッドに位置し、第209号土坑に切られる。平面形は長径約1.8m、短径約1.7mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。南西隅に直径約0.9m、短径約0.6mの焼土の広がり確認された。炭化物を多く含んでいるものの、底面に焼けた痕跡は認められず、土坑内に焼成物を廃棄したものである可能性も考えられる。



第55図 第205~211・213~218号土坑

●第209号土坑（第55図）

D6・E6グリッドに位置し、第208号土坑を切る。平面形は長径約1.6m、短径約1.2mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54図）

土器 42は底径6cmほどを測るカワラケの底部資料である。底面には回転糸切り痕が残される。43は縄文土器の底部付近の破片資料である。44は無文の胴部資料で、内面に明瞭な整形痕を残す。

●第210号土坑（第55図）

E8グリッドに位置する。南側は調査区外であるが、残存部で長径約1.6m、短径約0.9mを測る。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第54図）

土器 45・46は縄文土器の胴部資料で、後者は破片上部に横走沈線を残す。47はカワラケの口縁部資料である。

●第211号土坑（第55図）

E7グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第54図）

土器 48は無文の口縁部資料である。49は2条の沈線が引かれる胴部資料、50・51は無文の胴部資料である。

石器 52は石鱗状の磨石の残欠である。正面はよく磨られており、側縁は敲打整形の痕跡を留める。

●第212号土坑（第53図）

C6・C7グリッドに位置し、第203・204号土坑に切られる。東・南側は切られるが、残存部で長径約1.7m、短径約0.6mを測る。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第213号土坑（第55図）

E8グリッドに位置し、第214号土坑を切り、第1号溝跡に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約2.1m、短径約0.9mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第214号土坑（第55図）

E8グリッドに位置し、第213号土坑と第1号溝跡に切られる。東側は切られるが、残存部で長径約0.8m、短径約0.6mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第57図）

土器 1は、直立する平縁土器で、横位の整形痕が残される。

●第215号土坑（第55図）

E8グリッドに位置し、第1号溝跡に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約1.8m、短径約0.7mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第216号土坑（第55図）

C7・D7グリッドに位置する。東側はグリッドピットに切られるが、残存部で長径約1.2m、短径約0.9mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第57図）

土器 2は、乱雑な整形痕の残される胴部資料である。

●第217号土坑（第55図）

E6・F6グリッドに位置する。平面形は長径約2.1m、短径約1.1mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第218号土坑（第55図）

E6・F7グリッドに位置する。平面形は長径約1.8m、短径約1.0mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第219号土坑（第56図）

E6グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約0.8mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第57図）

土器 3は単節縄文の地文上に縦横の沈線が引かれる口縁部資料である。4は外反する平縁土器で、口唇部に刻みを持つ他、内面にはこの刻みを付した部分を囲むような弧線が描かれる。5は2条の横走沈線が引かれる胴部資料である。

●第220号土坑（第56図）

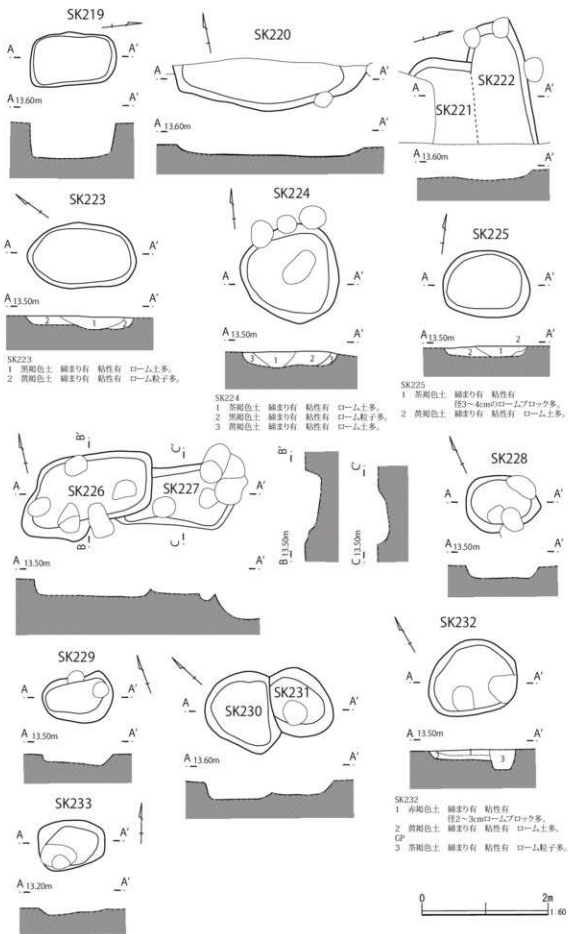
C7グリッドに位置し、第44号溝跡に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約3.0m、短径約0.8mを測る。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第221号土坑（第56図）

F6・F7・G6・G7グリッドに位置し、第222号土坑と接するが切り合い関係は不明である。西側は調査区外であるが、残存部で長径約1.3m、短径約1.1mを測る。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第222号土坑（第56図）

F6グリッドに位置し、第221号土坑と接するが切り合い関係は不明である。西側は調査区外であるが、



第56図 第219~233号土坑

残存部で長径約1.9m、短径約0.9mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第223号土坑（第56図）

E7グリッドに位置する。平面形は長径約1.7m、短径約1.0mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第57図）

土器 6は内湾する口縁部に隆帯を貼り、刻みを加えた平縁土器である。

●第224号土坑（第56図）

E7グリッドに位置する。平面形は直径約1.5mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第225号土坑（第56図）

E6グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.0mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第226号土坑（第56図）

E6・F6グリッドに位置し、第227号土坑を切る。平面形は長径約2.0m、短径約1.0mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第227号土坑（第56図）

F6グリッドに位置し、第226号土坑に切られる。平面形は長径約1.8m、短径約1.0mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第228号土坑（第56図）

F6グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第229号土坑（第56図）

F6グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.7mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第57図）

土器 7は口縁部に刺突文列を持つ平縁深鉢である。

●第230号土坑（第56図）

F6グリッドに位置し、第231号土坑を切る。平面形は長径約1.4m、短径約1.0mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第231号土坑（第56図）

F6グリッドに位置し、第230号土坑に切られる。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第232号土坑（第56図）

F7グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.2mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第233号土坑（第56図）

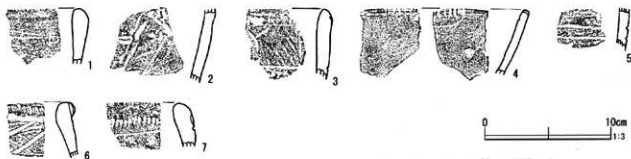
C2グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.7mの不整形形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第234号土坑（第44図）

C4グリッドに位置し、第76号土坑に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約1.2m、短径約0.3mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第235号土坑（第48図）

E4グリッドに位置し、第157・177号土坑に切られる。大部分を切られているため、平面形は定かではないが、不整形形を呈すものと思われる。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。



第57図 土坑出土遺物（7）

第5表 土坑出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
43	9	SK63	磨石	安山岩	(4.5)	6.3	4.4	(184.7)	
43	37	SK73	二次加工剥片	チャート	3.4	1.3	0.5	2.3	
45	11	SK86	砥石	瓦	3.9	3.0	1.8	26.0	真転用
45	18	SK89	砥石	瓦	5.2	1.1	0.9	4.0	真転用
45	29	SK92	磨製石斧	ホルンフェルス	(4.5)	(2.6)	2.1	(36.8)	
45	38	SK94	砥石	配岩	9.6	2.7	1.4	69.7	
49	5	SK114	磨石	砂岩	(4.9)	(3.8)	(2.9)	(59.0)	
54	12	SK191	曲玉	ヒスイ	2.4	1.3	0.8	2.6	
54	13	SK193	二次加工剥片	チャート	2.8	1.4	0.6	1.9	
54	52	SK203	磨石	閃緑岩	(6.7)	(3.8)	(1.3)	(46.6)	

(5) 溝跡

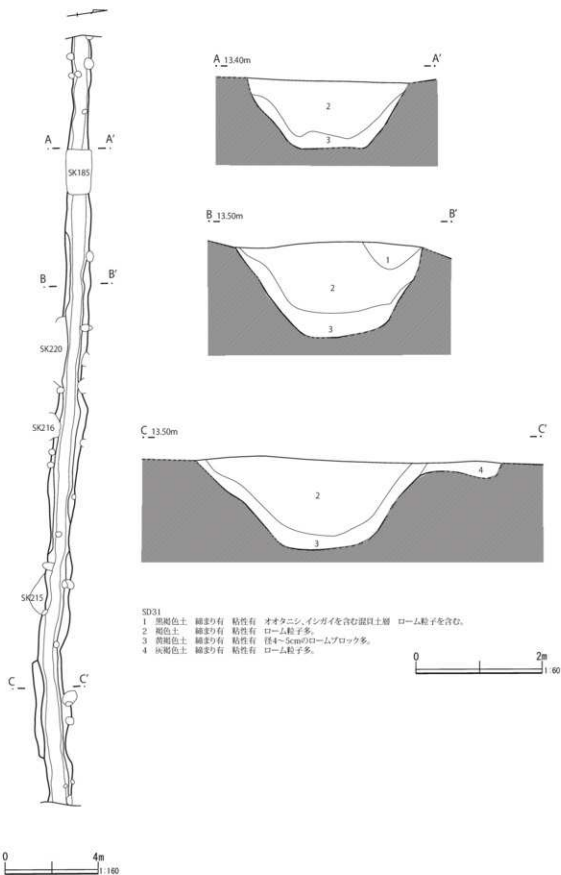
●第32号溝跡 (第58図)

A7・B7・C7・D7・E7・F7・E8・F8グリッドに位置し、第213・214・215・220号土坑を切り、第185・216号土坑に切られる。調査区内を東西へ約32.3m延伸する。調査区東寄りでは幅広になり、最大幅は約1.2mを測るとともに、確認面からの最大深は約0.5mを測る。

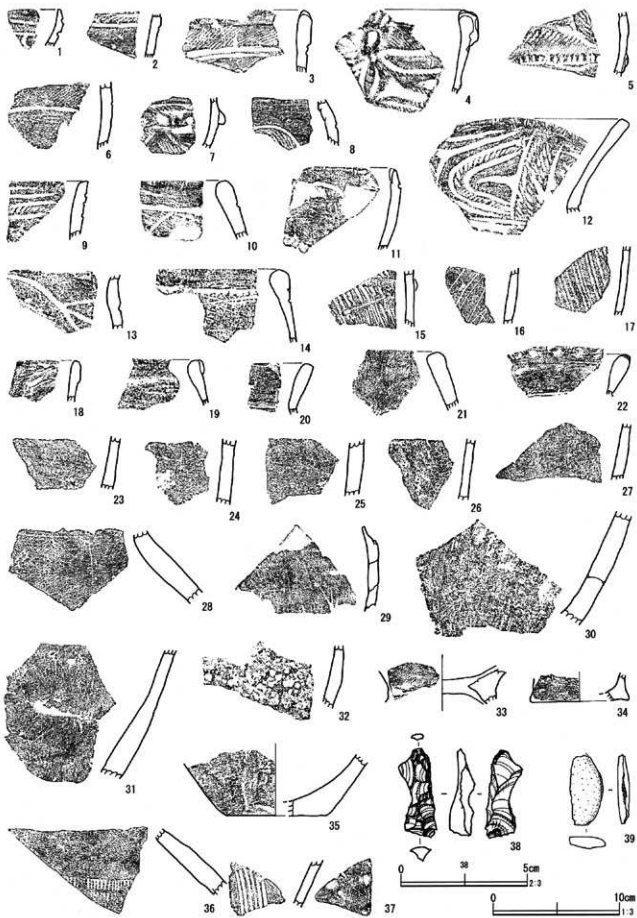
出土遺物 (第59図)

土器 1は小型の平縁の碗形土器の口縁部である。丁寧に整形され口縁部に縄文帯を巡らせた下に「の」字などの点状文が付されるものであろう。2は横走する縄文帯が施された胴部資料である。3は口縁部に単節縄文の施された縄文帯が観察される平縁資料である。口唇部に丈の低い山形の突起が付される。4は突起の付される平縁土器で、口縁部文様帯には横位の長楕円区画や縦位の楕円区画が描かれ、間隙には三叉文が陰刻される。5は刺突を加えた隆帯で文様帯下端を画する胴部資料である。区画内にはレリーフ風の縦位、斜位の縄文帯が形成される。6は沈線で区画された横走する縄文帯の見られる胴部資料、7は2個1対の丈のある貼瘤が付される浅鉢形土器の胴部資料である。貼瘤以下の胴部には弧線文が連なるものと思われる。8は壺形土器の肩部破片と思われ、内面には輪積痕が残される。9は横走沈線帯のも受けられる平縁土器で、下位2条の沈線間には、縄文が施される。10は内湾傾向を示す平縁土器で、口縁を巡る沈線と斜行する弧線が窺われる。11は内湾傾向を示す平縁深鉢と思われ、口縁部以下開きの弧線が連なる。12は外反する緩波状縁の深鉢形土器と思われ。波頂部から緊密に充填された刺突文帯が垂下する。その両側に刺突を伴う弧線区画が向き合うものと思われ、間隙には三叉文が充填される。13は右下がりの弧線文などが看取される胴部資料、14は口縁部に刺突列の巡る砲弾形の平縁深鉢、15は刺突を伴う横走隆帯以下に斜行する条線文が施されるもの、16・17は斜行する条線文の施された胴部資料である。18・22は無文の口縁部資料である。19は口縁部外面に隆帯を貼って肥厚させる資料、22は口唇部に刺突が施される資料である。23～32は無文の胴部資料である。29は輪積痕をよく残すやや内湾するもの、30・31は底部に近い肉厚な資料、32は火はねと思われる剥落の目立つ資料である。33は台付鉢の鉢部と脚部との連結部分である。34はやや底面が張り出す平底資料で、推定底径は、8cmほどと思われる。35は大型の深鉢の底部と思われる平底の資料である。推定底径は8cmほどである。36は叩き目の残る常滑焼の大甕の肩部資料、37は推鉢の胴部資料である。

石器 38は黒曜石製の二次加工剥片である。正面右側縁に丁寧に連続剥離が加えられている。39は磨石の残欠である。側縁に敲打の痕跡を止める。



第58図 第1号溝跡



第59圖 滿跡出土遺物 (5)

(6) 井戸跡

●第2号井戸跡 (第60図)

F3グリッドに位置し、第149・151号土坑を切る。平面形は直径約0.9mの円形を呈す。開口部が狭く直線的に落ち込む。近世以降の所産と考えられる。

出土遺物 (第61図)

土器 1・2は焙烙の口縁部資料、3は正格子の叩き目の残される常滑焼の甕の胴部破片である。4は大振りの注口土器の注口部である。5は無文の胴部資料である。外面に横位の篋削りの痕跡を明瞭に残すもので、五領式土器と思われる。

●第3号井戸跡 (第60図)

F4グリッドに位置する。平面形は直径約0.9mの円形を呈す。開口部がやや広がり、下部は直線的に落ち込む。中世の所産である可能性も考えられる。

出土遺物 (第61図)

土器 6・7・10は内湾傾向を示す粗製土器の口縁部資料である。6は無文で横位の整形痕が残されるもの、7は口縁部外面に刺突文帯を形成する砲弾形の深鉢、10は肥厚する口縁部に連続刺突の施される資料である。8は内湾傾向を示す胴部破片で、胴部を巡る沈線が看取される。9は横位及び斜位の浅い沈線が見られる胴部資料である。11は上下に横走沈線が引かれ、下位の沈線に接して弧線文が配される胴部資料である。12は精製土器の口縁部に付された環状の装飾突起で、さらに上部へ延びる舌状の突起が付されたものと思われる。

土製品 12は土製円盤である。無文の胴部破片を素材とし、円形に打ち欠いた上で敲打整形を加えている。

石器 14は磨石である。扁平な楕円礫を素材とし、平面ではなく側面を使用している。15は砥石である。扁平に剥離した緑泥片岩を素材とし、正面側を研磨面としている。16は磨石である。大振りの扁平な円礫を素材とし、側縁を敲打調整し整形している。17は磨製石斧と思われる。全体を粗く剥離整形したのち敲打調整を加え、さらに研磨を加えている。断面形状は楔形で、主軸から右側が厚く残される。未製品と捉えておきたい。

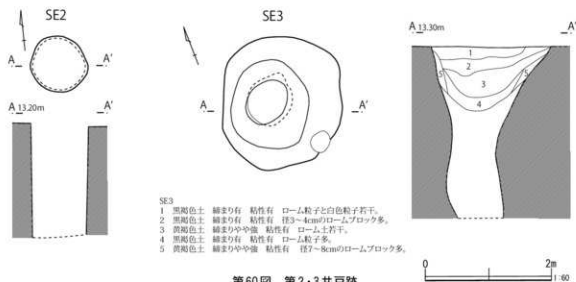
(7) 地下式坑

●第1号地下式坑 (第62図)

F3・G3グリッドに位置する。平面形は長径1.4m、短径1.1mの不整形を呈す。確認面からの深さは約1.4mを測り、底面は平坦である。壁面がオーバーハングするが、遺構の北寄りで顕著になり、横断面形はフラスコ形を呈す。

第6表 溝跡・井戸跡出土石器計測表

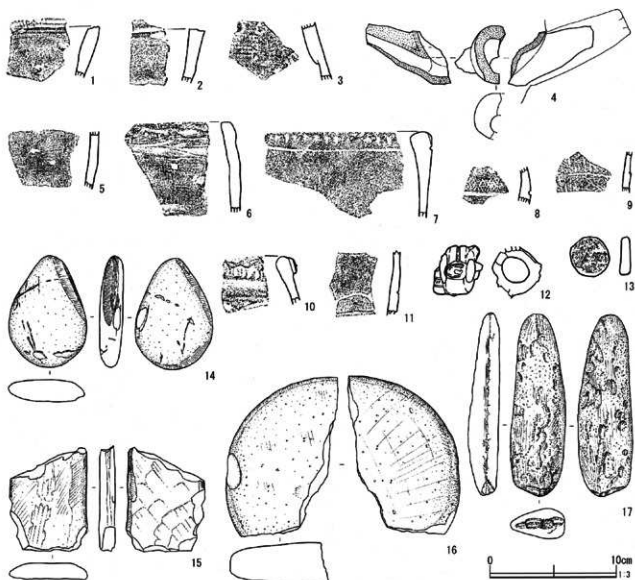
図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
59	38	SD58	二次加工剥片	黒曜石	3.5	1.3	1.0	2.1	
59	39	SD58	磨石	硬砂岩	(2.5)	(5.5)	(1.0)	(16.1)	
61	14	SE3	磨石	硬砂岩	8.8	6.0	1.8	134.2	
61	15	SE3	砥石	緑泥片岩	(7.8)	6.1	1.3	(116.3)	
61	16	SE3	石皿	閃緑岩	(13.9)	(7.4)	3.1	(512.0)	
61	17	SE3	敲石	ホルンフェルス	14.4	4.2	2.5	202.0	



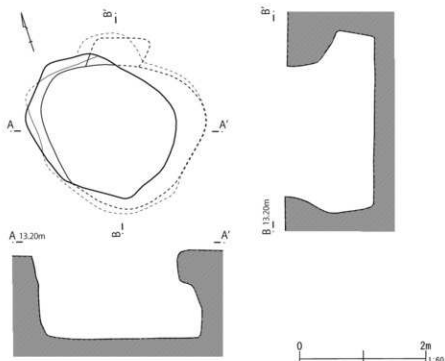
SE3

- 1 黒褐色土 締まり有 粘性有 ローム粒子と白色粒子若干。
- 2 黒褐色土 締まり有 粘性有 径3~4cmのロームブロック多。
- 3 洪褐色土 締まりやや中強 粘性有 ローム土若干。
- 4 黒褐色土 締まり有 粘性有 ローム粒子多。
- 5 洪褐色土 締まりやや中強 粘性有 径7~8cmのロームブロック多。

第60図 第2・3井戸跡



第61図 井戸跡出土遺物



第62図 第1号地下式坑

(8) グリッド出土遺物

● Aライン出土遺物 (第63・67図)

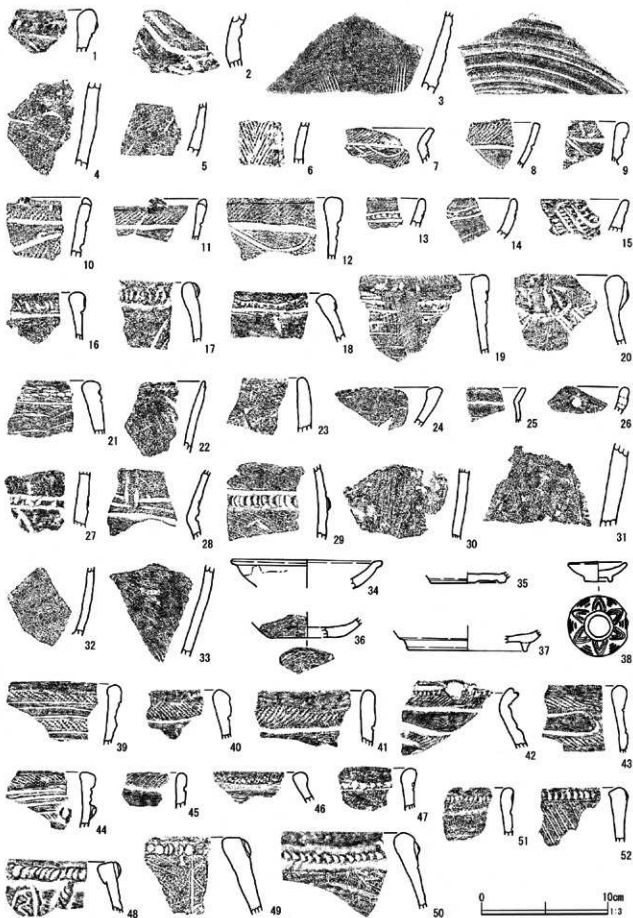
土器 第63図1は玉縁状に肥厚する口縁部に刺突列を施す平縁資料、2は上向きに開く弧線が重畳する胴部資料、3は擂鉢の胴部破片、4・5は無文の胴部破片である。

土製品 第67図1は沈線による指の表現のある土偶の爪先部の資料である。幅7cm、残存長5cmほどを測る。極めて大型の土偶の存在が推測される。

石器 第67図17は磨石である。扁平で不整形な自然礫を素材とし、表裏を使用面としている。

● Bライン出土遺物 (第63・67・68図)

土器 第63図6は縦位の矢羽状の集合沈線の観察される胴部資料で、諸磯c式に該当する。B3グリッドから出土した。7は小型の平縁土器で縄文の施される口縁部が「く」の字に屈折するものである。括れ部の下には縄文の施された弧線区画が窺われる。8は薄手の口縁部資料で、口縁部には縄文帯を認める。9～12は縄文の施された口縁部を持ち、胴部上半の文様帯には斜行したり、弧状になったりする縄文帯を見ることができるものである。13・14は沈線で画された刺突文帯で文様帯を区画したり、モチーフを描くと思われるもの、15は斜行したり弧状に走行する沈線間に刺突を充填するものである。16～19・21は内湾傾向を示す砲弾形深鉢の口縁部資料である。安行式に伴う粗製の一群である。20は口縁部に縦位の刺し切るような刺突を持つ貼瘤の付された平縁土器である。22～26は無文の口縁部資料である。22は薄く仕上げられ外反するもの、24は口唇部内側が肥厚し、ごく緩い波状を呈すると思われるもの、26は焼成前穿孔の小孔を認めるものである。27・28は沈線による文様帯の分割、文帯を行う胴部資料で、前者は分帯する平行沈線間にまばらな刺突が加えられるもの、後者は、2条の縦位分割線に連動する2条の分帯線の下にもう1条の深く広い分帯線が引かれたものである。29は多載竹管による密度の高い刺突が加えられる隆帯で文様帯の下端を閉じる胴部資料である。30～33は無文の胴部資料である。34は瀬戸美濃系の小皿で推定口径は12cmを測る。口唇部がわずかに外側に引き出される。35・37は陶器の底部資料で、前者は



第63図 グリッド出土物(1)

底径6cm、後者は、推定底径9.5cmほどの資料である。

石器 第67図10は二次加工剥片である。横長の不整形剥片を素材とし、裏面右側にネガティブバルブを観察することができる。下部を絞る傾向が見られることから、ドリルの未製品と思われる。12は磨石である。扁平な楕円礫を素材とし、正面左側縁に敲打痕と研磨痕が残される。19は磨石残欠である。側縁に敲打を加え丁寧に面取り整形している。石鱗状を呈したものと推測される。

銭貨 第68図5はB7グリッド出土の資料である。磨耗が著しく判読できない。6はB3グリッドのP11出土の資料である。錆が進行しているが元祐通宝と思われる。

ガラス製品 第63図38はガラス製品の紅皿である。口径4.6cm、底径2.2cmを測る。底面から見ると6弁の花柄のように見えるレリーフが施される。

●Cライン出土遺物 (第63・64・67・68図)

土器 第63図39～44はいずれも平縁で口縁部に縄文帯を持つものである。42では口唇部に1条の沈線が引かれ、口唇部外面には刻みが付される。44では双刺瘤が付される。45は口縁部に細密沈線文帯が形成される資料である。46は内湾傾向の強いもので、玉縁状に肥厚する口縁部にごく狭い縄文帯を持つ。47～50は内湾傾向を示す砲弾形深鉢の口縁部資料である。安行式に伴う粗製の一群である。48では丈の高い刺突隆帯から胴部上半の文様帯にも同様の隆帯が延びる。49では2条の沈線による縦位分割が行われる。

第64図1は算盤玉状に屈曲する胴部を持つもので、屈曲部に接するように円形刺突が付される。2は単節LR縄文の充填される縄文帯の見られる胴部資料である。3は文様帯下端区画となる隆帯上に三日月状の連続刺突を加えたもの、4は単節RL縄文の施される底部付近の資料、5は無文の胴部下半の資料である。6・7は縄文土器の底部資料で、前者は推定底径7.2cmほど、後者は5cmほどでやや丸みを帯びるものである。8は推定口径12cmほどの皿状の陶器、9は推定口径11.2cm、底径6cmほどを測る縁軸小皿である。

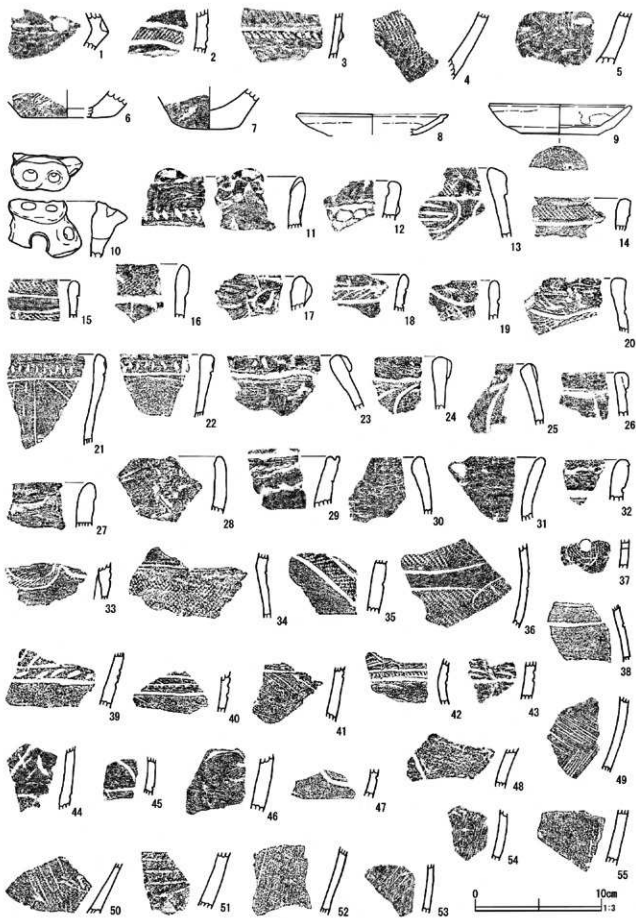
土製品 第67図2は、細長くやや扁平な棒状の土製品である。丁寧に整形され、「T」字状のモチーフが組み合うような陽刻が認められる。

石器 第67図7は凹基無形の石鎌である。裏面中央に素材剥片の主剝離をわずかに残す。基部及び両側縁は、両面からの加撃によって丁寧に調整加工を施す。8・9は二次加工剥片である。両者とも不整形の縦長の剥片を素材とするもので、前者は、右側縁上部に二次加工が施される。後者は、正面右側縁下部に細かな押圧剝離が見られる。13は両端に敲打痕のある敲石である。断面形状が三角形となる細長い円礫を素材としている。

銭貨 第68図8は「明治十七年一銭」の文字が読み取れる。

●Dライン出土遺物 (第64・65・67・68図)

土器 第64図10は、口縁部の外反する深鉢に付された装飾突起と思われる。上を向く2つの円形刺突は、周辺部を「∞」記号風にナデている。2は口唇部上から内面にかけて隆帯を貼る平縁資料で、口縁外面には刺突列が見られる。12は口縁外面に鎖状隆帯の施された平縁資料で、口縁部内面にも沈線が引かれる。13～16はやや肥厚させた口縁部に単節縄文を施した縄文帯を持つ土器で、13では以下に入組となると思われる弧線文が見られる。17では左下がりとなる斜位の隆帯が付される。18～20は細密沈線文系の一群で、18は口縁部やや下がったところに幅狭の細密沈線文帯が形成される。19・20では上開きの弧線区画が形成



第64図 グリッド出土遺物(2)

され、前者では、その上部に、後者では、下部に細密沈線が充填される。21・22は直立に近い口縁部を持つ平緑深鉢で、口縁部に刺突文帯を持つ。前者では、垂下する刺突文帯や斜行する刺突文帯が観察される。23～26は内湾し、口縁部を肥厚させる平緑土器で、25・26では以下に弧線文が観察される。26は口縁部を折り返して肥厚させている。27～31は無文の口縁部資料である。27・29は輪積痕を残すもの、28は小突起が付されると思われるものである。32はわずかに外反する口縁部の下端に1条の沈線を引くものである。33は上開きの縄文の充填された連弧文が施されたもの、34は胴部の括れ部に無文帯を持ち、以下に単節縄文を施すもの、35は右下がりの斜位の縄文帯が描出されるもの、36は胴下半に下開きの弧線区画を持ち縄文を充填するものである。37は焼成前穿孔の円窓の周囲に円形の縄文帯が見られるもので、玉抱き三叉文の中心と思われる。38は2条の沈線が器面を巡る内湾傾向のある胴部資料である。39は胴部文様帯下端を画す刺突文帯と思われる。40・41は砲弾形深鉢の口縁部の文様帯下端区画となる刺突列である。42は胴部の緩い括れ部に刺突列を配する胴部資料、43～48は沈線文の窺われる胴部資料で、43は縦横に走る沈線が引かれたもの、44は斜行する沈線のほか、弧状の短沈線が引かれたもの、46は胴部下半の連弧文の一部である。49～51は条線文の施されるもので、49では矢羽状に、50は斜行、51は横走する。52・53・第65図10は無文の口縁部資料である。

第65図11～15は底部周辺のものである。12・13は台付鉢の鉢底部付近のもので、前者では、横走する刺突文帯が設けられる。後者では、台部へ移行する括れ部に1条の沈線が引かれたようである。14・15は底面に網代痕を残すものである。16・17は焙烙の口縁部、18はカワラケの口縁部である。19はカワラケの底部、20は高台付の陶器底部である。

ガラス製品 21・22はガラス製のおはじきで、前者は桜模様、後者は算用数字の2の文字が隔刻される。

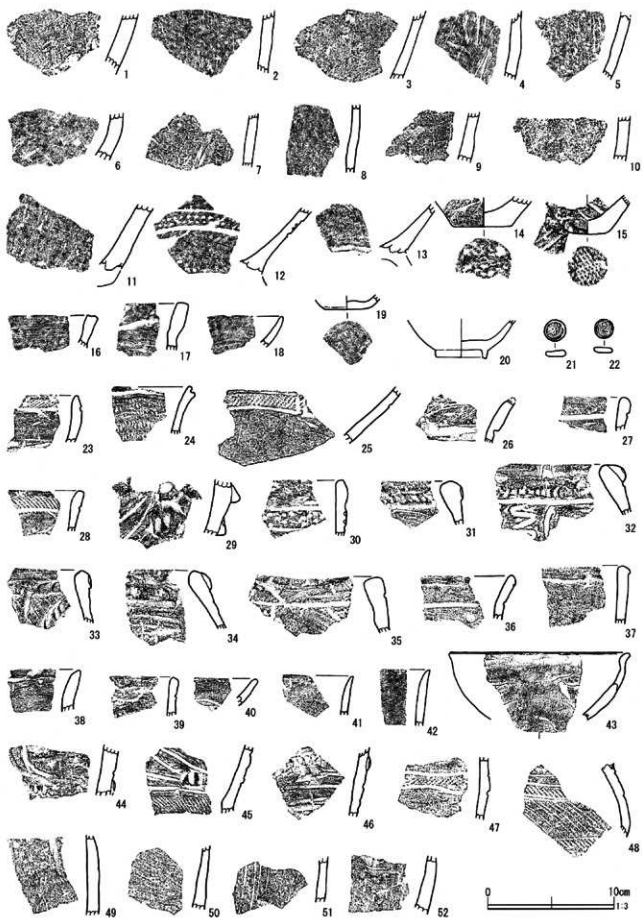
石器 第67図14・18は、両端に敲打痕のある敲石である。前者は比較的厚みのある楕円礫を素材としている。後者は、扁平な不正楕円形の礫を素材とするもので、裏面には、使用に伴って生じたと思われる剝離面が見られる。16は、砥石である。正面には錐状の研磨痕が見られるほか、側面、裏面にもわずかながら研磨痕が見られる。

鉄製品 第67図5は鉄鏝である。残存長9.2cm、身部長3.0cm、茎部長6.2cm、身部幅3.2cm、茎部幅0.9cm、身部厚0.4cm、茎部厚0.4cm、重量31.9gを測る。刃部の一部と茎部の下端を欠損する。身部は、扁平で菱形を呈する。鏝は明瞭ではない。茎部は身部と同じ厚みで作られている。

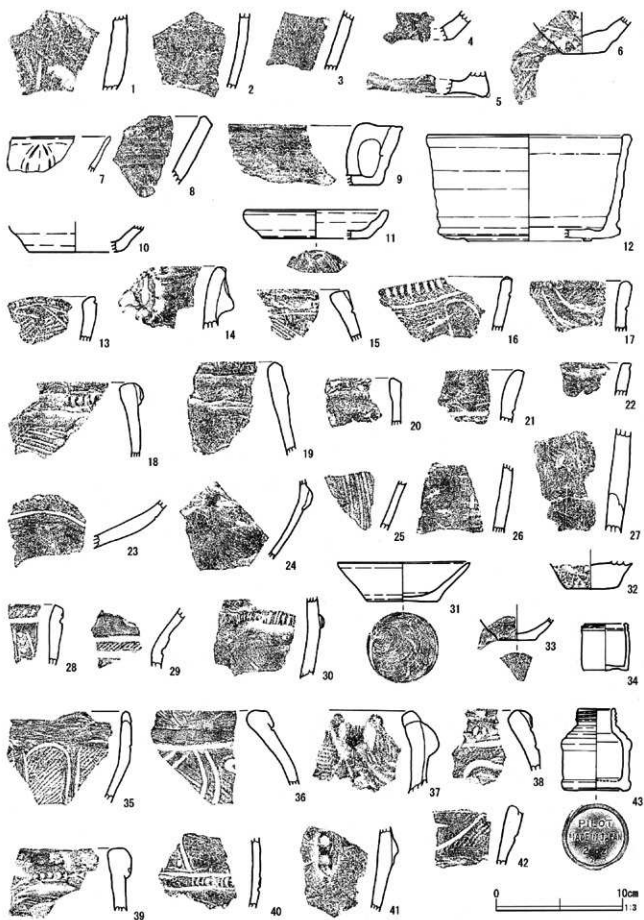
銭貨 第68図3・4は、D5グリッドP7出土のものである。前者は、洪武通宝、後者は太平通宝である。9は、D4グリッド出土資料で、「明治十六年一銭」の文字が読み取れる。

●Eライン出土遺物（第65・66・67図）

土器 第65図23・28は口縁部に幅狭の縄文帯を持つ平緑土器である。24は外反する平緑深鉢の口縁部である。口唇部に1条の沈線を引き、体部には、刺突を施す。後期前葉の資料である。25は、浅鉢形土器の胴下半部である。文様帯下端を画す縄文帯が観察される。26は単節縄文の施される平緑壺形土器の複合口縁部である。五領式に該当する。27は口縁部に沿って1条の沈線が施される平緑土器である。29は波状縁深鉢の口縁部資料で、波頂部から垂下する双刺瘤を伴う隆帯が特徴的である。30は口縁部に櫛状施文具による不規則な円形刺突を充填する刺突文帯が観察される平緑土器である。31・34は内湾傾向の強い平緑の粗製深鉢である。32では肥厚させた口縁部に刺突を施し、口縁部文様帯には、蛇行沈線が垂下する。



第65図 グリッド出土遺物 (3)



第66図 グリッド出土物(4)

33では刺突を伴う隆帯が垂下する。35・36は口縁部に1条の沈線を巡らせるものである。37~42は無文の口縁部である。37は口唇部が外側に張り出すもの、39は輪積痕が残されるもの、40はカワラケである。43は無文の浅鉢である。推定口径は14.2cm、残存高5cmを測る。口唇部は摘み上げるように外側へ引き出される。44~46は双刺瘤の付される胴部資料である。45は括れ部に配された縄文帯上部に斜行してくる沈線と横走沈線との結節点に貼瘤が見られる。47は横走る縄文帯が見られる。48は内湾する胴部資料で、横走る縄文帯間に条線が看取されるものである。49~52・第66図1~3は、無文の胴部資料である。4~6は底部資料である。6は底径3.5cmほどで、体部には条線文が観察される。7は青磁碗の口縁部資料である。蓮弁が陽刻される。8は播鉢の口縁部である。9は、内耳の付された焙烙である。10・11はカワラケで、後者は、推定口径11.2cmを測るもので、底面には回転系切り痕が残される。12は瀬戸美濃系の香炉である。口径16cm、底径14cm、高台の径は10cmを測る。外面には明瞭な水挽痕が残される。

土製品 第67図3は手捏ね土器の胴部である。胴径4cmを測る無文の資料である。

石器 第67図6は大型の凹基無茎石鎌である。扁平で薄く仕上げられている。両側縁の整形は両面からの押し剥離による丁寧なものである。11は石核である。両側からの丁寧な剥離で打面を形成し、不規則な剥片剥離を行っている。すでに作業を終えた残核と思われる。

●Fライン出土遺物 (第66・67図)

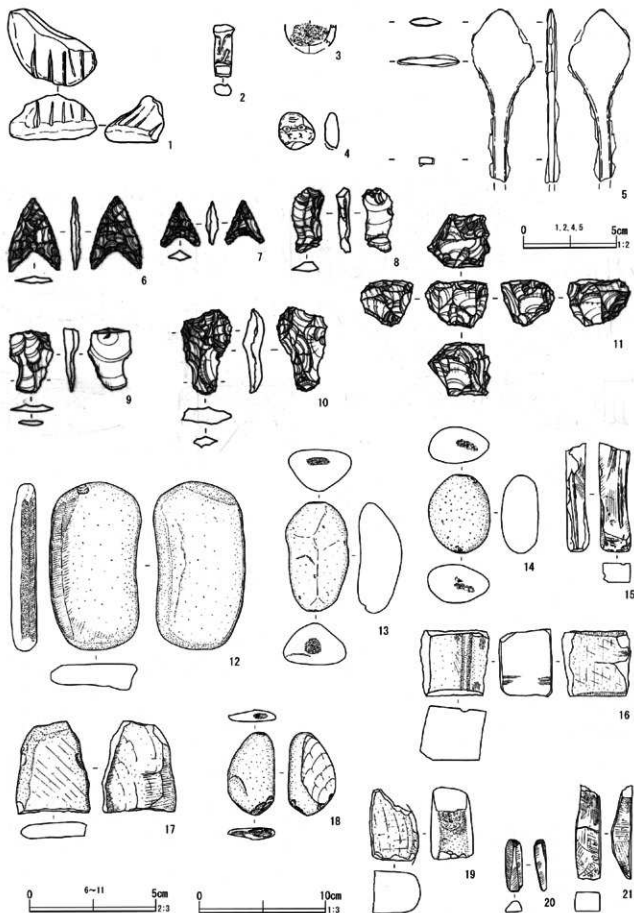
土器 第66図13は波頂部の丸い緩波状縁深鉢で、口縁に沿う1条の沈線が引かれ、以下には斜行沈線を組み合わせた幾何学模様を描出される。モチーフ内には縄文が充填される。14は平縁を呈する無文の口縁部に刺突風の単沈線を伴う縦位の貼瘤が配される。15は内湾する平縁土器で、口縁部に貼られた隆帯が剥落している。1条の沈線で区画された下には、斜行する数条の沈線が見られる。16は細密沈線文系の緩波状縁深鉢で、口唇部には丁寧な刻目文が施される。口縁部に沿う沈線と、文様体内の「D」字状の磨消文が観察される。17は平縁深鉢で、2条1組の沈線で上開きの弧線文が描かれる。18は内湾する平縁の粗製土器である。口縁部の刺突を伴う隆帯は一部剥落する。胴部には斜行する条線文が見られる。19は内湾する平縁の粗製土器である。肥厚させる口縁部を含め横位の篋削りの痕跡を止める。20は播鉢の口縁部である。内面に段を持つ。21は外反する平縁土器の口縁部である。幅の広い口縁部無文帯を閉じる1条の沈線が観察される。22は無文の平縁土器で、口縁部外縁に浅いナデ状の凹線が見られる。23は浅鉢形土器の底部付近の資料である。縄文帯下端を画する沈線が見られる。24は文様帯を画す沈線上に低平な貼瘤の貼られた胴部下半の資料である。25は斜行する条線文の施された胴部資料、26・27は無文の胴部資料である。31は後継10.4cm、底径5.4cmを測るカワラケである。底面には、回転系切り痕が明瞭に残される。32は底径4cmを測る縄文土器の底部である。33は推定底径3cmのカワラケの底部資料である。摩擦しているが底面にはわずかに糸切り痕を止める。

土製品 第67図4はいわゆる泥面子である。磨耗が進んでおり判然としなが鬼の顔であろうか。

石器 第67図20・21は砥石である。前者は、断面台形の細長い資料で、4面全てに研磨痕が残される。素材は瓦片である。後者は、断面が方形を呈するもので、いわゆる籃形のものである。

●Gライン出土遺物 (第66・67図)

土器 第66図28は平縁土器の口縁部資料で、口縁部に刺突文帯を持つほか、縦位の刺突文帯が形成される。



第67図 グリッド出土遺物 (5)

29は頭部に幅広の沈線帯で画された縄文帯が形成される胴部資料、30は刺し切るような刺突を密に加えた横走隆帯の観察される胴部資料である。

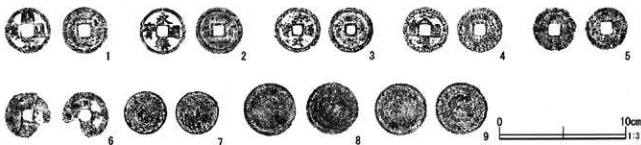
ガラス製品 34はガラス製の瓶である。口径3.2cm、底径3.8cmを測る円筒形の瓶で、口縁部に陽刻の螺旋帯が形成される。

石器 第67図15は砥石である。断面長方形を呈するもので、長軸方向にやや窪む。正面と左側縁には、やや深い溝状の研磨痕が観察される。

●調査区出土遺物 (第66図)

土器 35は口縁部に低い山形の突起を持つ平縁深鉢である。無文の口縁部を持ち、以下には「∩」状の縄文帯が垂下する。加曾利E式後半の資料である。36は内湾する折り返し口縁を持つ平縁土器で、胴部上半の文様帯には向かい合わせの弧線文や蛇行沈線が垂下する。後期前葉の堀之内1式に該当する資料であろう。37は波状縁深鉢の口縁部である。波頂部の両側がやや高く双頭となる。中央には丈のある貼瘤が付される。38・39は肥厚する口縁部に刺突列に施される平縁深鉢で、前者は口縁部の文様帯には、入組と思われる弧線文が窺われる。40は多載竹管による刺突文帯で口縁部文様帯下端を画す胴部資料、41は円形の刺突を持つ垂下隆帯の施された胴部資料、42は左下りの沈線が施され、右側には縄文が、左側には三叉文の右端と思われる沈線が看取される。

ガラス製品 43はガラス製のインク瓶である。口径3cm、底径5.4cmを測り、「PILOT MADE IN JAPAN 2 OZ.3」の陽刻がある。



第68図 調査区出土遺物 (3)

第7表 グリッド出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
67	6	E7	石鏃	黒曜石	2.9	2.0	0.3	1.2	
67	7	C3	石鏃	チャート	1.7	1.6	0.5	0.7	
67	8	C6	二次加工剥片	チャート	2.5	1.1	0.4	1.4	
67	9	C2	二次加工剥片	チャート	2.5	1.7	0.6	1.7	
67	10	B7	二次加工剥片	チャート	3.3	2.0	0.8	4.1	
67	11	E6	石核	チャート	1.8	2.5	2.0	9.3	
67	12	B2	磨石	硬砂岩	13.2	6.8	1.7	328.0	
67	13	C4	砥石	チャート	8.5	5.0	3.2	167.5	
67	14	D3	砥石	砂岩	6.2	4.8	3.0	126.2	
67	15	G4	砥石	麗岩	(8.6)	2.1	1.5	(57.1)	
67	16	D3	砥石	砂岩	(4.0)	(4.5)	4.2	(177.4)	
67	17	A7	磨石	砂岩	(6.8)	5.6	1.1	(70.3)	
67	18	D7	砥石	硬砂岩	6.4	3.6	0.9	31.4	
67	19	B3	磨石	安山岩	(5.1)	(3.6)	3.3	(118.8)	
67	20	F3	砥石	瓦	4.1	1.3	0.8	5.7	瓦転用
67	21	F9	砥石	安山岩	(7.5)	1.8	1.5	(20.5)	

IV 正福院貝塚（第2地点）の調査

1 遺跡の概要

正福院貝塚は大宮台地白岡支台の中央部に位置する。同支台の西側は元荒川の沖積地と接して明瞭な崖線を形成する。崖線縁辺は若干の小支谷が入り込み、それを取り囲むように遺跡が連続と形成される。正福院貝塚もそのような小支谷の谷頭部に展開する。

正福院貝塚は、昭和初期から研究者が探訪するなど古くから知られる遺跡である。正福院の墓地を中心とする貝塚部ではアサリ・オキシジミ・ハイガイ・カキ・ハマグリなど内湾砂泥底・干潟性の貝が採集される。また、正福院山門東側では、縄文時代後期から晩期の発達した遺物包含層が認められる。

昭和62年度には正福院本堂部分で発掘調査が行われ、縄文時代前期の住居跡、古墳時代前期の方形周溝墓、中～近世の地下式坑、掘立柱建物跡などが検出されている。

本報告の第2地点は、正福院敷地内南寄りの擁壁設置部分にあたり、標高は約14mである。調査に際しては、幅約2mの南北に細長い調査区が設定された。

本調査地点は縄文時代後・晩期の環状盛土遺構内に位置しており、盛土遺構由来の遺物が多く出土するとともに、調査地点西寄りでは2箇所の焼土跡が認められた。約1mにわたって赤化した焼土の広がりも認められた。住居跡に伴う灰跡ではなく、環状盛土由来の焼土が入り込んでいたものと思われる。

第1～3層より加曽利B式、安行2～3d式期の土器が多量に出土した。遺物が多く出土するのは第2層までで、第3層からは僅かに出土するのみとなる。調査区南側の掘伏付近で、深さ約0.5mの掘り込みを持つP7（第16層）が検出された。付近では暗褐色土下層に締まりの良好な層（第14・15層）が認められ、これを床面と捉えるならば、ピットを柱穴とする住居跡が展開していた可能性が考えられる。

2 遺構と遺物

(1) 土坑

●第1号土坑（第69図）

調査区北東隅に位置し、東半部はトレンチ外である。東側は調査区外であるため長径は不明であるが、短径約0.8mの不整形円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

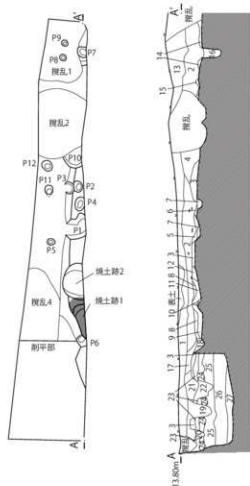
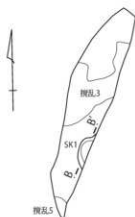
出土遺物（第70図）

土器 2は単節縄文の施された平縁土器である。斜行する沈線の右上に縄文が充填され、左下側は無文でよく磨かれる。3・4は単節縄文の施された胴部資料である。前者は原体を斜位回転させ条が縦位に表出されるものである。5・6は無文の胴部資料である。

(2) ピット

検出されたピットは12基を数えるが、遺物の出土は僅かであり、帰属時期は判然としにくい。ピットの計測値は第8表に示した通りである。

出土遺物（第70図）



- 基本土層
- 1 暗褐色土 締まりやや弱 径0.1~0.2cmのローム粒と炭化物粒子多
焼土粒子わずか 遺物出土多。
 - 2 暗褐色土 締まり良 径0.1~0.2cmのローム粒と炭化物粒子多
焼土粒子多 遺物出土多。
 - 3 暗黄褐色土 締まり良 2層とアフローム上の薄層層 焼土粒子含む。
 - 4 暗褐色土 締まり良 径0.1~0.2cmのローム粒多 炭化物粒子含む
2層より色調明。
 - 5 暗褐色土 径2cmのロームブロックわずか 2層より明
ローム粒子・炭化物粒子多 焼土粒子含む ビット覆土か。
 - 6 暗褐色土 締まり良 径2cmのロームブロックわずか。
 - 7 暗黄褐色土 締まり良 暗褐色土を混状に混じる 炭化物粒子を含む。
 - 8 淡黄褐色土 締まり弱 碎片わずか 焼土ブロックと粘土多 灰層
砂質である。
 - 9 鮮赤褐色土 締まり弱 焼土層 ブロック状を呈す 焼土跡の大表面。
 - 10 鮮赤褐色土 締まり弱 9層ほど傾けないが焼土層である 9層より砂質
焼土跡の大表面。
 - 11 淡黄褐色土 締まり弱 凝結ローム土 炭化物粒子を含む ブロック状。
 - 12 暗黄褐色土 径1cmの焼土ブロックわずか 今や凝結した3層土か。
 - 13 黒色土 締まり粘性無 締め層 均一な凝結状況 ローム・炭化物を含む
焼土の混入なし。
 - 14 茶褐色土 締まり良 粘性無 締め層 径0.1~0.5cmのローム粒
径1cmのロームブロック多 径0.1cmの焼土粒・炭化物粒を含む。
 - 15 茶褐色土 締まり良 粘性無 締め層 径3cm程度のロームブロックを含む。
 - 16 褐色土 締まり良 粘性無 締め層 径0.5~0.8cmのローム粒と
径0.3cmの焼土粒・炭化物粒多。
 - 17 暗褐色土 径0.5cmの焼土ブロックわずか 径0.3~0.4cmの焼土粒子多。
 - 18 暗褐色土 砂質で締まり弱 径2~3cmの焼土ブロック
径0.1~0.2cmの弱粘土多。
 - 19 暗褐色土 締まりやや弱 焼土粒子多 径0.1cmの骨片含むローム粒多
炭化物粒子を含む ビット等の覆土と思われる。
 - 20 暗黄褐色土 径0.2~0.3cmのローム粒 焼土粒子わずか
 - 21 暗褐色土 締まり良 2層に近接 焼土粒子と炭化物粒子、ローム粒多
ビット等の覆土か。
 - 22 暗褐色土 締まりやや弱 径0.5~3cmのロームブロック
径0.1~0.3cmのローム粒非常に多 焼土粒子と炭化物粒子わずか
ビット等の覆土か。
 - 23 黄褐色土 ソフトローム土
 - 24 黄褐色土 ハードローム土
 - 25 暗褐色土 ブラックハンド層(上層)。
 - 26 暗褐色土 ブラックハンド層(下層)。
 - 27 黄褐色土 粘性有 ブラックハンド中の炭褐色ローム層。

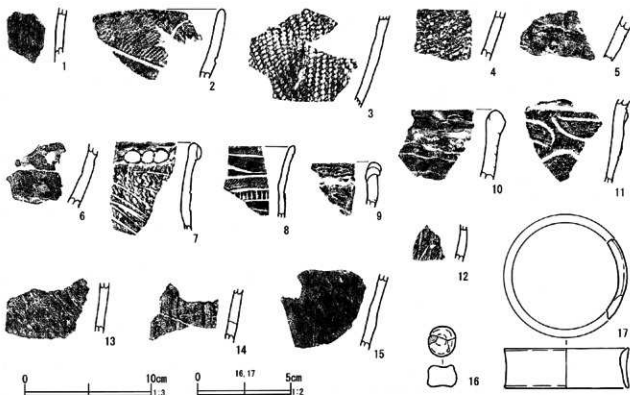
第69図 正福院貝塚(第2地点)全測図及び遺構図

第8表 正福院貝塚（第2地点）ビット計測表

番号	長径	短径	深さ
1	(66)	77	39
2	36	(28)	13
3	(30)	(36)	7
4	45	32	14
5	21	18	37
6	40	(25)	11

番号	長径	短径	深さ
7	(32)	31	60
8	22	18	11
9	18	18	28
10	(70)	(55)	13
11	27	25	24
12	36	27	56

※単位は全てcm



第70図 土坑・ビット焼土跡出土遺物

土器 1はP1出土の無文の胴部破片である。

(3) 調査区出土遺物

●焼土跡1（第69図）

出土遺物（第70図）

土器 7は加曾利B式に伴う粗製土器で、平縁を呈する深鉢形土器の口縁部資料である。口縁外周に鎖状隆帯を貼り、以下には粗い縄文を施し、その上から斜行する条線文を施文している。8は頭部で緩く括れる平縁の深鉢形土器である。口縁部と括れ部に縄文帯を設け、その間隙に三叉文と思われるモチーフを配する。括れ部の下位には、縄文帯に添う刻目文帯が見受けられる。9は閉圜となる粗製土器で、輪積痕を意図的に残すものである。口縁部は特にその傾向が顕著である。11は胴下半部に、少しずつずらした弧線区画を描出するものである。13・15は無文の胴部資料である。前者には、「焼土跡灰層」の注記がある。

土製品 16・17は耳飾りである。16は円筒形の小型の資料である。中央部がわずかに膨らむように整形されている。17は滑車形を呈する薄手のもので、推定直径3.5cmと思われる。

●焼土跡2 (第69図)

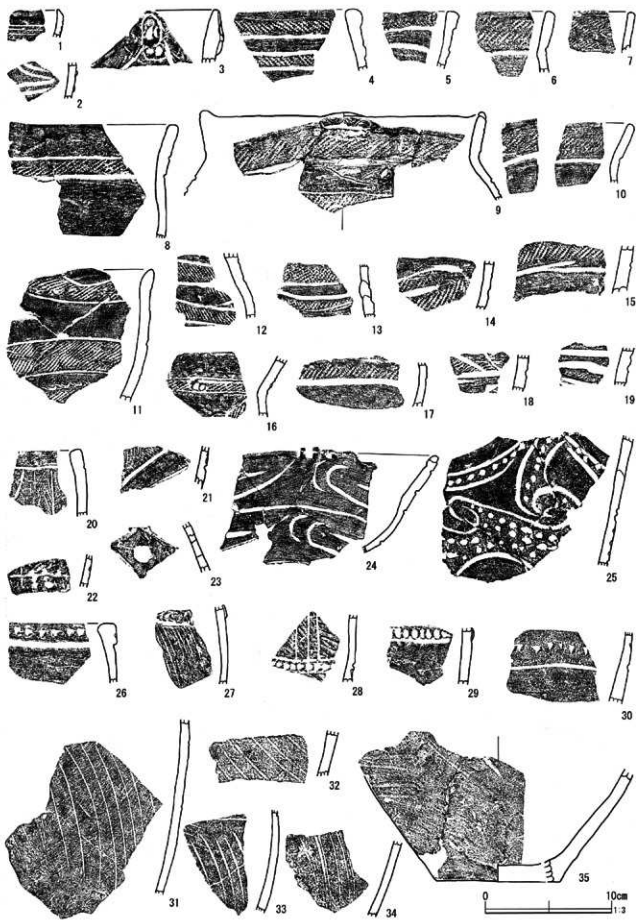
出土遺物 (第70図)

土器 10は無文の平縁深鉢の口縁部資料である。体部には輪積痕を意図的に残す。12は縦位の条線文を看取できる胴部資料である。14は無文の胴部資料である。

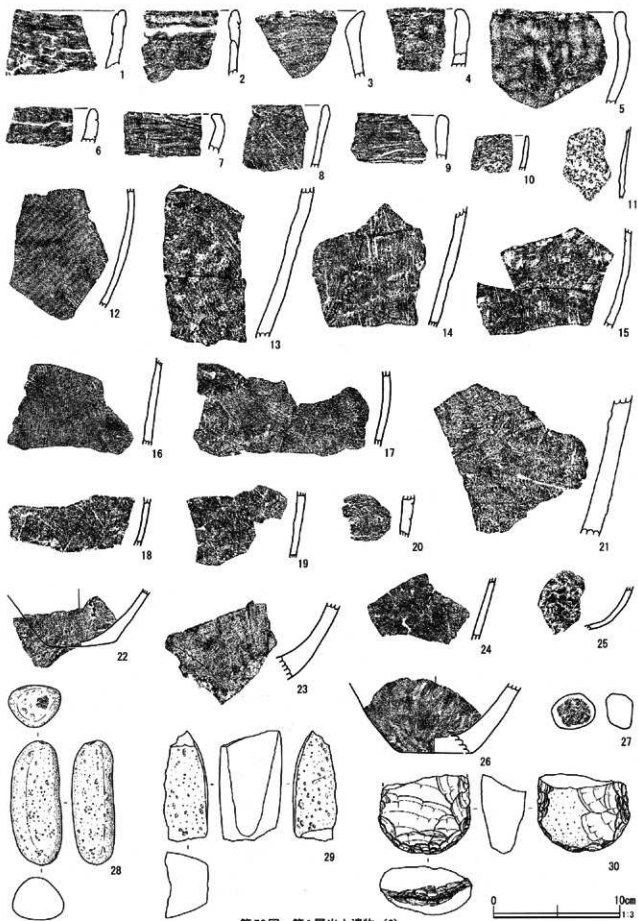
●包含層第1層

出土遺物 (第71・72図)

土器 第71図1は外削ぎとなる小振りな平縁土器の口縁部資料で、口縁部に3条の横走沈線が見られる資料である。2は丁寧な器面調整を施す胴部資料で、繊細な刻みを持つ隆帯を横位の鋸歯文風に貼るものである。3は口縁部に縄文帯を持つ大振幅の波状縁深鉢である。波頂部に2段の双刺瘤が付される。4~10は横走する縄文帯と磨消文帯とが重畳する口縁部資料である。4は内湾傾向を示すもので、幅狭で肥厚する口縁部を持つ。6・10は、4・5に比べ幅広で外折する口縁部縄文帯を持つもの、8は口縁外面を磨消文帯とし、幅の狭い縄文帯で胴部文様帯の上端を画すものである。9は平縁で低平な山形突起を持つ広口壺形土器である。推定口径は18cmほど、残存高は9cmほどで、外折する口縁部に2指頭程度の縄文帯を持ち、磨消文帯を挟んで単沈線で画される縄文帯が横走する資料である。11は山形の小突起を持つ碗形の土器と思われる。突起を囲むように弧状の縄文帯が配される。胴部は丁寧にナデられた磨消文帯と単沈線で区画された縄文帯が交互に巡るようである。12~17は縄文帯と磨消文帯とが交互に器面を巡る胴部資料である。12は内湾傾向を示すもの、13は輪積痕を顕著に残すもの、14は縄文帯が入組弧線文を形成すると思われるもの、16は「く」の字に括れる胴部資料で、括れ部の縄文帯に双刺瘤が付されるものである。18は幅のある沈線で画された縄文地の文様帯に斜行する沈線が見られるもの、19は幅のある沈線が器面を横位に巡るものである。20~22はいわゆる細密沈線文系の土器群で、20では磨り消しとなる口縁部から垂下する縦位区画に矢羽状の細密沈線が施されるもの、21は左下がりに斜行する矢羽状の細密沈線帯が形成されるもの、22は小振りの土器で、胴部に形成された縦横の区画内に斜行する細密沈線が施されるものである。23は菱形に画された磨消文の中央に円窓が穿たれる内湾資料である。台付土器の脚台部であろうか。24は口縁部に小突起を連ねる浅鉢形土器である。胴中位の内面に稜を持ち、そこから緩やかに外反するように見せるが、外面にはそれほどの屈曲イメージはない。丁寧に調整された器面は大きく上下に分帯され、上下とも口縁部の突起に合わせて入組弧線文を連ねる。25は括れを持たない大振幅の波状縁深鉢である。口縁に沿って刺突文帯が配されるほか、波頂部からは弧状となる刺突文帯が垂下する。胴部に入組弧線文で上下を閉じる幅の広い刺突文帯が形成される。三方を刺突文帯で画される波頂部左下にはネガティブな三叉文が形成される。26は肥厚する口縁部に篋状施工による押し引き風の刺突列が形成される平縁内湾土器である。27~29は刺突文帯で胴部文様帯を区画する胴部資料である。28は沈線によるガイドラインを持つ刺突文帯で口縁部文様帯を分割する3条の垂下沈線が観察される。30は幅の広い沈線区画の中央に刺突列を施すタイプのものである。31~34は斜行する条線文の施される胴部資料である。35は推定底径10cmほどと思われる条線文の底部資料である。



第71圖 第1層出土遺物(1)



第72圖 第1層出土遺物 (2)

第72図1~10は無文の口縁部破片である。いずれも平縁で1・2・6は輪積痕を意図的に残す一群、5が指頭圧痕を残すタイプである。10は11の胴部破片とともに製塩土器と思われる。12~21・23~25は無文の胴部資料である。12・16は、きめの細かい胎土で丁寧に磨かれたもの、14は縦位の粗い整形痕を顕著に残すもの、20は輪積痕を意図的に残すもの、23は底部に近いもの、25は、薄手で底部に近い小振りの資料である。22・26は無文の底部資料である。前者は底径6cm、後者は、6.5cmほどと思われる。

土製品 第72図27は小型の土製円盤である。厚みのある土器を素材としたものである。

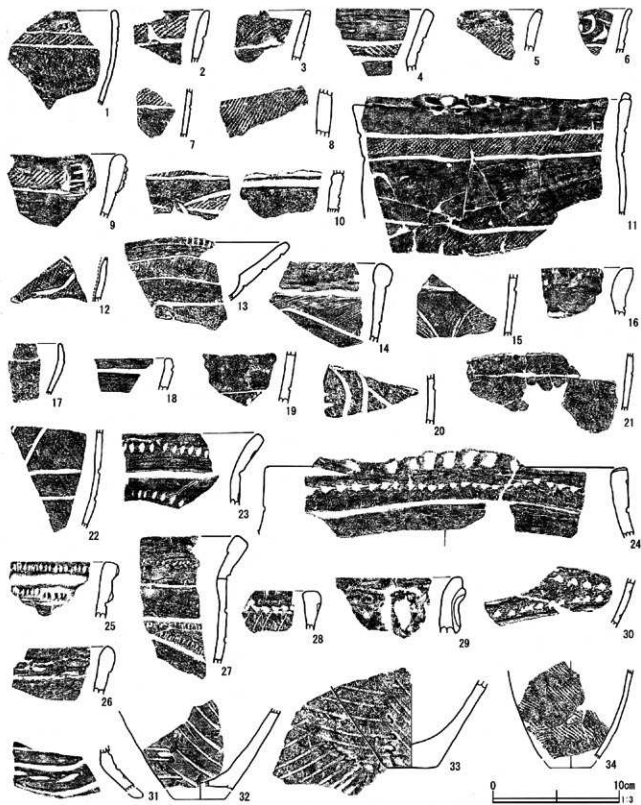
石器 第72図28は敲石である。長楕円形の円礫を素材とし、端部を敲打面としている。使用は進行していない。29は石皿残欠である。大振りの石皿片と思われ、剥離による面取り整形が行われている。30は比較的大振りな打製石斧の刃部残欠である。円礫素材の大型剥片を素材とし両側縁と刃部に成形加工を施している。正面中央は素材剥片の主剥離、裏面には礫表皮を残す。

●包含層第2層

出土遺物 (第73・74図)

土器 第73図1は薄手の平縁土器で、口縁部に比較的幅の広い縄文帯を持つ。この縄文帯の中ほどに1条、下端に1条の沈線を引き、2・3は口縁部の縄文帯下端区画の沈線を取りこむ三叉文を観察することのできる資料である。後者は口縁部に小突起を持つ。4は外反する無文の口縁部の下端の括れ部に沿って幅の狭い縄文帯を持つ平縁土器、5は外反する縄文施文の口縁部である。6は薄手の緩波状縁の精製土器で、波頂下に円形に近い弧線文を、その右側にこれを取り囲む弧線文が窺われる。玉抱き三叉文となるものであろうか。9は口縁部縄文帯に縦位の貼瘤が配される平縁深鉢である。7・8は縄文の観察される胴部資料である。10は外面にレンズ状の縄文帯を連ねその交点に向かい合わせの弧線文の配されるものと思われる。内面には幅の広い沈線が2条窺われる。11は推定口径18cm、残存高10cmほどの平縁深鉢である。口縁部には低平な突起が付される。口縁部外縁を無文とし、わずかに括れる頸部と胴部に縄文帯を配置する。12は縄文地文上に斜行する沈線が窺われる胴部資料である。13は大きく外傾する皿状の土器で、口縁部の一部に刻みを付す。外面には磨消文帯と縄文帯を交互に配す。内面は丁寧なナデを加え、内列りを施すことで頸部に稜が形成される。14・15は細密沈線文の施される資料である。16~18は無文の平縁土器で口縁部に1条の沈線が引かれるものである。19~21は無文地に沈線文の施された胴部資料である。19・21は器面を巡ると思われる1条の沈線が見られるもの、20は弧状や斜行する沈線の見られるもの、22は横走する沈線に向かって傾斜する斜行沈線が認められるものである。23は緩やかに屈曲する頸部を持つ平縁土器で、括れ部に引かれた太い沈線の上下に刺突列が形成される。24は推定口径28.5cmほどの広口壺で、口唇部には刺突が付される。口縁部には沈線で下端区画された刺突文帯が形成される。25は口縁部に刺突を伴う2条の隆帯を持つ平縁土器、26はやや肥厚する口縁部下端を沈線で画す無文土器、27は頸部で外接する平縁深鉢で、口縁部と胴部に刺突列が観察される資料である。28は口縁部を肥厚させる砲弾形の粗製土器である。29は無文となる口縁部に中央を押し窪めるような刺突を持つ貼瘤が付される資料である。30は2列の刺突列の見られる胴部資料、31は裾部に刺突文帯を持つ台付土器の脚台部である。32~43は底部資料で、32・33は斜行する条線文が観察されるもの、34は縄文の施されるものである。

第74図1・2は、非常に薄手の無文資料で、製塩土器と思われる。3は折り返し口縁となる口縁部資料、4~10は無文の胴部資料で、4は輪積痕を残すもの、5は丸底となる底部付近の資料である。7は残存最大



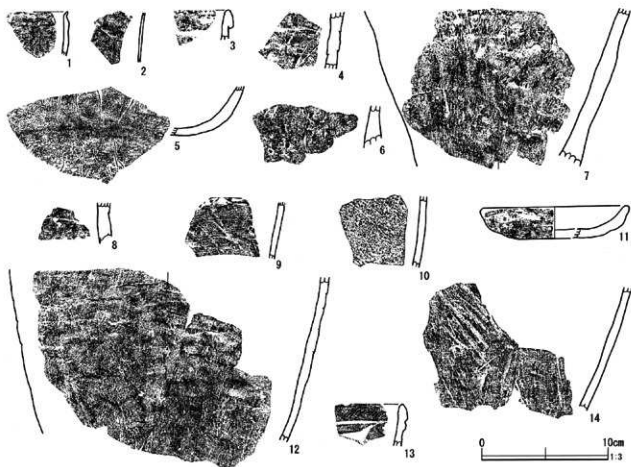
第73圖 第2層出土遺物 (1)

径21cmほどの胴部下半の資料である。11は推定口径12cmほどと思われる無文の皿形土器である。12は残存部最大径28.5cmほどの無文の胴部資料である。輪積痕が顕著である。13は三叉文の観察される平縁土器、14は斜行する整形痕の顕著な胴部資料である。

●攪乱1

出土遺物 (第75・76図)

土器 第75図1~11は縄文時代前期の所産である。1は頸部に「く」の字に屈曲する繊維土器の胴部資料である。屈曲部に2条の平行沈線が引かれ、上部には同一施文具を用いた斜行する平行沈線の末端が看取される。胴部には無節縄文が施される。2は貝殻背圧痕の施された繊維土器の胴部資料である。3・4は半截竹管による横走する爪形文の施された土器で、前者は平縁となる口縁部資料である。5は単節縄文の地文上に平行沈線で横位の鋸歯文が描出される胴部資料である。縦位に並ぶ円形竹管文が配される。6・7は粗くナデられた器面に平行沈線でモチーフの描かれる土器である。前者は、斜行する沈線の両側に渦を巻く曲線が看取される。8・11は斜めに刺し切るような刻みの付された細い隆帯を器面に巡らせるものである。12は無文の平縁土器の口縁部資料で、肥厚する口縁部に大きな楕円形の連続刺突を施すものである。内面には横位から斜位の整形痕が残される。13は内湾する平縁浅鉢で、口縁部に幅の狭い縄文帯を配し、

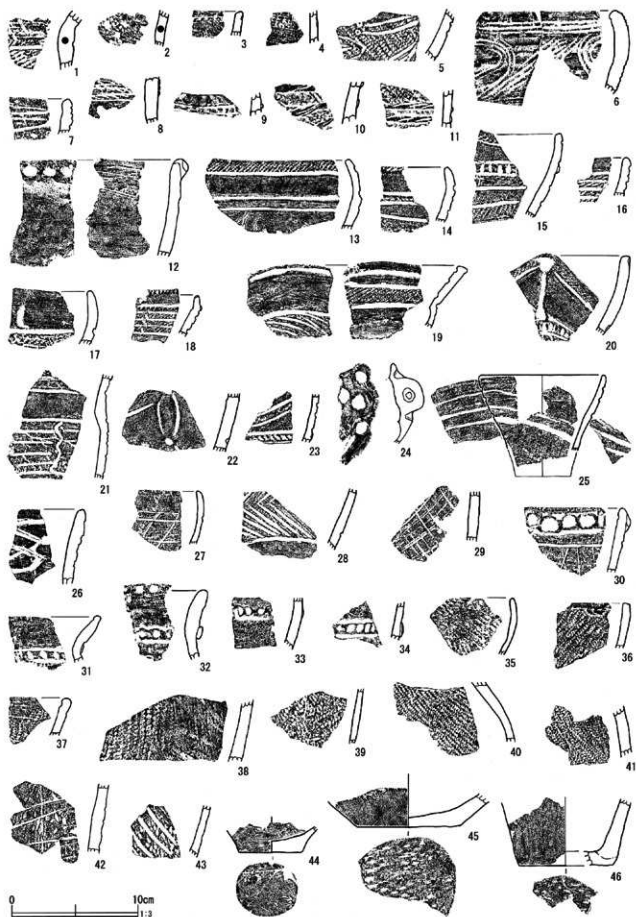


第74図 第2層出土遺物 (2)

最大径を持つ胴部上位に平行沈線が施されるもの、14は口唇部と口縁部無文帯下端に刻目文帯を持つ平縁浅鉢の口縁部、15・20は波状縁を呈する鉢形土器で、口縁部外面に幅の狭い縄文帯を配し、波頂下に細長い三角形の磨消部が形成される資料である。胴部には、水平に巡る刺突文帯で上端を画す文様帯を持つと思われるものである。後者では、波頂部から沈線が垂下し、その両端に円形刺突が付される。16は無文の口縁部の下に数条の刻目文帯が形成されるもの、17はやや幅のある口縁部の磨消文帯の下部に縄文帯が観察されるもの、18は口縁部先端がわずかに内折する土器で、口唇部と口縁部文様帯上端に刻目文帯を持つものである。口縁部文様帯は階段状の沈線で区画される縄文帯で飾られる。19は胴部の丸くなる浅鉢形土器と思われる、外反する口縁部内面にはレンズ状の沈線区画と縄文帯が見られる。胴部外面には、斜行する条線文が付けられる。21は頭部にやや幅のある磨消文帯を持ち、上下に横走る縄文帯が形成される胴部資料である。胴部の縄文帯を貫くように蛇行沈線が垂下する。22は外反傾向をもつ土器で、垂下するレンズ状の沈線文が観察される。レンズ状文の連結部には円形刺突が付される。23は刻目文帯と斜行する沈線との間に三角形の磨消部が形成される胴部資料、24は円形刺突が縦位に並ぶ装飾突起と思われる。25は推定口径10cm、推定器高8cmほどと思われる、小型の鉢形土器である。外面に3条の沈線が巡る。26は細い半截竹管で格子目ないし鋸歯状の文様の付される平縁土器、27は細い篋状施工具による格子目文の施される口縁部資料である。28は横位の鋸歯状の条線文帯の形成される胴部資料、29は格子目文の胴部資料である。30は口縁部に鎖状隆帯を、胴部に格子目文を看取することのできる平縁深鉢である。31・32は「く」の字に屈曲する口縁部資料で、前者は口唇内面に細い1条の沈線が引かれる。後者は、頭部に鎖状隆帯を、口唇部に円形刺突を施す資料である。33・34は胴部に鎖状隆帯を貼る資料である。35~37は単節縄文の施された口縁部資料である。35は器壁が薄く内湾するもの、37は口縁部内面に1条の沈線の配されるものである。38~41は単節縄文の施された胴部資料、42・43は単節縄文上に斜行する条線文の観察されるものである。44~46は無文の底部資料である。44は楕円形の底部を持つもので、最大径は5cmほど、内面にも横位の丁寧な整形痕を明瞭に残す。胴部から口縁部も楕円形を呈した可能性が高い。45・46は底面に網代痕を残す資料である。

第76図1は口縁部に垂下する二瘤の隆帯を貼るもの、2は双頭となる突起を持つ波状縁深鉢で、3つの刺突を持つ楕円形の貼瘤が見られる。3~5は沈線で区画した刺突文帯で文様の描出されるもので、3は双頭の波状縁土器、4は低平な山形突起を持つ平縁土器、5は入組弧線文となる沈線間に刺突を充填する平縁土器である。6・7は平滑に整形された器面に鋸歯状等の沈線文が描かれた口縁部資料である。8~10は安行式に伴う粗製深鉢の口縁部資料である。いずれも内湾し肥厚させた口縁部に刺突文列を形成する。12は外反傾向の強い胴部資料で、破片上部の縄文帯と下部の弧線区画との間に磨消文帯が形成される。13は屈曲部を持つ胴部資料で、入組弧線文帯に紡錘形の刺突が充填されるものである。14は括れ部に刺突文帯を持ち、胴部に連弧文が観察される。15は横走沈線とこれに平行する刺突列の上部に縦位の弧線2条が見られるもの、16は緩やかな背合わせとなる弧線の観察される胴部資料である。17~20・25は無文の口縁部資料で、17・20は輪積痕を残すもの、19は角頭状の口唇部を持つもの、25は底部付近の資料である。21~23は無文の胴部資料で、21は「く」の字に屈曲するもの、22・23は縦位の整形痕の残されるものである。24は斜行する条線文の施された資料である。26・27は底部資料で、前者は底径5cmほどで斜行する条線文の見られるもの、後者は底径7.5cmを測るものである。

石器 第76図28・29は平基無形の石鏃である。前者は貝殻状剥片を素材とし特に正面側に丁寧で細かい



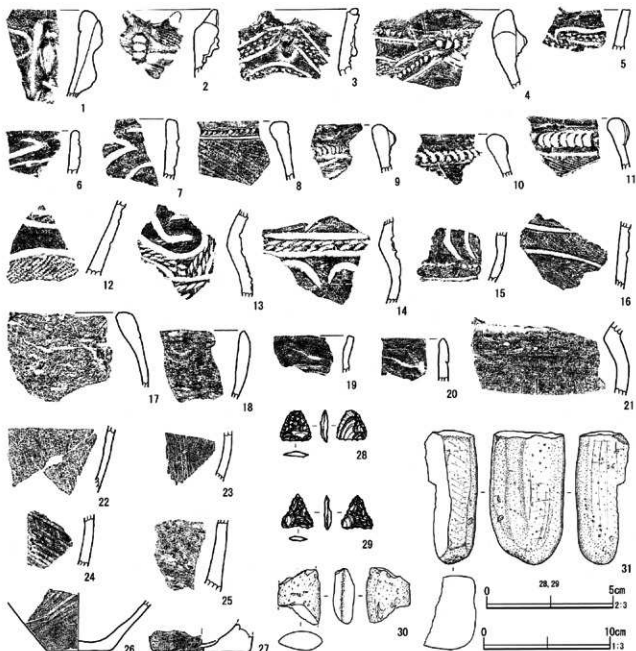
第75圖 攪乱1出土遺物(1)

剥離を加えている。裏面には素材剥片の主剥離を残すとともに、バルブを剥く階段状剥離が施される。後者は周縁部からの丁寧な剥離で仕上げられている。30は断面形状がレンズ状を呈する軽石製品である。さらに長かったものと思われるが両端を欠く。31は磨石兼敲石と思われるもので、正面図下端の小口に敲打痕が残されるほか、上部の欠損面にも敲打の痕跡が見られる。

●攪乱2

出土遺物 (第77・78図)

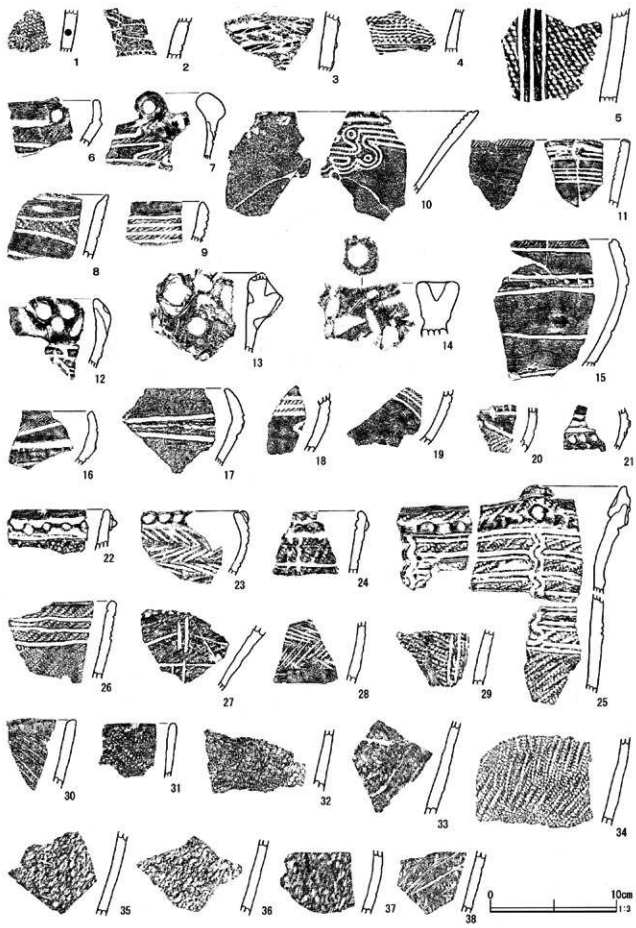
土器 第77図1~4は縄文時代前期の所産である。1は組紐文の施された繊維土器の胴部資料である。2は破片下端に爪形文が、その上部に横走る乱雑な沈線帯が施された胴部資料である。3は刺し切るような



第76図 攪乱1出土遺物 (2)

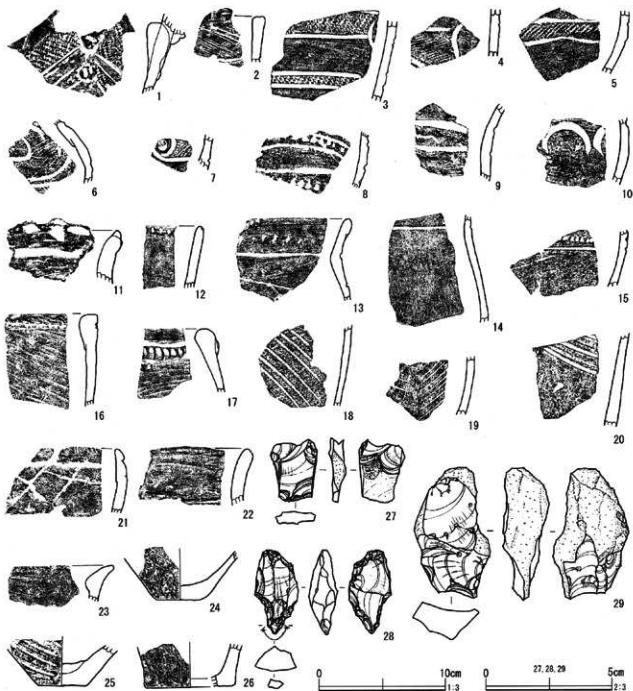
刺突文の施された浮線文の胴部資料、4は多載竹管による押し引き刺突の施された胴部資料である。5は3条の垂下沈線の両脇に単節縄文は施された胴部資料である。6・7は精製の浅鉢あるいは小型の深鉢形土器の口縁部資料と思われ、口唇部に耳状の突起が付される。前者では口縁部無文帯から半分浮き出るように貼付され中央に大振りの円形刺突が見られる。後者は口唇部に大きく張り出すように付されたもので、やはり中央部に円形刺突が施される。8は内削ぎとなる口唇部外縁に、1条の沈線を巡らせ、以下に緩やかな背合わせの弧線文を配し、内部に縄文を充填するもの。9は外削ぎとなる口縁部に刻目文を伴う沈線文帯を設けるものである。10は大きく外反する浅鉢形土器で、外面を無文とし、内面に円文楕円文を基本にこれを取り巻く沈線を配するものである。口唇部にも1条の沈線を巡らせている。11は外反傾向を持つ平縁土器で、外面を無文とし、内面にわずかな間隙を開けて2帯の沈線文帯が形成されるものである。12~14は口縁部に大振りの円形刺突を伴う装飾突起を持つ資料である。12は3個の円形刺突の付された逆三角形の突起、13は内面側にも刺突の見られるもの、14は上部からの刺突の見られる臼状の突起である。15~17は内湾する平縁土器の口縁部資料である。15は口縁部に幅狭の縄文帯を、最大径部に刺突文帯を持つもの、16は口縁部に逆三角形の縄文区画の観察されるもの、17は最大径部付近に刺突文帯を形成するものである。18~21は精製土器の胴部破片で、いずれも緩やかに湾曲する比較的小振りの資料である。18は2条の縄文帯と屈曲する沈線の先端部が窺われるもの、19は右下がりに斜行する縄文帯の見られるもの、20は胴部を巡る刻目文帯と三角形ないし菱形となるとと思われる縄文帯の看取されるもの、21は施文具の異なる2帯の刺突文帯の見られるものである。22~25は口縁部に鎖状隆帯を巡らせる一群である。23は内湾する口縁部に矢羽状の集合沈線を施すもの、25は緩やかな波状縁となる深鉢形土器で、波頂部外面の鎖状隆帯上には、環状の貼付文が、同じ部位の内面には浅い円形刺突を伴う突起が施される。体部は全面に単節縄文を施し、胴部上半には7条の半載竹管による平行沈線を引く。さらに波頂部と波底部には同一竹管を用いた蛇行沈線を垂下させるものである。34は本資料の胴部下半の資料と思われる。26は外反傾向のある平縁深鉢形土器で、口縁部外面に3条、内面に1条の沈線を引く。地文は単節縄文である。27は口縁部が大きく外反する資料で、波状縁を呈する可能性が高い。口縁部に刺突文帯を持ち口縁部文様帯には縄文の施される三角形の区画を持つ。さらに波頂部から2条1組の短沈線が垂下する。28は矢羽状の沈線の施される胴部資料、29は3条の沈線が垂下する縄文地文の胴部資料である。30は斜行する条線文の看取される平縁口縁部資料、31は単節縄文の施される平縁深鉢である。32~38は縄文の施される胴部資料で、38で左下がりの沈線が施される。

第78図1は波状縁を呈する深鉢土器の波頂部資料である。口縁部には単節縄文の施された縄文帯を持ち、波頂部から垂下する隆帯の末端と、その下部の双刺瘤が観察される。2は右下がりに斜行する整形痕と上開きの弧線が看取される。口唇部には小突起が付される。3・4は器面を巡る縄文帯とこの上から施される対弧状となるとと思われる沈線が窺われる。5は縄文帯の施される胴部資料、6は内湾する壺形ないし注口土器の肩部の資料である。7は円形刺突を取り囲む弧線文が見受けられるもの、8は胴部に弧状に展開する刺突文帯が観察されるもの、9は外反の起点となる部分に2条の沈線が観察される胴部資料、10は下向きの連弧文の観察される資料である。11は口唇部に刺突を伴う突起の付された資料である。12は無文の平縁深鉢で、口唇部に細かい刻目が付される。13は頭部で「く」の字に屈曲する平縁土器である。幅の広い口縁部には篋状施文具による刺突が施される。14は1条の沈線が横走する胴部資料である。15は破片上部に沈線で区画された刺突文帯が観察される胴部資料である。16・17は安行式に伴う粗製土器で、平縁



第77图 攪乱2出土遺物(1)

で砲弾形を呈するものと思われる。前者は肥厚する口縁部に押し引きの刺突文列を施し、以下斜行する条線文が施される。後者は口縁部に刺突を伴う隆帯を貼るものである。18~20は条線文の施される胴部資料である。21~23は無文の口縁部で、21は輪積痕を残す内湾傾向を示すもの、23は口縁部内面を肥厚させ、口唇部を引き出すように外反させるものである。24~26は底部資料である。24・25は外面に条線文の施されるもので、前者の底径は3.5cmほど、後者は3.7cmほどである。



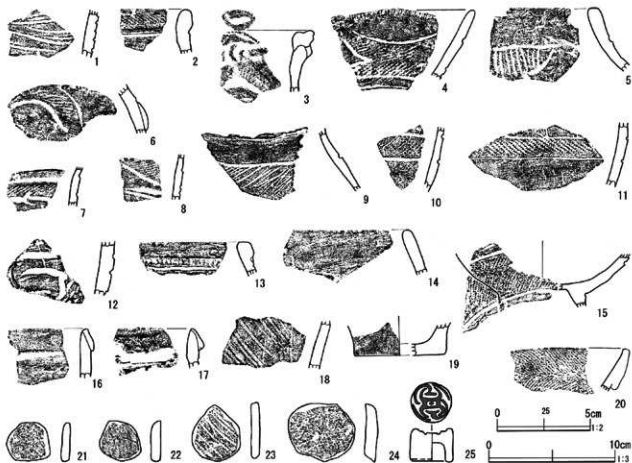
第78図 攪乱2出土遺物(2)

石器 第78図27は黒曜石製で、不整形のやや縦長の剥片を素材とする二次加工剥片である。正面下端に裏面方向からの加撃による細密な押圧剥離が施される。側縁と裏面には素材の表皮が残される。28は黒曜石製のドリルである。厚みのある不規則剥片を素材とする。正面には縦方向の剥離面が残され、裏面には方向の異なる横方向の剥離面が残される。錐部は、両面からの剥離によって丁寧に作り出されており、先端部は使用により磨耗している。また、基端部にも両側から剥離を加えている。29は剥離痕を持つ黒曜石の石塊で、表皮は風化しているものの、稜や角はある程度残されている。剥離面には気泡が見られる。

●攪乱4

出土遺物 (第79図)

土器 1は半截竹管による平行沈線の施された資料である。浮島式に比定されよう。2は口縁部に縄文帯を持つ平縁土器、3は口縁部に縄文帯を持つ波状縁土器で、波頂部に捻転する突起を持ち、突起の下部には三叉文が窺われるものである。4は大きく外形する平縁浅鉢である。口唇部には細密な刻みを持ち要所に小突起が付される。この突起の下の小さな無文の菱形区画が見られることと突起を起点とする上開きの弧線が見られることから本来背合わせの弧線区画であるものと思われる。内面には明瞭な整形痕が残される。5は内傾する平縁口縁部で、上向きの弧線区画が描出され縦位の沈線が充填される。6は内湾する胴

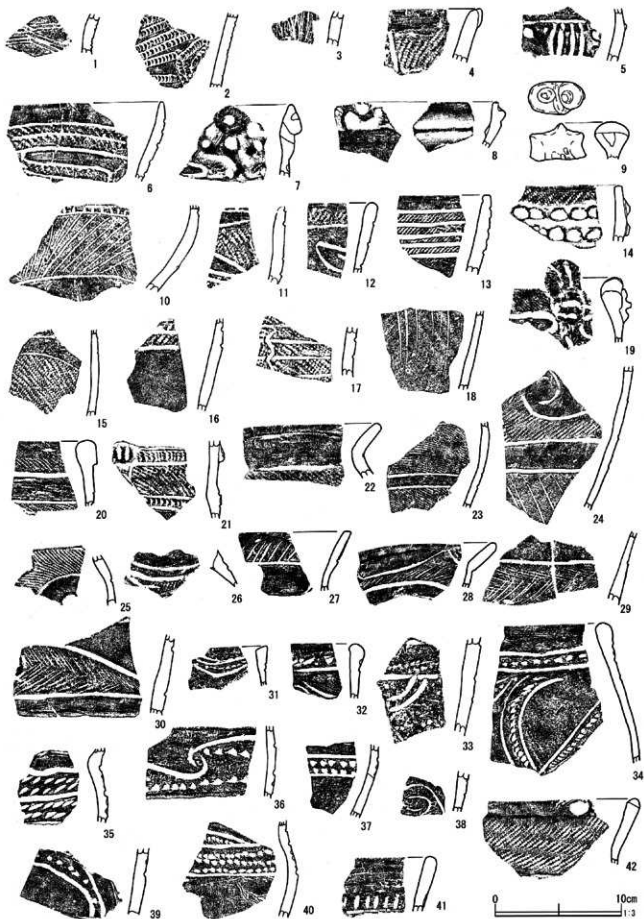


第79図 攪乱4出土遺物

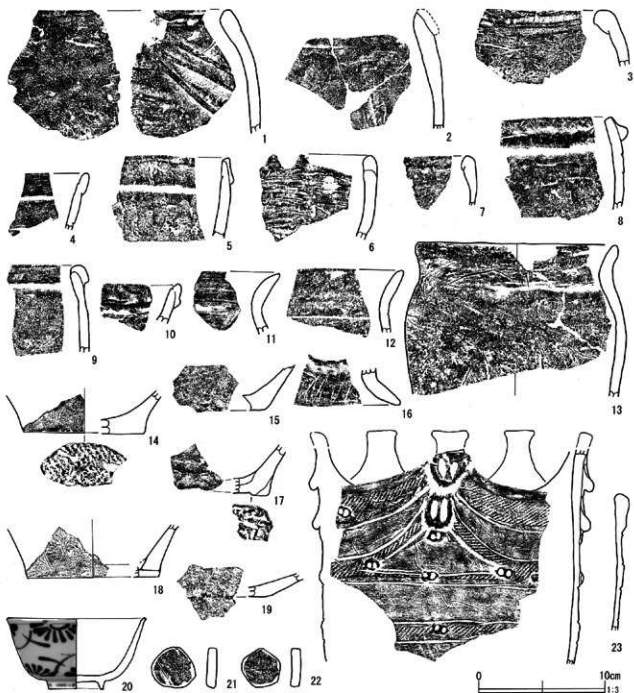
部資料で、胴部最大径付近に横長の貼帯を持ちこれを囲むように縄文の充填された弧線区画が描出される。7・8・11は縄文帯の看取される胴部資料、9・10は細密沈線文帯の形成される胴部資料である。12は入組弧線文の看取される胴部資料で、破片右下には刺突文が観察される。13は口縁部に押し引き状の連続刺突文帯の形成される内湾平縁の資料、14は内湾する無文の平縁土器である。15は台付浅鉢で、残存部最大径14cm、残存高5cmほどを測る。口縁部文様帯には磨り消しを加え、沈線でモチーフが描出されたようである。鉢部下半には単節縄文が施され、脚台部との間には磨消文帯が形成される。16・17は無文の平縁土器で、口縁部には隆帯を貼り複合口縁としている。18は条線文の胴部資料、19は推定底径7cmほどの無文の底部資料である。20は複合口縁となる口縁部に横位の羽状縄文を施す壺形土器の口縁部である。羽状縄文は、単節RL縄文と単節LR縄文を別々に施すが、RL縄文の末端は絡げてあり、結束部の回転圧痕が認められる。口唇部は内面に明瞭な稜を持ち、丁寧な磨きを加え赤彩される。五領式土器である。土製品 21~24は土製円盤である。いずれも周囲を打ち欠いただけのものである。23は安行式の胴部の資料を素材としている。25は、土製の耳飾である。中心に刺突を持つ楕円を取り巻くように、細い線状の陰刻と陽刻が複雑に入組むもので、陰刻部分には赤色顔料が明瞭に残される。

●調査区出土遺物 (第80・81・82図)

土器 第80図1~3は縄文時代前期後半の資料群である。1は半截竹管による平行沈線で小型の菱形文を連ねると思われる胴部資料である。2は「C」字状爪形文で風車状のモチーフが描かれると思われ一群である。3は縦位の集合沈線の引かれる胴部資料で胎土に砂粒の目立つものである。4は平縁深鉢の口縁部資料で、口縁部無文帯の下の単節縄文を施し沈線が垂下するもの、5は平滑に整形された器面に2条1組の弧線が向き合うように垂下するもので、両脇には円形刺突文が窺われる。6は平縁土器の口縁部資料で、無文の口縁部の下に2帯の縄文帯を巡らせ、口縁部文様帯の上端区画とするもので、文様帯内には、クランク状の縄文帯が窺われる。7は波状縁深鉢の波頂部裝飾突起で、貫通する円窓を中心に、波頂部には外を向く環状の突起、両側には2個1組の円形刺突を、下側には突起から派生する蛇行隆帯に縁取られるような円形刺突を施すものである。8は無文の平縁浅鉢で、外面には「S」字状の蛇行隆帯が、内面位は横走隆帯が付される。9は深鉢形土器の口縁部に付されたメガネ状の裝飾突起である。10は胴部に鋸歯状の集合沈線を持つ浅鉢の胴部資料である。11~13は縄文帯の形成される口縁部資料である。11は口唇部に1条の沈線を引き以下の文様帯に菱形の縄文区画を施すもの、12は口縁部文様帯内に入組弧線文と思われる沈線文の窺われるもの、13は口縁部に5条の沈線からなる縄文帯が形成されるものである。14は2帯の鎖状隆帯を口縁部に巡らせる粗製深鉢である。15は胴部に入組弧線文の縄文帯が形成されるもの、16は2帯の縄文帯の見られる胴部資料である。17は単節縄文の地文上に横走する沈線帯を設け、さらに蛇行沈線を垂下させるものである。18は縦位の沈線が引かれる胴部資料である。19は縄文の施される平縁土器で、口縁部に縦位の筋状の刻みを持つ突起と横位の刻みを持つ突起を組み合わせたものである。20は肥厚する口縁部に縄文帯を配する平縁土器である。21は頭部の縄文帯の上下を刻目文帯で囲す胴部資料である。22は「く」の字に外折する無文の口縁部を持つ平縁土器である。胴部には単節縄文が施される。23は縄文地文の胴部に横走する磨消文帯が形成されるもの、24は胴部の磨消文帯の上部には入組弧線文の縄文帯が、下部には斜行する条線帯が形成されるものである。25は台付土器の脚台部で、破片左側に三叉文、右下に円形のスリットを持つ。26は小壺ないしは注口土器の肩部にあたり、頭部を巡る沈線と胴部へ移

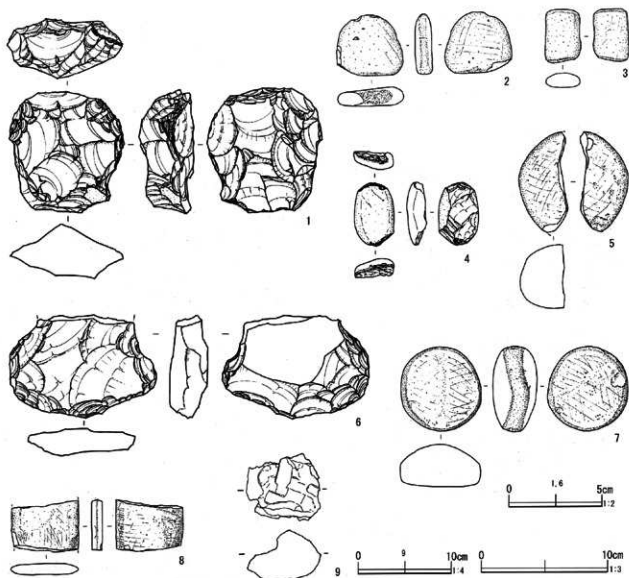


第80图 調査区出土遺物(4)



第81図 調査区出土遺物 (5)

行する縄文区画が窺われる。27~30は細密沈線文系の土器群で、27は外反する平縁深鉢、28は口縁部の屈折する浅鉢である。28~30は矢羽状の沈線が引かれる。31~41は、刺突文帯でモチーフを描く一群である。31は口唇部内削ぎとなる小型の土器で、弧線区画が見られるもの、34は内湾する平縁土器で口縁部文様帯には斜行する刺突文帯や弧線文帯が見られるもの、36・38は入組弧線文に刺突を添えるもの、35・37・40は横走る刺突文帯が器面を巡るものである。41は縦長の刻み風の刺突文の見られる平縁土器である。42は口唇部に1孔の刺突が穿たれる縄文施文の口縁部資料である。



第82図 調査区出土遺物(6)

第9表 正福院貝塚(第2地点)出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
72	28	第1層	礫石	不明	9.7	14.0	3.3	187.7	
72	29	第1層	磨石	閃緑岩	(8.5)	(3.3)	5.2	(208.0)	
72	30	第1層	打斧	ホルンフェルス	(5.3)	7.3	3.8	(217.0)	
76	28	覆瓦1	平基無茎石鏃	黒曜石	1.2	1.2	0.2	0.4	
76	29	覆瓦1	平基無茎石鏃	黒曜石	1.3	1.2	0.2	0.3	
76	30	覆瓦1	射石	射石	(4.1)	3.4	1.5	(6.4)	
76	31	覆瓦1	磨石	硬砂岩	10.2	5.2	(2.7)	(282.0)	
78	27	覆瓦2	二次加工剥片	黒曜石	2.5	1.8	0.6	2.7	
78	28	覆瓦2	ドリル	黒曜石	3.3	1.7	1.1	5.1	
78	29	覆瓦2	剥片	黒曜石	5.2	2.8	1.7	20.8	
82	1	調査区	石核?	チャート	6.5	6.0	2.8	125.8	
82	2	調査区	磨石兼礫石	硬砂岩	4.7	5.2	1.3	57.5	
82	3	調査区	砥石	砂岩	(3.8)	2.8	1.1	(15.4)	
82	4	調査区	礫石	ホルンフェルス	4.9	3.1	1.3	28.7	
82	5	調査区	磨石	安山岩	8.0	(3.4)	5.0	(188.9)	
82	6	調査区	分銅形打斧	ホルンフェルス	(5.5)	7.8	2.0	(87.6)	
82	7	調査区	磨石	閃緑岩	6.5	6.3	3.4	205.0	
82	8	調査区	砥石	硬砂岩	(3.9)	5.3	0.9	(30.7)	

第81図1~13はいずれも無文の口縁部資料である。1は内面に斜行する整形痕が残される。2~5・7~10は複合口縁となるものである。6は双頭となる突起の付されるもので、横位の整形痕が顕著である。11~13は口縁部の外反するもので、12では括れ部に1条の沈線が引かれる。13は口径16cm、残存高12cmを測るもので、体部には斜行する整形痕が残される。14~19は底部資料である。14は推定底径9.5cmを測る無文の底部で底面に網代痕を残す。16は細密沈線の施される脚台部の脚端部である。18は推定底径10.5cmほどと思われるもので、内外面とも丁寧なナデ整形が施されている。20は口径11cm、器高5.5cmほどの磁器碗である。青絵で菊花文が描かれる。23は推定口径22cm、残存高16.5cmほどの波状縁深鉢である。5単位の波状縁を呈するものと思われ、肥厚する口縁部に単節縄文を施す縄文帯を持つ。魚尾状を呈したと思われる波頂部から差し切るような刺突を施す大振りの2段の貼瘤を垂下させる。これを頂点とする三角形の磨消区画を持ち波底部は上向きの磨り消しの弧線区画となる。幅広の磨消文帯を挟んで1帯の縄文帯を施し文様帯を閉じている。要所に双刺瘤を付す。

土製品 第81図21・22は土製円盤である。両者とも無文の土器片を素材とする。

石器 第82図1はチャート製の石核と思われる。裏面を打面とし周縁部から不規則に剥片剥離作業を行っている。2・4は敲石である。前者では、下端に敲打面が残される。後者は、両側の小口に敲打痕が残され、剥片剥離の際の間接打撃に用いられたものと思われる。裏面は作業中に剥離したものであろう。3はレンズ状の断面をなす扁平な資料である。比熱し脆いもので、小口も欠損後時間の経過が認められる。石剣の残欠と思われる。5・7は磨石である。前者は1/3程度の残欠で、厚みのある円礫を素材とし面取り整形は行われない。使用は両面に及ぶ。後者は、断面が凸レンズ状を呈する中高の資料で、円形の円礫を素材とし周縁部に面取り加工を施す。使用は両面に及ぶ。6は分銅形の打製石斧である。括れ部から欠損し刃部だけが残される。8は砥石と思われる。扁平な砂岩製で、両面に研磨痕が残される。

鉄滓 第82図9は炉内滓と考えられる鉄滓である。長さ6.9cm、幅7.8cm、厚さ5.2cm、重量は215.0gを測る。表面に3箇所、扁平な面が認められ、鉄塊利用を試みてカットした痕跡の可能性も考えられる。磁着度は2であった。

V 総 括

1 入耕地遺跡

第8地点では多数の溝跡が確認された。特に調査区の北寄りと東寄りには「濠」とも呼ぶべき大溝（第6・12号溝跡）が展開していた。出土遺物は主に近世の陶磁器・土器類であったことから近世には存在していたと考えられ、その後も数回掘り直しを受けながら近年まで排水路として機能していたようである。またこの大溝には多数の並行ないし接続する溝跡も確認された。

調査区の北半部には溝跡とほぼ同時期の土坑が集中していた。調査区内でも場所によって土地利用が異なっていたようである。

第8地点は、試掘調査の段階から不自然な地番割りが注意されていた。前述の大溝はこの地割をトレースし、かつ小字の「茶屋」と「東」との境界とも合致していることから、当遺構が元になって後世の地割に影響を及ぼしたと考えられる。さらには、この大溝は第8地点南西側の中世館跡を核とした一帯を取り囲む、外堀のような役割を兼ねていた可能性も考えられる。

第9地点は、第8地点の南側に展開する土坑や溝跡を検出した。小規模な調査ながら、第8地点の内容を補完する調査成果を得ることができた。

第11地点は、縄文時代の遺構と中・近世の遺構が密度濃く検出された。縄文時代後期の遺構として住居跡1軒（第1号住居跡）を検出したが、掘り込みや床面は認められず、柱穴の確認のみにとどまっている。中・近世の遺構によって縄文時代の遺構が相当数削平されたことが考えられ、検出数以上に縄文時代の住居跡が当地点に展開していた可能性がある。

調査区北端より検出された第1号竪穴状遺構からは、床面付近より15世紀代の所産と思われる陶器片（土塙の口縁部）が出土したことから、当遺構の帰属時期も中世末頃のものである可能性がある。また、遺構内からは、縄文時代後・晩期の縄文土器が多数出土した。当地点の隣地には縄文時代後・晩期の環状盛土遺構から存在することから、削平された盛土が竪穴状遺構の覆土として堆積したものと考えられる。

中・近世の小穴群は調査区中央部に集中する傾向があり、東西方向に櫛列あるいは杭列が並んでいたものと考えられる。この櫛列を挟んで南北とでは、遺構の密度が極端に異なる。櫛列の北側には、掘立柱建物跡が4棟、井戸跡が2基（内1基は近世）検出されるとともに、長方形土坑が多数検出されている。第4号掘立柱建物跡は、庇付のものであった。長方形土坑の中には、銭貨が出土したのもあり、墓として用いられたものも含まれていたと思われる。櫛列の南側は一転して遺構の密度が希薄となる。調査区南側には東西方向に延伸する溝跡が1条認められ、櫛列とともに調査区内を南北に分割する意図を持つものと考えられる。

検出された掘立柱建物跡や櫛列からは、明確な帰属時期を決定する遺物の出土が認められなかったが、近接する既報告の第2地点の調査成果と照らし合わせると、14世紀中葉から16世紀にかけて存続した入耕地館跡を構成する遺構の一部であった可能性が高い。入耕地館跡は、武蔵七党の内、野与党の鬼産氏の居館と位置付けられ、近年の調査結果から、本格的な防衛機能を有する軍事的拠点としての側面が明らかになりつつある。第11地点で検出された溝跡や櫛列も、館跡敷地内における南北の区画を意図して設けられたものと考えられる。

2 正福院貝塚

正福院貝塚では、オキシジミ・アサリを主体とする縄文時代の貝塚が寺域内に数地点みられる。古くより一帯は貝塚遺跡が分布するとして研究者には知られていたが、正福院貝塚における正式な発掘調査は、昭和62年度に本堂の建て替えに伴い行われたのが初である。同調査では貝塚は確認されなかったものの、縄文時代前期の住居跡、古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓、中世の掘立柱建物跡、地下式坑などが検出された。

現在も寺域東側の林一帯には多量の縄文土器の散布が認められ、正福院貝塚自体も中世には成立している寺院である。南側の谷向かいに隣接する入耕地遺跡では同時期の縄文時代の集落跡、中世武士の館跡が発掘調査で判明しており、両遺跡は谷を囲んで一体的に営まれた可能性も示唆されている。

調査区は、擁壁建設範囲に合わせた関係で、幅1~2m、延長約20mの斜面を横切るような細長いものとなった。調査区の南側の区画では、地表下40cm程まで多量の縄文土器が出土し、その下層で縄文時代の焼土跡やピットなどが検出された。ピットは住居跡を構成する可能性があるが、調査範囲では全貌は掴めなかった。

出土遺物は、正福院貝塚から入耕地遺跡にかけて展開する環状盛土遺構由来のものであり、縄文時代後期から晩期のものが主体であった。

参考文献

- 奥野友生編 1994 『正福院貝塚』白岡町遺跡調査会調査報告書第2集 白岡町遺跡調査会
- 奥野友生編 2010 『入耕地遺跡—第1・3地点—』白岡町遺跡調査会調査報告書第9集 白岡町遺跡調査会
- 奥野友生編 2012 『入耕地遺跡—第4・7地点—』白岡町遺跡調査会調査報告書第10集 白岡町遺跡調査会
- 奥野友生・松崎慶喜編 1996 『入耕地遺跡（第2地点）』白岡町埋蔵文化財調査報告書第8集 白岡町教育委員会
- 松崎慶喜編 2007 『入耕地遺跡（第5地点・第6地点）』白岡町埋蔵文化財調査報告書第16集 白岡町教育委員会

写真図版



掘削作業状況 (1)



掘削作業状況 (2)



実測作業状況 (1)



実測作業状況 (2)

図版2 入耕地遺跡（第8地点）



トレンチ2



トレンチ6



トレンチ7



トレンチ9

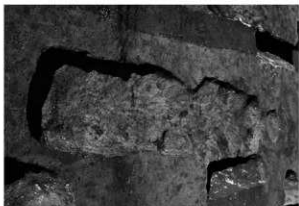
图版4



第1号土坑



第2号土坑



第3-4号土坑



第5号土坑



第6号土坑



第7号土坑



第8号土坑



第9号土坑



第10·11号土坑



第13号土坑



第14号土坑



第16·24号土坑



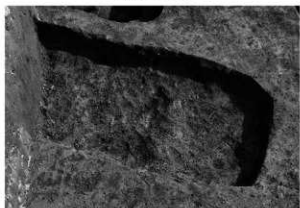
第17号土坑



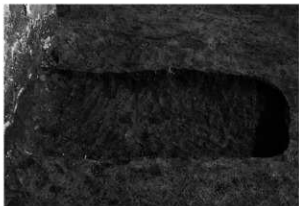
第18号土坑



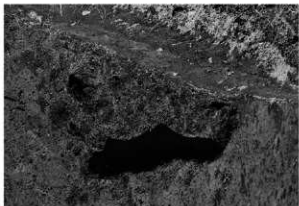
第19号土坑



第25号土坑



第26号土坑



第27号土坑



第31号土坑



第32-33号土坑



第34号土坑



第35号土坑



第36号土坑



第39号土坑



第5-9号沟迹



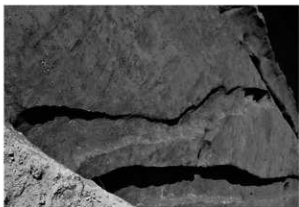
第6号沟迹



第8-12-17号沟迹



第9号沟迹



第10号沟迹



第11号沟迹



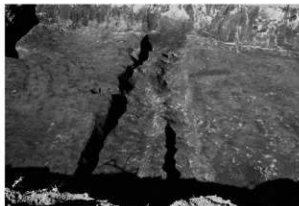
第12号沟迹



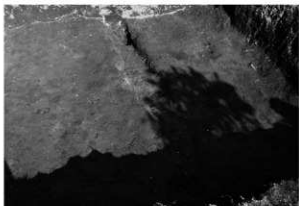
第13号沟迹



第14号沟跡



第15号沟跡



第21号沟跡



第24号沟跡



第26号沟跡



第27号沟跡



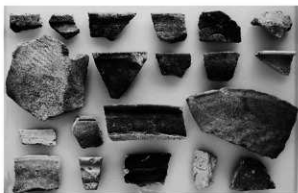
第28号沟跡



第1号井戸跡



土坑出土遺物 (1) (第13図)



溝跡出土遺物 (3) (第16図)



溝跡出土遺物 (1) (第14図)



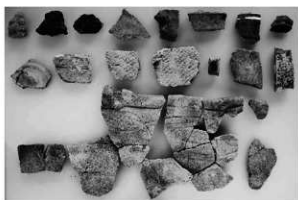
溝跡出土遺物 (4) (第17図)



溝跡出土遺物 (2) (第15図)



調査区出土遺物 (1) (第21図)



トレンチ1～5出土遺物 (第19図)



トレンチ7～11出土遺物 (第20図)



調査区西部全景



調査区東部全景



第40号土坑



第41号土坑



第42·43号土坑



第30号沟迹



第31号沟迹



調査区出土遺物 (2) (第24図)



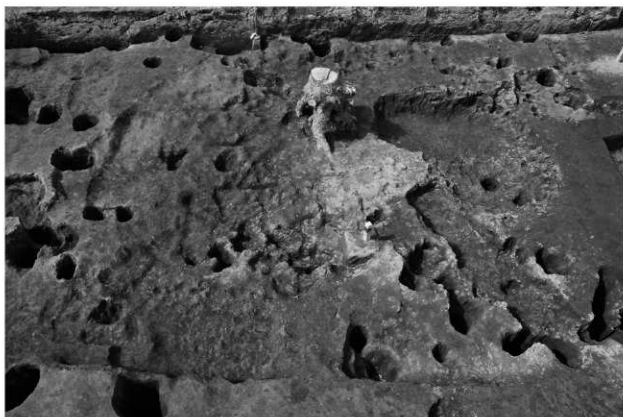
調査区全景（北より）



調査区全景（南より）



第1号住居跡



第1号竖穴状遺構



第44·45·159号土坑



第46号土坑



第48号土坑



第49号土坑



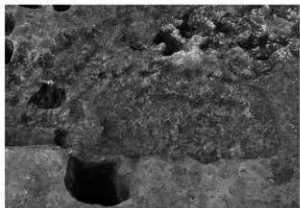
第51号土坑



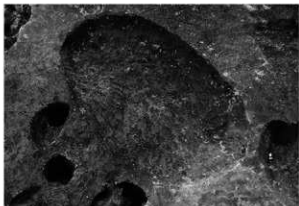
第52号土坑



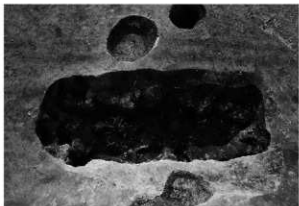
第54·55号土坑



第60号土坑



第72号土坑



第73号土坑



第74·75号土坑



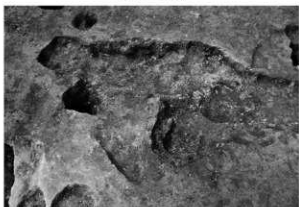
第76号土坑



第77号土坑



第78号土坑



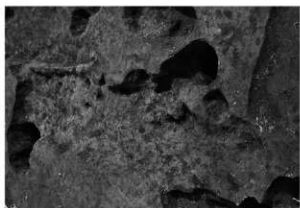
第80·81号土坑



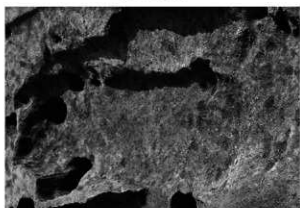
第84~86·89·105号土坑



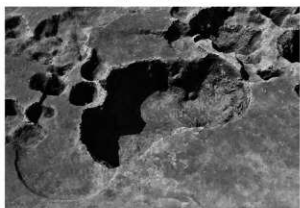
第90号土坑



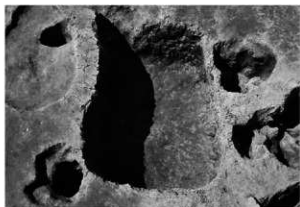
第142号土坑



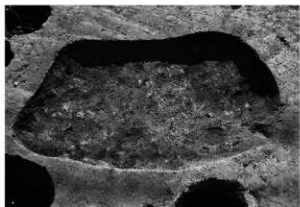
第144-145号土坑



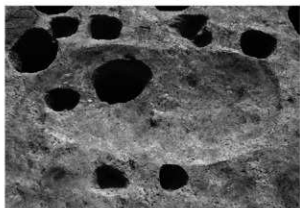
第170~172号土坑



第176号土坑



第182号土坑



第183号土坑



第185号土坑



第186号土坑



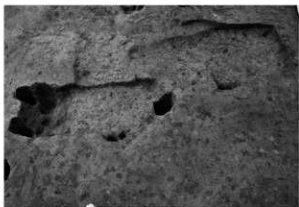
第190号土坑



第192~196号土坑



第197号土坑



第199~202号土坑



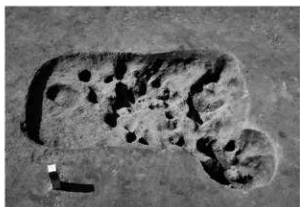
第203·204·212号土坑



第208·209号土坑



第213号土坑



第217号土坑



第221·222号土坑



第223号土坑



第225号土坑



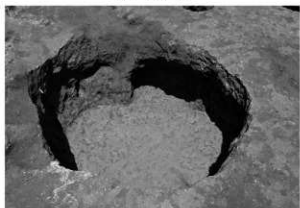
第232号土坑



第2号井戸跡



第3号井戸跡



第1号地下式坑



第32号溝跡



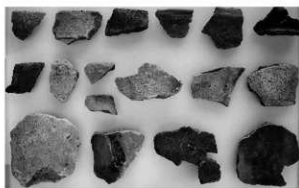
調査区北半部槽列跡



竖穴状遺構出土遺物 (3) (第38圖)



竖穴状遺構出土遺物 (1) (第36圖)



土坑出土遺物 (2) (第40圖)



竖穴状遺構出土遺物 (2) (第37圖)



土坑出土遺物 (3) (第43圖)



土坑出土遺物 (5) (第49圖)



土坑出土遺物 (4) (第45圖)



土坑出土遺物 (6) (第54圖)





土坑出土遺物 (7) (第57図)



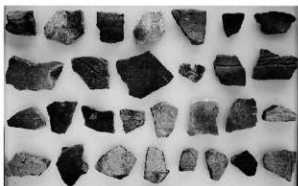
グリッド出土遺物 (1) (第63図)



溝跡出土遺物 (5) (第59図)



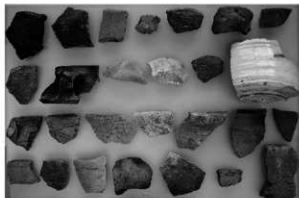
井戸跡出土遺物 (第61図)



グリッド出土遺物 (2) (第64図)



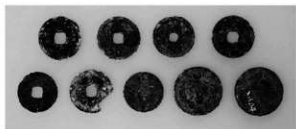
グリッド出土遺物 (3) (第65図)



グリッド出土遺物 (4) (第66図)



グリッド出土遺物 (5) (第67図)



調査区出土遺物 (3) (第68図)



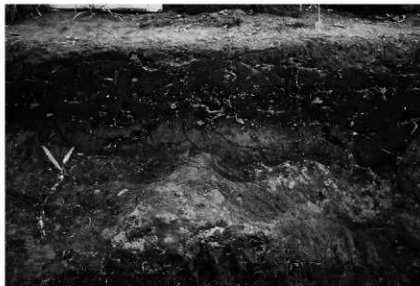
北側調査区全景



南側調査区全景



調査地点遠景



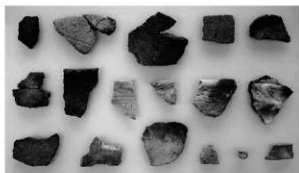
南側調査区東壁



南側調査区第2層遺物出土状況



焼土跡検出状況



土坑・ピット・焼土跡出土遺物 (第70図)



第2層出土遺物 (1) (第72図)



第1層出土遺物 (1) (第71図)



第1層出土遺物 (2) (第74図)



第2層出土遺物 (2) (第73図)





搅乱 1 出土遗物 (1) (第 75 图)



搅乱 2 出土遗物 (1) (第 77 图)



搅乱 2 出土遗物 (2) (第 78 图)



搅乱 1 出土遗物 (2) (第 76 图)



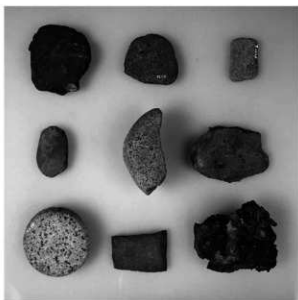
搅乱 4 出土遗物 (第 79 图)



調査区出土遺物 (4) (第80図)



調査区出土遺物 (5) (第81図)



調査区出土遺物 (6) (第82図)

報告書抄録

イリゴウチイセキ(ダイハチ・キュウ・ジュウイチチテン)・ショウフクインカイヅカ(ダイニチテン)										
書名		入耕地遺跡(第8・9・11地点)・正福院貝塚(第2地点)								
副書名		市内遺跡群発掘調査報告書XXV								
シリーズ名		白岡市埋蔵文化財調査報告書第27集								
編著者名		杉山 和徳 奥野 麦生								
編集機関		白岡市教育委員会								
所在地		〒349-0292 埼玉県白岡市千駄野432 TEL. 0480-92-1111								
発行年月日		2018(平成30)年3月30日								
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因		
		市町村	遺跡	北緯	東経					
入耕地遺跡	第8地点 白岡910-1他	11445	018	36° 01′ 06″	139° 39′ 29″	第8地点 20071206 ～ 20080219	第8地点 2,000	第8地点 分譲住宅		
	第9地点 白岡910-2、-3					第9地点 20090911 ～ 20090918			第9地点 156.69	第9地点 個人住宅
	第11地点 白岡908-1、909-7					第11地点 20130408 ～ 20130611			第11地点 1,278.98	第11地点 宅地造成
正福院貝塚	白岡941	11445	019	36° 01′ 06″	139° 39′ 29″	20010417 ～ 20010419	65.1	寺院		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項		
入耕地遺跡	集落	縄文時代後・晩期中・近世		住居跡1軒 掘立柱建物跡4棟 竪穴状遺構1基 土坑235基 溝跡32条 井戸跡3基 地下式坑1基		縄文土器・陶器・磁器・土製品・石器・鉄滓		縄文時代後・晩期の集落跡と中世の館跡と考えられる柱穴を多数検出した。		
正福院貝塚	集落	縄文時代後・晩期		土坑1基		縄文土器・陶器・磁器・土製品・石器・鉄滓		縄文時代後・晩期の環状盛土遺構内を調査した。		
<p>遺跡の概要</p> <p>入耕地遺跡と正福院貝塚との間に入る「堂磯の谷」を囲むように形成された縄文時代後期から晩期の環状盛土遺構に伴う遺物が多く出土した。</p> <p>入耕地遺跡では、掘立柱建物跡や欄干、杭列などの中世の館跡に伴う遺構を検出した。</p>										

白岡市埋蔵文化財調査報告書第27集

入耕地遺跡 (第8・9・11地点)
正福院貝塚 (第2地点)

市内遺跡群発掘調査報告書XXV

平成30年3月23日 印刷

平成30年3月30日 発行

発行 白岡市教育委員会

印刷 朝日印刷工業株式会社